

スタッフの声



赤崎 夢 看護師
N T T 東日本関東病院

少しでも力になればと希望した私が直面したのは、クオリティ高い“ケア”と感謝の言葉に溢れた現場だった。

それらを成しえる為の、揮発点は“絶望”だったかもしれないが、形にする原動力も絶望に抗う“誰かの為に”という思いがあり、それはセンターの中に留まらなかった。

ホテルには、ホテルスタッフや地元の人、府知事、企業まで、感謝と応援で溢れており、それが“明日も頑張ろう”と患者さんへ還元する事に繋がっていた。

センターでの勤務は、特別な事をなすのではなくて、シンプルに“誰かの力になりたい”というNsとしての初心に戻すものであり、また、updateするものでもあり、“支援”に伺った筈の自分が、ここに書ききれない程の“宝”を得ることとなった。

末筆ではありますが、様々なご支援を頂きました大阪コロナ重症センターに関わる皆様、私共を送りだすため協力して下さいました皆様にはこの場をお借りし深く御礼申し上げます。



安藝 美奈 看護師
災害人道医療支援会

私は災害人道医療支援会 HuMA から看護師として、大阪コロナ重症センターに4回着任しました。

いつも赴任要請時は、重症者の死亡者が増加した時でした。実際現場で働くと、その現実私の想像を遥かに超えるもので、毎日重症者の死を目の当たりにし、無力感を感じ同僚と涙を流す瞬間も少なくありませんでした。

しかし、一人でも多く助けたいという志を持った仲間と結束し、共に日々直面する困難を乗り越え、最善のケアを提供することに尽力しました。

重症センターに集まった医療者は、勤務する病院が違えば、専門分野も違っていました。それぞれ際立つスキルを持ち合わせており、この尊敬できる仲間たちに支えられ、わたしは、勇往邁進できたのだと思います。

最後にこの施設がなければ、さらに多くの人々が命を落とし、被害は拡大していたと考えます。全国初の重症患者専用の臨時病院。これからの災害時のロールモデルになると考えています。この過酷な現場で尽力できたことを誇りに思い、これからも社会貢献していきたいと思ひます。



天粕 魁人 看護師
独立行政法人国立病院機構
大阪南医療センター

私は2/17から3/16まで大阪コロナ重症センターで、新型コロナウイルス感染症に罹患し重症化した患者様の看護に従事しました。

今回の派遣における自己の目標は、「未知の感染症の重症化リスクや病態などを考えながら看護を行い、急性期からの離脱を目指す」でした。この目標達成のため、人工呼吸器管理中の患者様の苦痛緩和を主軸に日常生活援助やリハビリを行い、人工呼吸器の離脱に向けた援助ができたと考えています。

様々な病院から大阪コロナ重症センターに集まりチーム一丸となって安全に介入できていたのは、各種マニュアルが電子カルテから閲覧可能であったこと、個々の経験レベルに合わせて患者が割り振られたこと、重症患者を受け持つ際はフォロー看護師がタイムリーに相談への対応・助言してくれたためと思います。

4週間と短い期間でしたが、未知の感染症に対する看護介入を実践することができとても貴重な経験となりました。



天野 浩司 医師
地方独立行政法人堺市立病院機構
堺市立総合医療センター

私は非常勤医師として毎月1回程度の日勤、夜勤業務で本施設での診療に携わりました。

当初はCovid-19に関する情報が曖昧で錯綜しており、死亡者に関するニュースも連日報道されました。自らの感染や家族に感染させるかもしれないという恐怖に近い感情をほとんどの医療従事者が持っていたと思われます。その状況下各地から集まった看護師や、コロナ重症診療に専従された大阪急性期・総合医療センターのスタッフの皆様には本当に頭が下がる思いです。

多くの患者様がこの施設で救われた一方で、懸命な努力にも関わらず亡くなられた患者様もおられます。最後を家族に看取られることも叶わなかった。大変つらく悲しいことです。

人々を苦しめたコロナ禍もようやく終息の兆しが見えてきました。この闘いの中で大きな犠牲を払いながらも人類が得た叢智が、これから社会の幸せを支える大きな力となることを祈っています。



兩宮 優 医師
大阪医科薬科大学病院

私は2021年の8月から群馬から大阪へ転職し、大阪コロナ重症センターでの非常勤を始めました。当時大阪では第4波

の終わりを迎え、重症者の数がピークに達している時期であり、第5波の始まりに突入していた時期でした。前職でもコロナ重症患者の対応に圧倒されておりましたが、大阪では重症者の数も桁違いに多く、府全体で全力でコロナに打ち勝とうとしていた様子が印象的でした。大阪コロナ重症センターは重症者を30名診療できる全国でも有数の施設であり、働いているスタッフも使命感と高いプロフェッショナリズムを持って重症者の対応にあたっており、その活動に少しでもお役に立てたことを嬉しく思い返します。世界規模のパンデミックは悲劇であり二度と起こらぬように願っていますが、パンデミックはいつか必ず繰り返すことは歴史が証明しており、今回のコロナが未来のパンデミック対応の強力な教訓となることを切に願っております。



有地 正人 看護師
社会医療法人きつこう会
多根総合病院

私は、大阪コロナ重症センターの開設当初に勤務させて頂きました。たくさんの病院施設からエキスパート達が集結して

おり、患者の生命を守るために団結して対応しました。その時の経験は私自身の勉強にもなり、チーム医療の大切さを切実に感じる事ができました。このような経験は、このセンターに行かなければ得られなかったものだと思います。2023年5月8日より第5類感染症となりましたが、感染症対策を自施設で徹底し、大阪コロナ重症センターでの経験を活かしていきたいと思ひます。



栗倉 康之 事務
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

振り返れば、2020年5月頃のことだったでしょうか、第1波収束の時期だと思ひますが、大阪府の担当より「災害棟の体

育館にコロナ患者用の仮設病棟を作りたい」という相談から、この事業はスタートしました。まだコロナがどのような病気かもわからない状況の中で、大阪府の担当といろいろ議論を交わし、その中で出てきた仰天案が、駐車場にプレハブICU病棟を臨時医療施設として設置し、6か月後の12月から運用を開始するという、病院側からすればとんでもないプランが飛び出してきたのを鮮明に覚えています。あれよあれよという間に事業開始が決定し、設置根拠法令や各種契約主体の調整、府との費用負担調整など、通常のコロナ対応業務に加えてOC4設置準備に奔走した思い出がとても印象に残っています。かなりの労力を費やした準備期間でありましたが、無事に運用開始から終了を迎えられ、その役割を十分に果たすことができました。皆様お疲れさまでした。



飯田 英明 看護師
信州大学医学部附属病院

私は、第5波デルタ株が世界的に蔓延した時、在籍型出向として2週間就業した。自施設においては、重症コロナ患者を専

門に対応する部署に所属していた。そのため、挿管人工呼吸管理・膜型人工肺管理など集中治療を要する患者の対応に関しての不安はなく就業できると考えていた。しかし、コロナワクチン接種が開始される以前の段階であったため、自身が感染するという恐怖心はあった。

実際に大阪コロナ重症センターにて実務を開始してからは、業務的に不慣れなため大きな戸惑いを感じた。しかし、先に勤務されていたスタッフからのご助言により、円滑に患者を診ることが可能となった。

全国から集中治療に精通した医療スタッフが集結し、各種集学的治療が施されるが、残念ながらお亡くなりになる患者に関わる事もあった。そのような結果を目の当たりにし、自身の無力さを感じたが、次の患者の対応に追われる日々の中、2週間の出向は終了した。



飯盛 麻姫 看護師
公益社団法人大阪府看護協会

私は立ち上げから重症センターに関わらせて頂きました。最初はマニュアルも数少なく、本当に手探り状態で、少ない人数で手を取り合って進んでいました。そこから2年4ヶ月、少なかったマニュアルも皆で沢山作りあげ、不十分な部分はありましたが混乱しづらい環境になったと感じます。第4波の時は、走り回る毎日。見送る患者様も何人もいらっしゃいましたが、悲しむ暇もなく次の患者の受け入れという状態でした。しかし、看護の力で元気になって転院される方もいたので、その姿を見てとても嬉しかったのを覚えています。長期入院されていた方が、転院先も退院し、当施設まで挨拶しにきてくれたことがあり、入院中看護師にこんな風にしてもらったとエピソードを話してくれました。その後、より一層よりよい看護を提供したいと強く思いました。本当に沢山のことを学ばせていただきました。看護師人生に留まらず、自分の人生に活かしていきたいと思っています。



池嶋 一也 看護師
鳥取大学医学部附属病院

私が派遣された当時は、重症患者数が増加し各地で病床逼迫が問題になり始めた時期であった。自分自身が新興感染症の対応に慣れていないことに加え、知らない人との協働にとっても不安を感じていた。毎日のように転院・亡くなる方、新たに転院されてくる方がおられ壮絶な状況であった。そのような状況の中で、指導担当の方を中心に丁寧な指導をして頂き、抱いていた不安を解消でき大変動きやすい環境であった。レッドゾーンではPHSを使用せずインカムを使用し、チームでの情報共有や各ゾーン間での連絡などに活用されていた。FULL PPEを装着しており、コミュニケーションがとりにくい状況で、とても有効なツールであると感じた。また、家族看護についても「コロナだからできない」ではなく、タブレットを使用し患者と家族が対面でき、双方の安心へつながっていると実感できた。2週間、とても貴重な経験であった。



石田 健一郎 医師
独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、多くの医療機関で患者数が急増し、医療現場は深刻な状況に直面した。その中で、大阪コロナ重症センターでの勤務は、非常に貴重な経験であった一方で、多数の重症患者の収容と治療を担うことに対し、多大な責任とプレッシャーを感じた。一人一人の患者と向き合い、治療の進捗や症状の変化を見極めながら、最善の治療を提供することが求められた。その差異、医療スタッフ同士のコミュニケーションとして日々の報告や情報共有を行い、患者の治療にあたるのが非常に重要であった。患者が重症化し、治療が難航することもあったが患者や家族に対し理解と安心を提供することも、医療スタッフの重要な役割であると再認識した。自分自身としても多くのことを学び、医師として成長することができたと実感している。この経験を活かし、今後も患者の命を守るために努めていきたい。

磯谷 瑞希 看護師
大阪医科薬科大学病院

当院でのコロナ重症患者との関わりをとおり、コロナ重症患者の看護に携わりたいと考え、2021年1月(第3波)と3月(第4波)にセンターで勤務させていただきました。センターでは、多様な経験をもつスタッフと共にケアを実施し、主に呼吸管理、呼吸リハビリテーションなどコロナ重症患者に特化したケアを学ぶ機会をいただきました。そして重症患者に対して、積極的なリハビリテーションや腹臥位療法を実施しました。自施設でも、コロナ重症患者に対して、センターで学び、経験させていただいたことを活かし、その患者に必要な呼吸管理、呼吸リハビリテーション看護の実践をしていきました。また、この経験は同僚にも、知識、技術を伝えることができました。コロナ感染によって重い後遺症やお亡くなりになられる方が、一人でも少なくなるように重症センターでの学びを活かし、患者一人一人に合った看護を提供していきます。ありがとうございました。



伊藤 弘 医師
大阪大学医学部附属病院
高度救命救急センター

大阪コロナ重症センターの運用が開始された2020年12月から2021年3月まで勤務を担当しておりました伊藤弘と申します。この度は、貴重な機会をいただきありがとうございました。大阪コロナ重症センターを開設するにあたり、スタッフとしての勤務のお話をいただいたときは何も考えず二つ返事で引き受けました。このような自分が社会に必要とされているのであれば小さなことでもいいからやってみよう、そうでなければ前に進まないからという気持ちでした。現場では全国から集まってこられた看護師の方も含め、数多くのスタッフが全員で患者様に元気になってもらおうと治療に向き合っていました。非常に志の高いスタッフばかりで、今まで勤務してきた中で一番質の高い医療を提供できたのではないかなと思えるほどでした。大阪コロナ重症センターは2023年3月で閉鎖となり、大きな任務を終了することになるかと思えます。ここで得た経験は決して無駄にはせず、明日の医療につなげていきたいと思えます。大阪コロナ重症センターに携わってくださいました全てのスタッフの皆様方、本当にありがとうございました。



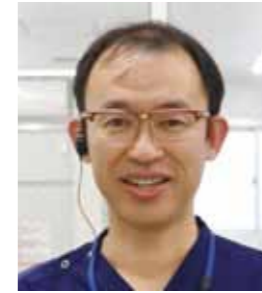
伊藤 裕介 医師
大阪府済生会千里病院
千里救命救急センター

当院の大阪コロナ重症センターの勤務は2021年1月1日より開始し、当初は毎週金曜日の夜勤が担当であった。2022年10月からは、勤務者確保が困難となり、隔週奇数日の金曜日の夜勤を担当し、延べ171回約12人が担当した。大阪コロナ重症センターで重症患者を集約することで、大阪各所の重症コロナ患者に対する治療を学ぶことができ、さらに大阪コロナ重症センターで一貫した治療方針に従いながら、治療経過を学ぶことができた。また、重症コロナ患者特有の問題点である多剤耐性菌の発生や、日和見感染の出現は、集約したことで明確化した面もあり、当院での重症管理においても治療経過の推測に参考となった。しかし、当院での勤務の合間や休みの時に、勤務していたため、体力的には大きな負担となり、この点は改善の必要があった。総じて大阪コロナ重症センターの取り組みは、all大阪でパンデミックを乗り切る最善の策であったと考える。



稲垣 亜希子 看護師
公益社団法人大阪府看護協会

第3波に急ぎ足で開設し、第4波では30床が呼吸器装着患者で埋まり、第5・6・7・8波間における大阪急性期・総合医療センターへの出向とクラスター派遣、中等症受け入れにともなう増床など思い返せばたくさんの出来事が走馬灯のように浮かんでいきます。各々のスタッフの強みを活かしての看護の質向上への活動は、とても有意義で刺激となりました。まさにゼロスタートだった家族ケアの進展、新たな取り組みだった看護診断では、チームダイナミクスを感じ取れる場面が多数あったと自負しています。その反面、力のあるスタッフが多数在籍していたので、その力をもっと発揮できるチャンスがあったのではと感じる部分もあります。また、「公平」と「平等」の違いを常に考えさせられました。適正なクリニカルラダー評価に基づいた適材適所への人材配置、教育システムに関しては先を見越して早期から構築する必要があったと振り返ります。開設から閉鎖までの2年4ヶ月、スタッフの皆さまに支えられて走り切ることができました。ありがとうございました。



入澤 太郎 医師
大阪大学医学部附属病院
高度救命救急センター

阪大救命からの医師として、吉村・伊藤が立ち上げに携わった後、常時1名が2年間勤務しました。当初は入澤、島崎、射場、酒井、その後、中尾、米田、計6名で勤務しました。私自身が最初でしたが、当時は診療手順を他の勤務者にお伺いするのも憚れるほどの忙しさでした。そのため、既に木口・川田先生作のマニュアルのブラッシュアップを行い、私以降当院および繁忙期に公立大学からの派遣医師の就業前のオリエンテーションを早朝にさせて頂いたのが良い思い出です。病棟で何か問題が生じたら、改善に向け医師看護師が垣根なく相談して乗り越えていたことに感銘しました。熱心で優秀な自治医大卒の若手先生方や、他施設からの看護師さん達と知り合えたことも大きな財産です。そして、当センターから派遣の高橋・福森MSWや他施設からの後藤MSW他と良い連携で転院調整したり、この歳になってCVルート確保や気管切開したことも救急医冥利につきました。



上大藪 智子 看護師
 県民健康プラザ鹿屋医療センター

令和2年12月にコロナ重症センターの開設にあたり、各病院への協力要請があり、鹿児島から参加しました。重症センターに到着し、次の日から患者受け入れがスタートとなり、CCU経験者とあったが自分は経験は無く、人工呼吸器装着の患者を見ることはあっても、器械が違ったり、場所が違ったりと不安が一杯で、次の日の夜勤後はストレスに寄る蕁麻疹に悩みました。しかし、グリーンゾーンでの夜勤にて、みんなと協力しながら、依頼のあった物を渡したり、場所を考えたりと楽しく仕事が出来ました。インカムを使用しての作業は、依頼がわかりやすく、作業もしやすいものでした。毎日仕事終了時に、問題点などを出し合い、カンファレンスをする事で、改善をすることが出来たことは、とても良いことだと感じました。その日勤務する時も、昨日の良かった点などを話し合い、協力しやすい状況でした。ホテルまでの送り迎えのバス、朝食のお弁当など大阪府からの配慮やいろいろかたの差し入れにも感謝。

植田 璃毅 看護師
 地方独立行政法人
 市立東大阪医療センター

私はコロナ第3波終盤の2021年3月に、大阪コロナ重症センターへ応援に行かせていただきました。大阪コロナ重症センターで勤務するスタッフは、病院や看護協会から派遣されたスタッフであったが、指揮・命令系統が確立され、労務環境が整っていました。安全に治療と看護を提供するために、看護師だけでなく医師もデブリーフィングを毎日行っていることに驚きと感銘を受けました。また、ゾーニング別にリーダーやサブリーダーが配置されており、スタッフが相談しやすい環境で良かったと思います。



上野 久美
 公益社団法人大阪府看護協会
 管理部

大阪コロナ重症センターの運用に伴い、看護師の採用と会員の所属病院への協力依頼で奔走した。令和2年12月1日から準備のため看護師13名が出向となったが、その後も面接が続き看護師確保に追われた。遠方からの採用者とは宿泊先のホテルで採用書類の説明をすることもあった。翌年、4月からは、新たに大阪府との合同面接で50名余りを雇用した。毎月退職者があり引き続き採用が行われ、常時100名程度を確保した。北海道や九州からも応募があり、勤務先を休職して来る人もいた。慣れない環境で職場に馴染めず体調を崩す人もいて、メールや電話のやり取りも増えていった。宿泊療養など他の業務で人員不足の場合は兼務もあり、人事課では給与明細に別明細を付けるなど工夫をした。雇用に関してはすべてが順調であったわけではないが、看護師の理解と大阪府担当者との協力で業務を終えることができ、とても貴重な経験となった。

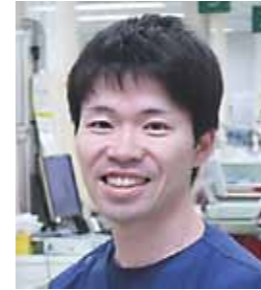


上野山 充 臨床工学技士
 地方独立行政法人大阪府立病院機構
 大阪急性期・総合医療センター

大阪コロナ重症センター（以下OC4）の開設に伴い、機器の準備などに当たらせていただきましたが、新型コロナウイルス感染拡大初期の段階での準備となったため、当センター内の集中治療に関する機器や物品の供給が十分でない中、OC4開設までに機器の準備が間に合うのか不安であったと記憶しています。

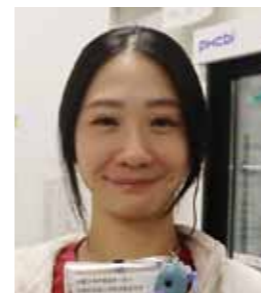
臨床工学技士の集中治療部門への関わりはそれぞれの施設の特色に合わせて様々であり、また、OC4の業務に来ていただいた医師、看護師も様々な施設から来ていただいていたので、OC4での機器の取扱や、職種間の業務分担に関して一部混乱した時期もありましたが、時間の経過とともにすり合わせができたと感じています。一部臨床工学技士の業務の運営にご迷惑をかけたかもしれませんがご理解いただければと思います。

今回のOC4開設、運営に関して多くの経験を得られました、これらの経験から当センターの災害対策などに生かせればと考えます。



生塩 典敬 医師
 大阪医科薬科大学病院

大阪府に重症センターが立ち上がった当時、私は大阪府に勤務しておりませんでした。大きなプロジェクトが本当に上手くいくのだろうかと遠くから勝手に心配しておりました。ただ、私自身が大阪に転勤となり、実際に大阪に来てみると大阪コロナ重症センターが大阪府の医療行政にフィットし、一医療機関として活躍していることに衝撃を受けたのを今でも覚えています。また、実際に大阪コロナ重症センターで働かせて頂き、そこを支えているスタッフの方の真摯に医療へ向かう姿勢にも感動しました。確かに、医療を支えるこのようなシステム作りは本当に大切ですが、やっぱり医療を支えるのは人であり、「人を救うのは人」なのだと思えて改めて学ばせて頂きました。大阪コロナ重症センターに多く勤務することはできませんでしたが、少しでも大阪府の医療行政に携わる機会を頂いたことに感謝します。ありがとうございました。



梅原 志織里 看護師
 公益社団法人大阪府看護協会

若葉の緑が美しい5月。重症センターが閉鎖し、早2ヶ月が過ぎようとしています。いまだに約2年3ヶ月間過ごしたセンターでの日々を思い出します。

センターで従事した日々は、未知のウイルスとの終わりの見えない闘いに、やり場のない辛さを感じたことが多くありました。特に、コロナ患者の死に対しては今だに悔やむこともあります。家族に会わせてあげたかった、手に触れてほしかった、葬儀を上げさせてあげたかった、と。

ですが、今振り返って思うことがあります。それは、私たちは限られた情報、制約、物資を余すことなく活用し、その時々合った最良の看護、および医療を創意工夫しながら提供できていた、ということです。それを成し遂げられたのは、センターに関わったすべてのスタッフの力であると感じています。

コロナ患者が生きられなかった、アフターコロナの世界を私たちは大いに生き、今後の医療の発展を目指していくばかりです。



大西 祐希 看護師
 淀川勤労者厚生協会附属西淀病院

大阪府の救急医療機能、病院機能が低下していく中で、重症センター派遣依頼があり運用2週間前から出向されることとなった。初対面の方も多く、業務や顔を覚えることは困難だったがその仲間が増える事をうれしく思った。

TVでは重症センターの話題も多く、使命感や緊張感を常に保ちながら2か月ホテルとセンターの往復という生活をしてきた。日常から離れた事や温かいご飯を食べることもない生活でとても辛かった時期もあった。センターで看取りの経験では、ご家族は一度も面会できないままだったが、本人への手紙をたくさん書き届けておられた。手紙やお孫さんの写真も含めベッドに添え、最期のご家族の思いを届け、少しでも入院して良かったと思ってもらいたいという一心のみで対応させていただいた事は今でも覚えている。初めは出向することに不安が大きかったが、多くの仲間と出会え、一緒に過ごせた事は今の自分の看護師としての大きな成長となった。



岡田 奈美香 看護師
 社会医療法人愛仁会千船病院

自施設では、2020年5月より新型コロナ軽症・中等症患者の受け入れを開始した。第4波に患者層が変化し、30～50

歳代と若年化した。これまで死を意識した事のない人が、重症化への不安を抱き治療を受けていた。入院後、数時間で呼吸状態が悪化し、高次医療機関へ転院搬送するケースが続いた。ICU経験のある私は、重症患者も助ける看護がしたいと思い、今回の任務に応募した。現場には『患者のために』と、同じ志を持つ看護師が全国から集まっていた。当初、新型コロナ患者の看護で一番悔しいと感じたのは、回復を願って精一杯のケアを続けても、家族と会えないまま最期を迎える患者もいたことだ。看護師として、やりきれない気持ちで落ち込む事もあったが、志の高い仲間と支え合い、患者のために最善を尽くすことができた。大阪コロナ重症センターでの活動は1カ月間だったが、このような貴重な機会を頂けたことに感謝する。

岡田 充雄 診療放射線技師

きっかけは友人からのラインでした。看護師だけではなく診療放射線技師も人手が足りないので、できればチームとして派遣協力してほしいと・・・未知の感染症に対しすごく不安はありましたが、医療従事者として何かできる事は無いかと考えていた時でしたので、職場や家族の理解をいただいて、有志数名で参加させていただきました。最初は慣れないゾーニングや防護具に戸惑いましたが、大阪コロナ重症センタースタッフの指導や大阪急性期・総合医療センター放射線科の方々が作成してくれたマニュアルのおかげで、CT検査やポータブル撮影時の感染対策、ガウンテクニック等を経験し、業務をすることができたと思います。この貴重な経験は自院におけるコロナ患者さんの受入体制を構築する際にも大きな自信となりました。最後に、このように業務が円滑に行えたのも大阪コロナ重症センタースタッフの尽力があつたの事だと思います。この場をお借りしてお礼申し上げます。



岡野 淳也 看護師
市立豊中病院

少しでもコロナで苦しんでいる患者のために役に立ちたい、という思いから大阪コロナ重症センターの意向を決めました。

センターでは主にレッドメンバーのリーダーとして任務を遂行しました。システムやME機器、物品も違う環境、そして毎日次々と新しいスタッフがやってくる慌ただしさに、当初は戸惑いも感じました。しかし、急性期・総合医療センターの看護師や医師、派遣でこられている仲間と一緒に目的を共有し、治療やケアにあたることで2週間を無事に終えることができました。私事ですが、期間中に認定看護師の合格発表がありました。カンファレンスの時間に仲間の皆にお祝いの言葉をいただいたことがとても嬉しく、良い思い出となりました。大阪コロナ重症センターが閉鎖し、寂しい気持ちはありますが、およそ3年間にわたるコロナとの闘いも終りに近づいてきていると実感できました。本当に多くの人と関わることができ、良い経験が出来たと思います。



岡本 雄太郎 医師
独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター

自身の病院から転院となった患者様、とりわけ私が主治医として診させて頂いた患者様が快方に向かう様子を伺うことができたことは、OC4勤務で最も感慨深いものでした。重症のCOVID-19肺炎では治療期間が延長することも多かった中、新規患者受入のために集中治療がまだ必要な方をOC4に搬送させて頂くことが多々ありました。転院時にはまだ人工呼吸器離脱や病状の改善徴候がみられない方もいましたが、当直勤務の際に同患者様が人工呼吸器を外され、食事されている様子を見たときにはとても嬉しく思いました。

実際の勤務では、ゾーニングされた中でのインカムを使った診療や、サイバー攻撃により電子カルテが使用できなくなり、初めて紙カルテ運用を行ったりと慣れないことに悪戦苦闘することもありましたが、常勤のスタッフの方々に支えていただき、業務を滞りなく遂行することができました。



岡森 景子 感染管理認定看護師
公益社団法人大阪府看護協会
政策・企画・看護開発部 感染対策担当

人材バンク事業の一つとして「クラスター発生病院等への応援派遣に向けた研修」が実施された。私は感染管理認定看護師として、COVID-19の感染対策について数回講義を担当した。COVID-19の重症患者を治療するために整備された施設、いわゆる恵まれた環境で勤務する超急性期ケアのスペシャリスト達にとって、中小規模病院や高齢者施設での慢性期のケアは、想像を超えたギャップを感じるのではないかと考えていた。しかし、2022年1月下旬、派遣先の看護管理者から「派遣スタッフからパワーと刺激をもらい、とても助かっている」と感謝の言葉が協会に届いた。OC4のスタッフに伝えると「私たちがお役に立てて嬉しいです。もっと頑張ります！」と元気な声で返答があった。フィールドの異なる施設で、初対面のスタッフとの勤務は、戸惑うことも多々あると想像できるが、与えられた場所で精一杯花を咲かせていた彼らに最大限の敬意を表したい。



奥田 祐子 看護師
国立研究開発法人
国立循環器病研究センター

2021年5月中旬より1ヶ月間、看護師スタッフとして従事させて頂きました。自宅を離れてのホテル暮らしや初対面の方々との仕事、自らが感染のリスクを負うことへの不安を抱えてのスタートでしたが、それらの不安材料は既に対策を講じられ措置をとられており安心して勤務にあたることができました。マニュアルの整備により知識と経験の違ったスタッフが混在している中でエラー発生リスク回避ができていたり、衛生材料は不足なく準備されており必要な感染対策を実施することができました。レッドゾーンでの長時間の勤務は想像以上に過酷でしたが、休息と休養がとれるホテルを提供して頂いたおかげで体調管理に務めることができました。又、全国各地から差し入れや応援メッセージは励みとなりそれを糧に任務に邁進することができました。沢山の方々の支援を受け働きやすい環境を整えて頂いたこと感謝申し上げます。大変貴重な経験をさせて頂きました。



奥村 千紘 看護師
国立研究開発法人
国立循環器病研究センター

私は重症センターが運営開始となった令和2年12月から1か月間という短い期間でしたが、応援という形で携わる機会をいただきました。業務において自施設と共通する事もありましたが、マニュアルの細かな違いや、様々な施設から日々応援者が集まり、顔と名前が一致しづらい状況でチームビルディングをしながら、業務を調整していく事に戸惑いを感じることもありましたが、日頃から各施設の第一線で働いている人達が集まっているだけあって、慣れない事をカバーしあい、改善したほうが良いと感じた事をアサーティブに提案する雰囲気や早くに醸成されていったと感じています。また、重症センターの看護師長さんのコーチングも学ぶの機会となりました。最後になりましたが、重症センター運営に関わられた全ての方に感謝申し上げます。

奥山 晃成 医師
大阪医科薬科大学病院

突然のコロナ禍で、隔離が必要であったり人工呼吸器が必要であったりといった管理が非常に困難な患者が増えた中、重症センターが設立されました。急設にもかかわらず綺麗な設備で機材も揃っていました。スタッフの方たちも密にコミュニケーションをとってくださり、労働環境としては非常に整備されていて、働きやすい環境で仕事をさせていただきました。このような素敵な環境で働けたこと、コロナという未曾有の事態の中救急医として役に立てたこと、非常に光栄に思います。ありがとうございました。



小島 将裕 医師
独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター

大阪府全体の病床として大阪コロナ重症センターがあり、重症患者を自院以外でも管理することができるようになったことは画期的でした。治療の質を落とすことなく、患者の偏在化を是正できたのは、その当時においても、また後方視的にみても必要なことであったと思います。また、重症患者の管理法について自院以外の方法も学べ、自院から大阪コロナ重症センターへ転院なされた方のその後の経過を知ることができたのも、大変有意義でした。そして、何より行政・医療がワンチームとなったことは今後もレガシーとして残り続け、今後起こり得る様々な困難があつたとしても、対応することができる素地ができたのではないかと思います。様々なバックグラウンドを持った方を集めて、一から新しいシステムを築き上げ、多数の重症患者の治療をなされた医師・看護師・コメディカル・MSW・施設維持の方・警備員および行政の方々には深く感謝申し上げます。3年間お疲れ様でした。



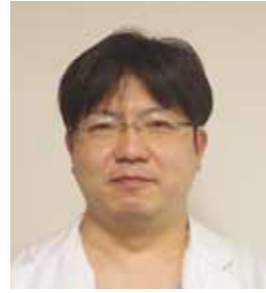
越智 理美 看護師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

大阪コロナ重症センターのプロジェクトチームに参加させてもらう事になり、主にマニュアル作成を担当していましたが、この施設を知らない人達がすぐに実践できるように、詳細にして量が多いと読み込むのに時間がかかるし、簡潔すぎてもわかりにくくなるし、その加減に苦労しました。運営が開始されても、2年4か月の間にコロナが変異し患者層が変わったり、大阪府の医療状況の変化に合わせて体制を変化させなければならず、それに対応するのも大変でした。大変なことはたくさんありましたが、このプロジェクトに関わらないと経験できなかったことをたくさん経験させてもらいました。また、看護師の入れ替わりが激しく、常に100前後のスタッフが従事しているので、管理者として1人1人の顔と名前を覚えるのは大変でしたが、全国のいろんな人と知り合えたことはこれからの自分の財産になると思います。大阪コロナ重症センターの運営に関わらせていただいたことに感謝します。



小野 南海子 看護師
秋田大学医学部附属病院

この度のコロナウイルス感染症にて亡くなられた方、親しい方を亡くされた方にお悔やみ申し上げます。また、後遺症により今もなお困難を抱えておられる方へお見舞い申し上げます。今の世の中を見てみると、”もうコロナは終わった”感があり、私が大阪で勤務したのは夢だったのではないかと感じる今日この頃です。当時はこんな日が来るとは考えも出来ない状況でした。派遣された当時、私は実際にコロナウイルス感染症患者の看護が未経験だったので正直恐怖もありました。しかし、センターのスタッフの皆さんの丁寧で親切な指導により、なんとか2週間の勤務を終えることが出来ました。たくさんのご迷惑をおかけしたことと思いますが、自分にとっては大変貴重な経験をさせて頂きました。快く大阪へ送り出してくださった職場の方へも感謝申し上げます。ありがとうございました。



加賀 慎一郎 医師
大阪公立大学医学部附属病院

私は、現大阪公立大学医学部附属病院の救命救急センターより出向し、2021年1月から3月まで勤務しました。当時は第3波の真っ最中で、年始の時点で既に13名程度の患者が入院していました。日々、full PPEを装着して診療でしたが、きちんと装着すれば感染することはないということをよく実感できました。一時は入院患者数が20名を超えましたが、2月末から終息の兆しを受け減少していきました。当方の勤務期間だけでも、のべ100名弱の患者を診療したように思います。

日本全国から多職種の医療従事者が応援に駆けつけてくださいましたが、いざ同じ場で医療を始めると共通の認識・医療文化がないということの不便さに直面しました。試行錯誤を繰り返し、感染防止対策・医療安全の観点も考慮して、日々の申し送りで診療コンセンサスを形成するプロセスに参加できたことが、チーム医療形成を考えるうえで貴重な経験となりました。皆さんと一緒にCOVID-19診療ができたことは今でも誇りに思います。



加藤 明裕 医師
地方独立行政法人堺市立病院機構
堺市立総合医療センター

大阪コロナ重症センターには2021年3月に夜間当直で勤務をさせて頂きました。医療者へのCOVID-19ワクチン接種が開始された時期で、まだウイルスの詳細が十分に分かっておらず、未知の感染症に対して不安を抱きながら医療者各々が社会的な使命感で診療していたかと思えます。また、多くの府民の方々や吉村知事から医療者に対するあたたかい応援のお言葉をいただき、大変励みになりました。私自身としても、今回の貴重な経験を糧に今後も精進して参りたいと思います。



加藤 卓也 看護師
鳥取県立中央病院

私は大阪コロナ重症センターが開設され2日目から約2週間の間、都道府県派遣業務を行った。看護システム、ケアの方法、物品などが全く異なる中、感染対策を含め充実した内容のオリエンテーションを受講することで、円滑な業務を開始できた。良かった点は、より良い看護の提供を目指し意見交換が活発にでき、尚且つブリーフィングの時間が設けられていたことで密に連携しながら看護実践が行えたことである。また所属、派遣先関係なくコミュニケーションが活発に図られており報連相しやすい環境であったため、心理的安全性が担保され、安心して業務を遂行することができた。防護服、N95マスクの長時間装着に伴う鼻尖部の疼痛、発赤が一時的に生じたが、保護材の貼付が提案され、以降皮膚トラブルなく経過できた。

最後になりましたが、私が派遣でお世話になった皆様に深く感謝申し上げます。

金沢 陽子 看護師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪国際がんセンター

大阪府感染症対策支援課の皆様、並びに急性期・総合医療センターの皆様、重症センターの立ち上げから運営終了まで本当にお疲れさまでした。一府民としても感謝申し上げます。

当院からは私を含め、計6名がセンターでの業務に従事しておりました。私自身は立ち上げ時のみの応援ですが、他の職員は、期間延長・再派遣という形で従事しておりました。当然のことながら、複数施設での構成であるため、人間関係での色々な思いがあるようでしたが、重症センターの管理者様のフォローや、新たに知り合った仲間へ支えていただき乗り越えられたと聞いております。また、何よりも、立ち上げ以降も、現場の声を重視し改善につなげていただいたことが、私自身にとっても貴重な経験、自信に繋がりました。ありがとうございました。



神吉 海 看護師
公立学校共済組合関東中央病院

2週間という短い期間でしたが、多くの学びをさせていただき本当にありがとうございました。最新の医療機器での治療や、

私のような全国から短期で派遣されるスタッフへの細やかな対応方法など数え上げたらきりがありません。この機会を還元できるようこれからも邁進いたします。2週間を過ごす快適な環境を提供いただいた大阪府にも感謝いたします。



亀井 葉子 看護師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

2020年OC4開設に至る前の夏頃から、その構想についてのお話を伺い、開設に向けたプロジェクトチームの一員となりました。

仮設病院の設計図の段階から、医療機器・診療材料まで多岐にわたる物品の準備など、まさしくゼロからの出発でした。当センターからは、師長を含めた6人のコアメンバーとともに構想を固めていきました。さらに、多職種や業者の方々とも会議を重ね、設計の調整や機器の選定を行いました。12/1には大阪府看護協会からの看護師派遣が始まり、その後は全国から看護師が派遣され、2人の常勤Drと6人のコアメンバーNsを中心としたOC4の運営が始まりました。大半が自施設以外のNsで業務するという全国初の試みでしたが、師長2人が中心になって管理体制を強固に整え、混乱を最小限に食い止めるよう非常に努力してくれました。結果、すぐに軌道に乗せることができました。全国から派遣された優秀なスタッフの皆さんと共働できたことやこのような大きなプロジェクトをコアメンバーのみならず乗り切った事は、大きな自信と誇りになったと思います。一緒に働いた皆様、本当にありがとうございました！



鴨島 尚美 看護師
京都府立医科大学附属病院

大阪コロナ重症センターが開設されることはメディアで聞いていましたが、そこで働くことになるとは思いませんでした。

派遣依頼を聞いた時は、自分が役に立つことが出来るのか不安いっぱい出勤したことを思い出します。

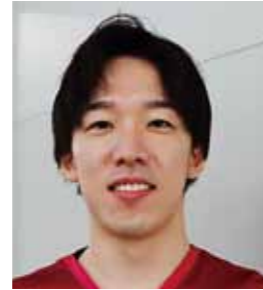
派遣後は、初対面の方と慣れない環境での勤務で緊張の連続でした。特に私が派遣されたのは患者さんの受け入れが始まった2日目で、運営方法について色々試行錯誤されていた時期でした。常に業務に追われている中でしたが、全国から集まった看護師達でディスカッションを行い患者さんにとってより良い看護について考える時間は、私にとって大変有意義な時間となりました。また、より良い看護で患者さんを助けたいという共通の目標があったからこそ、やり遂げることができたのだと思います。中々できない経験ができ、看護のすばらしさを再認識できたことは皆様のおかげです。ありがとうございました。



川井 美貴子 看護師
JR 東京総合病院

2021年5月13日から2週間お世話になりました。全国から招集された看護師、集中治療認定看護師、災害医療チームの

みなさんと働くことが大きな刺激になりました。未曾有のコロナの大流行の中、医療者の連携の大事さ、家族ケアの大切さを改めて学ぶことが出来ました。職場に戻った後は、大阪コロナ重症センターでの経験を活かし、コロナ対応を行うことが出来ました。貴重な体験をありがとうございました。



川島 優人 看護師
公益社団法人大阪府看護協会

2022年4月より重症センター閉鎖まで勤務しました。重症センターに来る前は、大学病院の高度救命救急センターで勤務しており、全国から病院派遣を募集していた当時から、何か役に立てないかとの思いでいました。前職場を退職後、重症センターでの勤務が決定し約一年間勤務させていただきました。私が入職した頃には、マニュアルが十分整備されており、これまでスタッフの努力の賜物であると驚き、感心しました。入職前は、全国のICUや救急、病棟などのバックグラウンドが違う看護師が集まり看護を実践することは、難しいのではないかと考えていました。しかし、多くの時間を使いディスカッションし様々な看護観を共有することで、同じ方向性で看護が実践できるのだと感じました。この過程が自身の看護観やモチベーションを高める有意義な時間でした。また、重症センターに入職し、多くの看護師と出会い様々なことを共有できたことも一生の財産です。



川田 真大 医師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

未知なる仕事に触れて
大阪コロナ重症センターに立ち上げ時から関わらせて頂きました。自身はもちろん、誰もが関わったことがないであろう未曾有の災害において、最前線で活動することは当初は不安が非常に大きいものでした。短期間で出来上がった施設、限られた資源、人材。そういったものを最大限に活用して行う重症患者対応には無力感がどうしても付きまとうこともあり。残念ながら救うことができなかった命もありました。それでも立ち上げ時から運営を含め大活躍していただいた多くのスタッフ、全国各地から自ら進んで参加して下さった看護師さん、各救命センターより派遣頂いた医師の皆様のお陰で多くの命を救うことができたと思います。私の人生において、非常に大きなターニングポイントとなる出来事であったのは自明であり、大きな経験とさせて頂けたことは間違いがありません。関わっていただいた全ての方に感謝を込めて。



**川野 頌太 診療放射線技師
准看護師**
陸上自衛隊中部方面隊

大阪コロナ重症センターに約2週間従事させていただきました。センターも開設して間もない頃で慌ただしい中での申し受けから実施にあたっての教育でありましたが、懇切丁寧に対応して頂きましてスムーズに勤務にあたることができました。センターに勤務して良かったのですが、様々な経験を積まれた勤務員の方々と一緒に活動させて頂き私にとっても良い経験となりました。また宿泊についても衣食住しっかり管理されておりとても気持ちよく勤務出来ました。個人的に大変だった事は、新たな勤務環境を熟知するためにはある程度期間を要するため普段にはない緊張感を持って勤務させて頂きました。僅かな期間でありましたが一緒に勤務させて頂いた皆様には感謝申し上げます。

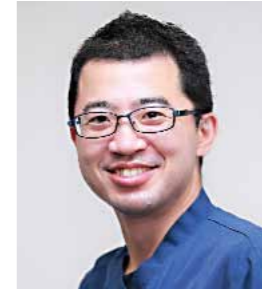
大阪コロナ重症センターに約2週間従事させていただきました。センターも開設して間もない頃で慌ただしい中での申し受けから実施にあたっての教育でありましたが、懇切丁寧に対応して頂きましてスムーズに勤務にあたることができました。センターに勤務して良かったのですが、様々な経験を積まれた勤務員の方々と一緒に活動させて頂き私にとっても良い経験となりました。また宿泊についても衣食住しっかり管理されておりとても気持ちよく勤務出来ました。個人的に大変だった事は、新たな勤務環境を熟知するためにはある程度期間を要するため普段にはない緊張感を持って勤務させて頂きました。僅かな期間でありましたが一緒に勤務させて頂いた皆様には感謝申し上げます。



河本 昌雄 医師
独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター

大阪コロナ重症センターでは当院が長期抜管困難症例などを受けていただきました。重症センターでは他院の治療方針なども

知ることができ、当院の患者がどのようになっていったのかなども知ることができフィードバックされたこともあり、当院のコロナ感染症に対する治療について勉強になりました。環境面でいえばプレハブでしたが、当直室などは使いやすく大阪急性期・総合医療センターのコンビニエンスストアなども利用できたため配慮いただきとても快適な当直勤務をさせていただきました。今回のコロナ感染には学ぶことは多く、またいつかこのような感染症が流行した際には今回の経験を活かし活動できたらと考えています。重症センターの皆様ありがとうございました。



川本 匡規 医師
地方独立行政法人堺市立病院機構
堺市立総合医療センター

私は普段は堺市立総合医療センター 救命救急センターで勤務しています。この度、コロナ感染症による重症患者様の受け入れ

に際して、大阪コロナ重症センターを開設にあたり、非常勤応援医師の立場で診療に参加させていただきました。

2020年、大阪府下の救命救急センターがコロナ治療と通常の救命救急センター業務で病床がなくなり疲弊するなかで、重症センターで各病院の後方支援を行い、救急医療を維持する活動は非常に有意義であったと思います。堺市立総合医療センターも、重症患者様を何名も転送させていただき、病床管理上もかなり助けられておりました。

また一方で、個人的にも、大阪急性期・総合医療センターや大阪大学など大阪の各救命救急センターの応援医師と協働して治療することは自己研鑽という面でも良い経験になりました。

呼吸器離脱戦略や敗血症の治療戦略などの集中治療は施設間での差異がかなりあり、治療一貫性が取れるように入念にカンファレンスを行い、治療方針を共有するのが特に難しかった反面で、自施設では経験できなかったと思われるような治療を学べたことは収穫だったと思います。

3年に渡って施設運営を行っていただきました藤見先生、木口先生をはじめとした、大阪コロナ重症センターのスタッフの皆様には感謝いたします。



上林 晃徳 看護師
彦根市立病院

世界的に猛威を振った新型コロナウイルス感染症が5類感染症となったことで、規制が緩和され、社会活動にも回復の兆しが見えてきました。

兆しが見えてきました。

今日に至るまでに急速な感染拡大、人材や資源不足による全国的な医療逼迫が何度もありました。当時、私は大阪府における過酷な現状を知り、微力ながら大阪府コロナ重症センターにて従事することを決めました。

実際に現場に赴いてまず驚いたのは、重症患者さんの多さです。ICUで集中治療の経験がありましたが、センターの端から端まで人工呼吸器を装着した患者さんが数十人並ぶ現状に戸惑いを隠せませんでした。お亡くなりになる患者さんも多く、気持ちが落ち込むことも多くありました。また、常にN95マスクを装着する必要があるため、息苦しさを伴い、防護服を装着していると普段よりも強い疲労感が伴い過酷な環境でした。

しかし、自分の他にも全国の病院から「患者さんを救いたい」という思いの元に多くの看護師の方々が集まり、協働することを通して、普段の勤務では味わえない経験ができたと思います。これからも看護師を続けていく中で、ここでの経験は決して忘れることはありません。

最後になりますが、大阪府コロナ重症センターにおいてご尽力されました大阪府および大阪府看護協会の皆様、全国からお集まりになった看護師の皆様、ありがとうございました。



木下 律子 看護師
公益社団法人大阪府看護協会

令和4年1月、丁度第6波の始まりからセンターに着任しました。私で務まるのかな、大丈夫かなと勤務が決まった日から毎日緊張していた記憶があります。波の始まりだったため、患者数も少なく慣れるまで業務内容などしっかり教えて頂きました。各地から派遣されている看護師、医療者をまとめるためのマニュアルをみて、大変さとありがたさを感じながらも1ヶ月ほどで業務に慣れることができました。N95をつけながらの息苦しさ、

常時トランシーバーのイヤホンをつけていることの苦痛なども多々ありました。しかしそれらも一緒に共有し嫌だねと言いながら笑える仲間達と過ごせて良かったと感じています。センターが終わって寂しい気持ちでいっぱいですが、コロナの収束と通常の日々に戻ると言う嬉しさも感じています。全国各地から人が集まり、この文書では収まりきれないほど濃い1年間を過ごすことができました！ありがとうございました。



木村 友美 看護師
社会福祉法人恩賜財団済生会支部
大阪府済生会中津病院

レッドゾーンで3週間勤務させていただきました。慣れない環境で初対面の方々と一緒に勤務することに不安と緊張がありました。

が、マニュアルがきちんと整備されていたり、話しやすい雰囲気があり、すぐに慣れることができました。リーダーの方々はとても細やかにチーム内のことを見てくださり安心感もありました。また、重症センターに派遣された方たちがみんな力を合わせて頑張ろうという思いがあり、とても刺激を受けました。私が勤務したのは少し落ち着いた2月であり、その期間は患者さんとも密に関わることができました。3週間という短い期間でしたが、良い経験をさせていただきました。



切本 真喜 看護師
社会福祉法人恩賜財団済生会支部
大阪府済生会中津病院

私は、開設初期に活動させていただきました。様々な施設から経験豊富なスタッフが来られており、物品の設置やマニュアル作成など、安全により良い看護をするためにはどうしたら良いか、みんなで意見を出し合い作り上げていく、とても貴重な経験をさせていただきました。それぞれが使い慣れた資器材ではなかったり、ルールも違うなかで戸惑いもありましたが、お互いに情報を伝え合い、引き継いでいく連携やコミュニケーションの大切さを実感しました。新型コロナウイルス感染症という見えない敵と向き合いながら看護を実践していく緊張感はありましたが、どんな環境下でもより良い看護を提供する使命感と、共に励むことができた仲間との出会いにも感謝しています。また、このような活動をする上で、管理されている方々からねぎらいのお言葉をいただいたり、サポートや配慮をしてくださり、人の温かさや繋がり大切さを感じることでした。

私が入社してからは、安全により良い看護をするためにはどうしたら良いか、みんなで意見を出し合い作り上げていく、とても貴重な経験をさせていただきました。それぞれが使い慣れた資器材ではなかったり、ルールも違うなかで戸惑いもありましたが、お互いに情報を伝え合い、引き継いでいく連携やコミュニケーションの大切さを実感しました。新型コロナウイルス感染症という見えない敵と向き合いながら看護を実践していく緊張感はありましたが、どんな環境下でもより良い看護を提供する使命感と、共に励むことができた仲間との出会いにも感謝しています。また、このような活動をする上で、管理されている方々からねぎらいのお言葉をいただいたり、サポートや配慮をしてくださり、人の温かさや繋がり大切さを感じることでした。



桐本 ますみ 看護師
独立行政法人労働者健康安全機構
大阪ろうさい病院

私が、重症センターで一番印象に残っているのは、面会方式です。集中治療室の面会は、コロナが流行するまで文字通り患者と家族が対面し限られた時間を過ごしていました。コロナが流行したことで対面での面会ではなく、携帯電話やパソコンを用いたwebで面会をする様になりました。今までは、患者の治療に用いられるME機器が、誤作動をおこすため、携帯電話を集中治療室で使用することが禁じられていました。重症センターでの面会は携帯電話のLINEやZOOMで行っていました。家族は携帯電話に写る患者にコロナという病原体に対して、怒りを滲ませていました。「お父さんなんでコロナにかかったんよ。」何度もこの言葉を連呼していました。もちろんME機器の不具合は起こりませんでした。コロナセンターでのこの取り組みが今までの面会の概念を変えたと思っています。当院でも携帯電話での面会方法を取り入れるようになりました。

私が、重症センターで一番印象に残っているのは、面会方式です。集中治療室の面会は、コロナが流行するまで文字通り患者と家族が対面し限られた時間を過ごしていました。コロナが流行したことで対面での面会ではなく、携帯電話やパソコンを用いたwebで面会をする様になりました。今までは、患者の治療に用いられるME機器が、誤作動をおこすため、携帯電話を集中治療室で使用することが禁じられていました。重症センターでの面会は携帯電話のLINEやZOOMで行っていました。家族は携帯電話に写る患者にコロナという病原体に対して、怒りを滲ませていました。「お父さんなんでコロナにかかったんよ。」何度もこの言葉を連呼していました。もちろんME機器の不具合は起こりませんでした。コロナセンターでのこの取り組みが今までの面会の概念を変えたと思っています。当院でも携帯電話での面会方法を取り入れるようになりました。



金城 真一 看護師
滋賀医科大学医学部附属病院

所属する施設より私は在籍型出向として、大阪府コロナ重症センターで1ヶ月の新型コロナウイルス感染症患者対応のための派遣業務、主に感染エリアでの患者ケアに従事させていただきました。

所属する施設より私は在籍型出向として、大阪府コロナ重症センターで1ヶ月の新型コロナウイルス感染症患者対応のための派遣業務、主に感染エリアでの患者ケアに従事させていただきました。

第一印象は、ゾーニングによる職員動線が明確化され、効率的な患者管理と全体管理が行われており、「短時間でここまでできるのか」ととても感心したことを今でも覚えています。

感染エリアでの業務はスタッフの体調も考慮し、休憩は2時間おきに行われ、水分補給などをして再度新しい个人防护具に着替えて感染エリアへ向かっていました。多い時で个人防护具の着脱は1日に5～6回にもなることができました。

今までになく非常に厳しい現場ではありましたが、これまで臨床で培った経験と知識、それと感染管理認定看護師としての経験と知識が、遺憾なく発揮できた現場でした。看護師人生の中で、忘れることができない大変貴重な経験をさせていただきました。



熊田 裕美 医師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

今回、自治医大卒業生ということでOC4で3か月間勤務することになりましたが、研修医終了以降は小児科でしか仕事を

していない自分に何かできることはあるのだろうかという不安に思いながら勤務を開始しました。しかし、医師、看護師の皆さんがとても丁寧に質問に答えてくださる環境にあり、日々たくさんの患者さん・ご家族の方々と接する中でそんな不安な気持ちはすぐになくなりました。平時であればすぐに搬送・治療開始されるはずの方が「コロナ」というだけで搬送先が決まらない、隔離解除後も転院先を探すのが難しい状況などを経験し、OC4は本当に重要な役割を果たしていると感じました。システム障害のため紙カルテ運用になった際に、看護師の皆さんと毎日カンファレンスを繰り返し、より良い運営方法について議論したことはとても貴重な経験となりました。ここでの経験を今後の仕事に活かしていきたいと思っています。



久米 隆道 看護師
医療法人田中会武蔵ヶ丘病院

5月6日～6月30日の約2ヶ月間の派遣日程で、初日には丁寧にオリエンテーションをってもらい、実際に業務でも支援

スタッフの経験等を考慮した患者担当割り当てやフォローがあり、かなり不安の軽減につながっていた。なにより、ほとんどのスタッフがコロナ対応への意欲や志が高く、同じ看護師として非常に刺激を受ける事が多かった。業務外では宿泊施設の手配や交通手段の確保など、全国からの支援スタッフに対して十分な準備や対応がされており、2ヶ月間の期間で大きく困ることもなく病院支援に集中することが出来た。派遣が終了し自施設へ戻ってまもなく、院内クラスターの発生を経験し対応に当たったが、センターでの経験を活かすことが出来た。大阪のコロナ対策への貢献以上に、自施設や私自身にとって非常に意味のある派遣経験となった。派遣を受け入れていただいた大阪府と、快く送り出してくれた武蔵ヶ丘病院のスタッフへ心から感謝する。



倉田 慧斗 看護師
社会医療法人きつこう会
多根総合病院

私は、約二ヶ月間重症センターで勤務させて頂きました。重症センターでの良かった点は、様々な経験年数や経歴を

持ったスタッフが従事しており、多くの気付きや学びを得ることができたことです。環境を変える事、新しいことに挑戦する事の大切さを改めて実感することができました。

また思い出にあるのが、夜勤中に一時的に停電が起きたことです。最初は驚きましたが、すぐにインカムで情報を共有し合い、患者の安全確認やモニター・呼吸器などの医療機器のチェックを迅速におこない事故無く乗り切ることができました。私自身、実際に医療現場で停電を経験したことが無かったので、今後災害時など同様の事態が起きた際には今回の経験を活かして患者さんの安全確保に努めたいと思います。

今回は重症センターで業務に従事させて頂きありがとうございました。今後このような機会があれば積極的に参加していき、自身の成長にも繋げていきたいと思っています。



栗正 誠也 医師
大阪公立大学医学部附属病院

大阪公立大学医学部附属病院救命救急センターの栗正と申します。2021年7月から9月までの3か月間、大阪急性期・総合医療センター内の大阪コロナ重症センターに出務させて頂きました。

いわゆる第4波から第5波にかかる期間でしたが、府下の多数の病院において医療逼迫する中、主に呼吸器管理を要する重症COVID-19肺炎患者の管理に従事しました。呼吸器を要する数十人規模の患者を集中治療管理した経験はありませんでしたが、呼吸不全に加えて予期せぬ事象が発生するなど、対応に苦慮することもありました。そんな中急性期・総合医療センターや大阪大学をはじめ、大阪府下の多くの救命救急センターの先生方と一緒に協議しながら診療にあたることができ、私にとって大変貴重な経験となりました。それらの経験を生かして、引き続き診療にあたっていこうと思います。



黒木 志帆里 看護師
福岡大学病院

私は第4波の令和3年5月6日～5月19日の期間、働かせていただきました。派遣の要請を受け、ECMOセンターとして多数のCOVID-19重症患者を受け入れ、対応してきた自施設での経験を活かし、逼迫した大阪の医療体制の中で奮闘する医療従事者や患者様の支援をしたいと思い、派遣を受諾しました。臨時施設とは思えない程、センターの設備は整っており、不便を感じることはありませんでした。ホテル滞在時の食事やバスでの送迎も配慮いただきました。急造された医療チームであり、限られた期間で共に働く仲間の特性や背景を知ることが困難で、人間関係でストレスを感じることもありましたが、しかし、「患者の命を救いたい」という目指す目標は皆同じで、コミュニケーションを積極的にとることで解決できたと感じています。2週間という短い期間でしたが、多くのことを学ぶ機会となり、得た学びと経験を今後の看護実践に活かしていきたいと思っています。



黒田 一行 診療放射線技師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

2021年12月から一年三か月大阪コロナ重症センターで診療放射線技師として勤務しました。私の仕事はCT検査やレント

ゲン撮影を行うことでした。重症患者さんの多くは人工呼吸器につながれており移動や体位変換が困難な場合が多く、そのため患者さんの安全と画像の質を確保するためには医師や看護師と連携し細心の注意を払う必要がありました。また、感染防止のためには、防護服やマスクなどの装備を着用し検査後は消毒や廃棄物処理などの作業を行う必要がありました。

患者さんに検査を行うことで新型コロナウイルス感染症の重症度や経過を間近で見ることができ命に関わる深刻な病気であることを改めて認識させられました。

ここでの勤務を通して診療放射線技師としての知識と技術だけでなくチーム医療の大切さを学びました。また新型コロナウイルス感染症の重症度や経過を間近で見ることによって、患者さんの命を守ることの重要性を学びました。

今後も診療放射線技師として患者さんの健康に貢献していきたいと思っています。



鍬田 穂菜美 看護師
独立行政法人国立病院機構
金沢医療センター

私は2020年12月から1ヶ月間センターに派遣されました。稼働開始したばかりであったことと、私自身が自施設以外での勤務経験がなく、最初は手技や考え方の違い、電子カルテの操作など戸惑うこともありましたが、派遣された初日にオリエンテーションがあったことと、センター稼働前から働いていたスタッフの方に丁寧に教えて頂いたため、徐々に慣れることができました。全員が慣れない環境の中、スタッフ間で積極的にコミュニケーションをとって患者様一人一人を尊重した医療を提供していた印象です。辛いこともありましたが、派遣中の1ヶ月間を無事に終えることが出来たのは一緒に働いたスタッフの皆さん含め大阪府の職員の方々の人情あふれる優しさのおかげだと思っています。センターで学んだ知識などは自施設に戻ってから活かすことができ、とても貴重な経験をさせて頂き感謝しております。



合田 良平 看護師
独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター

大阪コロナ重症センターでの勤務を通して、様々な経験を持った看護職員での運営を行うことの難しさを感じました。各

施設での看護管理の方法の違いや看護技術の違いなど初めは戸惑うことも多かったです。しかし、センターの職員の方の取り組みとして、勤務終了時に毎日多職種が集まり、病棟の運営上の不具合などについて話し合う機会があり少しずつ業務が改善され円滑に業務を遂行することができました。また、勤務最終日に派遣職員各々にメッセージカードの配布や、休憩室の壁に顔写真付きの自己紹介カードを掲示して頂いたことで、ひとつのチームとしてみんなで病棟を運営している実感を持つことができました。ここでの1カ月の勤務は大変貴重な経験となりました。

河野 通彦 医師
地方独立行政法人堺市立病院機構
堺市立総合医療センター

大阪コロナ重症センターで初めて勤務した際、その考えられた施設の作りと運用方法、そこで働くスタッフの熱意に頭が下がる思いであった。空間的にグリーンゾーンとレッドゾーンが完全に分離されているが、患者様の様子や生体反応モニターがグリーンゾーン内でリアルタイムに確認でき、イヤホンを通してレッドゾーン内のスタッフと意見を交わすことができた。これにより、二つのゾーン間の大きな障壁を安全に取り除くことができた。また患者様全員がコロナ重症患者という中、使命感と熱意に溢れたその雰囲気には日々の診療のモチベーションをもらう結果となった。大阪中の様々なICUから患者様とそこで働く医師が応援に来ており、大阪コロナ重症センターを介して大阪中の各ICUにいい影響を及ぼしたことは想像に難くない。今回このような意義深い診療に参加する機会を頂き、センターに携わった多くのスタッフの皆様に感謝しております。



後藤 夏美 医療ソーシャルワーカー
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

私は第3波から第6波にかけて在籍させて頂いておりました。重症センターでは近い距離で様々な他職種が患者さんを中心

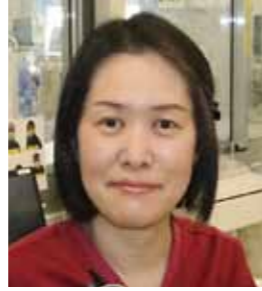
に支援していく体制が整っており、日々活発なディスカッションも繰り広げられていました。私が在籍するまでの間にたくさんの試行錯誤があったと思いますが、少しでもよりよく支援していくために皆さんが考えられた結果がそこにありました。一つの目標に向かい、すべての職種が同じ方向性を向いて支援出来ており、スムーズな支援が出来たと大変感謝しています。重症センターでの経験は私にとって非常に思い出深い経験となり、今後の業務の励みにもなりました。私は自宅からの通勤であり、幸い自宅付近の住民の方々も応援していただけたのでその点においても幸運でした。地方などから来られ、ホテルから通勤されている方々には大変頭が下がる思いでしたが、皆さんそれぞれに今できることを励みに頑張っておられ、その姿にも励まされました。



小中 俊江 看護師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

大阪コロナ重症センターと急性期・総合医療センターの橋渡しみたいな役割をさせていただきました。看護協会や大阪府の

方々にもご尽力いただき、たくさんの方が重症センターで勤務され、急性期・総合医療センターにも派遣にきていただき感謝申し上げます。コロナ流行期に重症患者がとめどなく入院してくる中、働いているみんなで力を合わせられたおかげで乗り切ることができました。初めて会う人同士も、戸惑いながらも徐々にチームになっていき、患者さんの看護に最善をつくしていく姿はとても素晴らしいものでした。委員会活動も活発でたくさんのマニュアルも作成され取り組まれていました。管理していただいた、管理者の方々にも感謝いたします。ありがとうございました。



古根川 綾子 看護師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

当センターには2年4か月の間に500人以上の看護師が従事しました。私は看護師長として「入れ替わる看護師が安全

に看護を提供できるためにはどのようにしていけばいいのか？」というのが当初の課題でした。そこで看護師のモチベーション維持と環境づくりに配慮することにしました。PPEを装着するところで、適切に装着できているかのチェックと名前を呼びながら声かけをし体調をうかがっていました。「COVID-19患者の看護をする」という同じ目的を持っているとはいえ、初めてのスタッフとともに協力して看護を提供するのはコミュニケーション力、協調性、調整力と精神的にも身体的にも体力を使うことだと思っていました。しかし、看護師は体力も患者さんへの思いも強く、日々経験したことが翌日につながるように毎日積み重なっていきました。看護師のパワー、パッションを感じていました。関わった皆さんに感謝です。ありがとうございました。



小村 檀 医師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

2023年3月31日をもって約3年前に従事していた大阪コロナ重症センターの運営が終了しました。思い返せば、

2020年12月に初めて勤務しましたが、その当時は重症センターが立ち上がった時の初期の頃であり十分なスタッフが集まらない状況があったと聞きました。それまで大阪急性期・総合医療センターの小児科・新生児科で勤務していましたが、大阪府庁より自治医科大学の卒業生として要請をうけ勤務しました。成人の診療を離れ2年のブランクがありましたが、一種の災害医療チームというスタッフの雰囲気からスムーズに連携し時にサポートいただき安心して診療ができました。医師以外にも看護師や臨床工学技士、メディカルスタッフなどの様々な方と職種の垣根をこえ、日々相談しながら診療できたからこそ、難局を乗り越えることができたかと今では感じております。

近藤 あゆか 医師
大阪医科薬科大学病院

2020年、未知のウイルスの感染によるパンデミックが起こり予想できない状況の中、いち早く大阪府は救命のために立ち上がった姿勢に感銘を受けたことを私は今でも鮮明に記憶しています。

最後の砦であったにもかかわらず、第4波、第5波は特に2週間以上続く満床で、トリアージも迫られるような危機的状況でした。

私自身は救急医として経験が浅く、ただがむしゃらに働いていましたが、試行錯誤しながら未知のウイルスと戦っている上級医と少しでも救命に携われたことは、自身にとっても非常に貴重な経験となりました。ありがとうございました。



酒井 智彦 医師
大阪大学医学部附属病院
高度救命救急センター

関係者の皆さまには大変御世話になりました。私が初めて勤務させていただいたのは、2021年4月下旬からゴール

デンウィークにかけての3週間でした。初めて、OC4に出務し、目にしたのは、グリーンに掲げられている医師スタッフなどの写真でした。私もこの写真に並べてもらえるようになるんだと連日撮影に耐えられるように身なりを整えて出務しましたが、最初の3週間ではそのような撮影を行えるような雰囲気は全くありませんでした。まさに第四波の波が高まろうとしている時が私の出務期間でした。そのような忙しい時期でもレッドゾーン、グリーンゾーンとガラスを隔てただけでも遠い距離を感じる環境で仕事をする際において、診療の補助をお願いできる看護師さんたちはとても頼もしかったです。2回目の出務は四波と五波の狭間で壁に貼る写真を撮影していただけました。写真1枚もとれないほど忙しい時期を経験したということが何よりの宝です。



阪上 正英 医師
大阪医科薬科大学病院

今やワクチンも出来て治療方針も感染対策もある程度確立され慣れが生じてしまいましたが、2021年4月当初は世界的

流行の新型感染症により各病院のICUを重症呼吸不全患者が占めるといった未曾有の状況であり、その中で急遽立ち上がった重症センターで縁があり時々ですが当直帯で勤務させて頂きました。酷い時は重症呼吸不全で気管挿管ないし気管切開された患者が30人弱入所しており、レッドゾーンからなかなか出られずフルPPEのまま何時間も対応するような状況の時もありました。そんな中でも常勤の先生方や若手の先生、コメディカルの方々が頑張っておられる姿を見てモチベーションが上がったのを思い出します。また起こりうるかもしれない新興感染症の世界的流行に向けてもここで働けた経験はとても貴重でした。



坂本 慶太 看護師
社会医療法人財団池友会
福岡和白病院

令和2年12月16日から令和3年1月14日までの一か月間、大阪コロナ重症センターにお世話になりました。ホテル

から大阪コロナ重症センター間をバスに揺られての通勤や外出自粛でホテルに缶詰めで自炊が出来ず、コンビニ当ばかりで太ったことなど思い出します。しかし、各県から派遣された高度な知識や技術を備えた方々と共に従事できたことは私の看護師人生において大変貴重な経験になりました。自身は認定看護師教育課程や特別な研修を受講していないため、積極的にコミュニケーションをとり、微力ながら少しでも貢献できるよう努めました。また、次々と新しいスタッフが増え、スタッフの入れ替わりもある中で大阪急性期・総合医療センターの皆様より細やかな配慮を頂き、不思議とすぐに慣れ、とても働きやすい環境でした。

今でも共に従事し、なんとかか力になりたいという思いのなか闘った仲間達を誇りに思います。ありがとうございました。



崎田 宏 看護師
社会医療法人財団池友会
福岡和白病院

私が従事していた2020年12月ごろは、まだコロナに対する周囲の眼も厳しく、センターの廊下の塀が高く周囲から

見えない環境だったことを強く覚えています。赤い制服のままセンター外の本館に行かないようになど、気を遣う場面がたくさんありました。一番大変だったのは、毎週人が入れ替わり、電子カルテの使い方や物品の場所・人の名前も覚えきらない状態で業務を進めることでした。しかし、センターに集まる人は、みな医療に対する知識や技術が高いだけでなく、コミュニケーション能力も高く、大変な中でも楽しく業務に従事することができました。

現在ではウィズコロナという言葉も出て、少しずつ過度に恐れる風潮から感染対策が日常に定着する姿へと移行していることを嬉しく思います。たくさんの経験をさせていただいた、関係各所の方々に深く感謝しております。



佐々木 綾菜 看護師
特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン
空飛ぶ捜索医療団 "ARROWS"

大阪コロナ重症センターでは、2021年5月の1か月間勤務しました。センターの稼働開始から時間が経っていたため、勤務開始時にカルテ使用方法やルール等を分かりやすくオリエンテーションしていただき、スムーズに勤務を開始することができました。また、ホテルの宿泊体制やバス移動も整えられており、快適に勤務にあたらせていただきました。

センターはコロナ患者のために設置されただけあり、ゾーニング等の感染対策が確実に取られており、安心して働くことが出来ました。ここでの感染対策は、重症センターでの勤務を終えた後他の場所でコロナ支援を行う上でも参考にさせていただきました。COVID-19が5類となることに伴い、今後今回のようなコロナ施設が設置されることはないかもしれませんが、コロナに限らず新たな感染症が現れた際にこの度の活動を繋げていくことが出来ると感じています。皆さまお疲れ様でした。ありがとうございました。

センターはコロナ患者のために設置されただけあり、ゾーニング等の感染対策が確実に取られており、安心して働くことが出来ました。ここでの感染対策は、重症センターでの勤務を終えた後他の場所でコロナ支援を行う上でも参考にさせていただきました。COVID-19が5類となることに伴い、今後今回のようなコロナ施設が設置されることはないかもしれませんが、コロナに限らず新たな感染症が現れた際にこの度の活動を繋げていくことが出来ると感じています。皆さまお疲れ様でした。ありがとうございました。



佐々木 志のぶ 看護師
秋田大学医学部附属病院

全国各地からたくさんの方々と、患者の回復に向けて意見を出し合いセンター運営に関わることができたことに感謝しています。

コミュニケーションやケアのスキルも高い方々と働き、毎日が学びと発見の連続で、とても得難い貴重な経験です。当時、秋田県ではまだ感染流行には至っておらず、当院ICUでは重症コロナ患者を受け入れた経験がありませんでした。帰県後は、すぐにICUの環境を整備しスタッフの安全を確保、間もなくして初めて重症患者を受け入れることとなりました。受け入れる際の緊張感は大きかったのですが、センターで得た知識や皆様からのノウハウをもとに、無事に患者の回復に繋ぐことができました。今、コロナ禍前のように動き出そうとしていますが、改めてセンターの果たした役割の大きさを振り返っています。各地での皆さんの活躍に想いを馳せながら、いつかまた一緒にできたらと思います。どうぞ、お互い健康に気を付け頑張りましょうね。



佐々木 宣行 准看護師
陸上自衛隊中部方面隊

大阪コロナ重症センターで約2週間、勤務しました。

普段の業務や環境とは異なる部分が多く、戸惑うこともありましたが、勤務開始前に事前のオリエンテーションや教育があり、問題なくスムーズに勤務できたと思います。様々な所から勤務する人たちが集まり、コロナ患者のために危険も顧みず皆一丸となって熱心に勤務していて、いろいろなことが勉強になるとともに大きな刺激になりました。

また、宿泊は個室を用意して頂き、病院への送迎、お弁当やその他カップ麺等の増加食の支給など、管理面でも良くしていただきました。

大阪コロナ重症センターで関係した方々にお世話になり、何事もなく終えることができました。ありがとうございました。



佐々木 祐美 看護師
富山大学附属病院

大阪コロナ重症センター運営スタッフの皆様、約2年半の活動、大変お疲れさまでした。私は、文部科学省の要請により、令和3年4月末に富山大学附属病院より2週間の派遣で活動させていただきました。当時は、当院で初めて派遣されるスタッフということもあり、事前確認等の手続き中にだんだんと不安になって着任しましたが、滞在ホテルや通勤バスが準備されていたことにより、安心して勤務することができました。また、多くの派遣スタッフをまとめ、勤務時間内に終了する業務整理はすごい手腕だなと感じていました。

2週間経過すると、少し業務内容やパソコン操作にも慣れ、患者さんに関わる時間も増えていきました。重症者に関わる機会も増え、もう少しここで頑張れるかもと感じた頃に派遣期間が終了していく…そのことに少しの寂しさも感じました。家族や友人に見守られない死を経験した何とも言えない虚しい感情は今も残っています。患者も私もむなしくない看護を目標に今後も頑張りたいと思います。貴重な経験をありがとうございました。

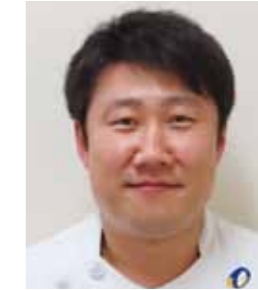
2週間経過すると、少し業務内容やパソコン操作にも慣れ、患者さんに関わる時間も増えていきました。重症者に関わる機会も増え、もう少しここで頑張れるかもと感じた頃に派遣期間が終了していく…そのことに少しの寂しさも感じました。家族や友人に見守られない死を経験した何とも言えない虚しい感情は今も残っています。患者も私もむなしくない看護を目標に今後も頑張りたいと思います。貴重な経験をありがとうございました。



佐藤 純 看護師
旭川医科大学病院

私は2週間派遣され北は北海道、南は九州という様々な地域の看護師と協働し、挿管又は気管切開管理中の患者の看護にあたりました。私の勤務期間内だけでも10名の患者が亡くなり、空いた病床にはすぐ新たな患者が入院してくる状態で、無力感を抱くこともありました。ある患者は呼吸状態が改善したため鎮静を浅くした結果、状況がわからず暴れ呼吸状態悪化という悪循環を辿ることもありました。そのような中自分の今ある状況を患者が認識できるよう常に声掛けを行うなど寄り添い、面会できない家族とのビデオ通話等を通じて患者だけでなく家族の不安の軽減も図ることがコロナ禍という今までにない状況下での看護では重要であったと感じました。ホテル住まい、昼・夕食は自身で調達、フルPP Eでの長時間の勤務、初対面の看護師との協働という環境ではありましたが、様々な地域の看護師が持つ看護観や知識、技術に触れられた事はとても貴重な財産になりました。

私は2週間派遣され北は北海道、南は九州という様々な地域の看護師と協働し、挿管又は気管切開管理中の患者の看護にあたりました。私の勤務期間内だけでも10名の患者が亡くなり、空いた病床にはすぐ新たな患者が入院してくる状態で、無力感を抱くこともありました。ある患者は呼吸状態が改善したため鎮静を浅くした結果、状況がわからず暴れ呼吸状態悪化という悪循環を辿ることもありました。そのような中自分の状況を患者が認識できるよう常に声掛けを行うなど寄り添い、面会できない家族とのビデオ通話等を通じて患者だけでなく家族の不安の軽減も図ることがコロナ禍という今までにない状況下での看護では重要であったと感じました。ホテル住まい、昼・夕食は自身で調達、フルPP Eでの長時間の勤務、初対面の看護師との協働という環境ではありましたが、様々な地域の看護師が持つ看護観や知識、技術に触れられた事はとても貴重な財産になりました。



佐藤 拓也 看護師
大分大学医学部附属病院

私は令和3年5月に、大阪コロナ重症センターへ派遣され、看護師として2週間の勤務をしました。

大阪での勤務は、レッドゾーンの中での患者ケアがメインで、慣れない防護服での長時間作業に四苦八苦し、精神的にも肉体的にも疲労が溜まっていました。何より、慣れない土地での生活の上、休日のほとんどの時間をホテル内で過ごさなければならない状況に大きなストレスを感じました。

それでも、感染が拡大している地域で、必死で働いている医療者の助けに少しでもなればと思い、勤務していました。重症センターで働いている看護師の方は、大勢来る派遣看護師がスムーズに働ける様、現場を整備し、手順書を作り、働きやすい環境で迎えてくれました。その上で派遣看護師の精神面まで気遣って、残務のフォローまでしてくれていました。本当にすごい方々と仕事が出来たのだと感じました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。



佐藤 尚徳 看護師
岐阜大学医学部附属病院

私は、2021年4月から1ヶ月間、大阪コロナ重症センターに派遣された。派遣直後は、新型コロナウイルスに対する不安があったが、業務に従事する中で、家族への対応は非常に印象深かった。スタッフリーダーから、ご家族対応の注意点や大切さに対して助言を得てはいたが、慣れない業務の中、命の危機に瀕しているご家族への対応への不安はぬぐい切れなかった。しかし、リーダーからのアドバイスにより、適切な対応ができ、短い期間であったが、ご家族の役に立てたと感じた。この派遣は、自身の看護実践において貴重な経験となった。大阪コロナ重症センターでの勤務は厳しいものだったが、周囲のサポートや経験豊富な先輩方からの助言に支えられ、貴重な時間を過ごすことができた。今後、今回の経験を活かし、困難な状況に立ち向かいながら、患者様とご家族に寄り添った看護を提供していきたいと考える。

私は、2021年4月から1ヶ月間、大阪コロナ重症センターに派遣された。派遣直後は、新型コロナウイルスに対する不安があったが、業務に従事する中で、家族への対応は非常に印象深かった。スタッフリーダーから、ご家族対応の注意点や大切さに対して助言を得てはいたが、慣れない業務の中、命の危機に瀕しているご家族への対応への不安はぬぐい切れなかった。しかし、リーダーからのアドバイスにより、適切な対応ができ、短い期間であったが、ご家族の役に立てたと感じた。この派遣は、自身の看護実践において貴重な経験となった。大阪コロナ重症センターでの勤務は厳しいものだったが、周囲のサポートや経験豊富な先輩方からの助言に支えられ、貴重な時間を過ごすことができた。今後、今回の経験を活かし、困難な状況に立ち向かいながら、患者様とご家族に寄り添った看護を提供していきたいと考える。



佐藤 恵 看護師
大分大学医学部附属病院

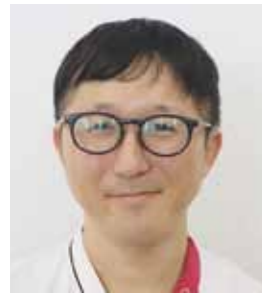
2021年5月に2週間の派遣勤務を経験しました。短期間で慣れないことも多くありましたが、レッドゾーン内

でもエリア毎にリーダーが配置されていることで相談がしやすい雰囲気でした。

業務の中では、勤務時のブリーフィング・デブリーフィングで問題共有や意見交換が活発に行われており、家族への連絡や面会の方法、荷物の取り扱い等自施設でも問題となっていることを再検討するきっかけにすることができました。

また、センターでは他施設からの派遣看護師が多く勤務していましたが、各自が協力し合ってケアや休憩の声かけをするなどスタッフの雰囲気がよく、それぞれの県でのCOVID-19感染状況や患者の現状等を情報共有できたことが印象に残っています。

物資の不足や世界的な感染症の流行といった前例のない対応を迫られる中でも、医療職に限らず多職種で協力し合って柔軟に対応することが経験できた良い機会となりました。



佐野 豊秋 看護師
社会医療法人財団池友会
福岡和白病院

当時、急遽の派遣要請を受け戸惑いや不安、準備不足のなか参加させていただいたことを思い出します。しかし、専用のホテルや送迎バスなど活動がしやすい環境を整えて頂き大変ありがたい気持ちでした。現場においても師長と面談を通してこれまでの経験や能力、気持ちなどを考慮し、レッドゾーンへの配置や業務の配慮を頂き大変感謝しています。また、業務を遂行する中で、各地域から派遣された方々との情報共有ができたこと、共に働くことで様々な技術や知識の習得ができ、自身のモチベーション向上に繋がりました。そのため、自施設へ戻った際は大阪コロナ重症センターで学んだ、感染管理の知識や技術を伝達し、自部署へ取り入れることができました。

短期間ではありましたが、共に切磋琢磨して働いた中で友人も作ることもできました。このような貴重な機会を頂けたことは、自身の財産となっています。ありがとうございました。



塩原 潤 看護師
富山赤十字病院

大阪コロナ重症センターへの派遣の要請があることを知り「困っている人を助きたい」その一心で迷わず志願しました。

全国から派遣されている看護師は経験値や勤務環境が異なっていたが「助けられる命は助きたい」という目指すべき目標が共通しており、とても心強さを感じながら勤務していたことを思い出します。勤務初日に師長さんとの面談で「勤務している病院では100%のパフォーマンスでできていたことが、ここでは50%でできればいい方だと思います。患者さんの為に一緒に頑張りましょう」と言って頂いたことに過剰な緊張が抜け、今まで考えていた不安が吹き飛びました。また大阪府からのサポートも充実しており、安心して勤務に従事することができました。

大阪コロナ重症センターで従事させて頂いたことは看護師人生の中で大きな自信に繋がりました。お世話になった皆様、ありがとうございました。これからも患者さんの為に共に頑張っていきたいと思います。



重信 静香 看護師
一般財団法人住友病院

私が大阪コロナ重症センターの派遣についてお声がけをいただいたのは2020年の夏でした。私に何が出来るのだろうか、という不安がありましたが、センターの運用を開始するにあたり、事前のコロナや集中治療に関する勉強会や運用開始前のセンターの見学会へ参加することで、不安が期待に変わっていききました。

センターのレッドゾーン内はとても広く、最新の医療機器が揃えられており、不自由なく看護を行える環境だったと思います。日頃様々な場所で活躍されている看護師や医師、コメディカルの方と一緒に働く中で、今まで以上にコミュニケーションの重要性や協働することの大切さを学ぶことができました。また、日々患者様やご家族、地域の方から励ましや御礼の手紙をいただきとても励みになりました。吉村知事をはじめ多くの方の思いが詰まった場所で看護師として勤務をさせて頂いた事を誇りに思っております。ありがとうございました。

センターのレッドゾーン内はとても広く、最新の医療機器が揃えられており、不自由なく看護を行える環境だったと思います。日頃様々な場所で活躍されている看護師や医師、コメディカルの方と一緒に働く中で、今まで以上にコミュニケーションの重要性や協働することの大切さを学ぶことができました。また、日々患者様やご家族、地域の方から励ましや御礼の手紙をいただきとても励みになりました。吉村知事をはじめ多くの方の思いが詰まった場所で看護師として勤務をさせて頂いた事を誇りに思っております。ありがとうございました。



品川 慧奈 看護師
川崎医科大学附属病院

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、設立された大阪コロナ重症センターで医療業務に従事させていただきました。

私が看護師1年目の年に多くの重症感染者が発症していました。感染拡大の広がる医療現場で重症管理が必要となった患者の看護がしたいという強い気持ちから自ら志願しました。私は、看護師経験年数2年に満たない頃でした。そこには、全国から様々な医療従事者が集まり働いている環境でした。人工呼吸管理の患者の多さや切迫した現場の中で初めて出会う医療従事者達が協力して働く姿に感動したことを覚えています。働くことに不安があった私ですが実際は、ゾーニング、スムーズな治療と看護の提供をされている現場で色々な施設から来たスタッフと勤務ができた事は、患者と向き合いながら多くの学びを得ることができました。

今後も大阪府での経験を活かし、集中治療にある患者とその家族に寄り添える看護師でありたいと思います。



柴谷 涼子 感染管理認定看護師
公益社団法人大阪府看護協会
政策・企画・看護開発部 感染対策担当

自身は、感染管理認定看護師という立場で、以下2点の業務に関わらせていただきました。1点目は、「クラスター発生病院等への出向に関する感染対策の研修」講師、2点目は、実際にクラスターが発生した病院に対して、重症センター看護師を派遣する前の感染対策の視察です。病院に入ってゾーニングやその他の感染対策についての確認と助言をさせていただきました。講義では施設の現状などを伝えました。重症センターで勤務する看護師のほとんどは施設での勤務経験はありませんので、非常に熱心に聴講いただき質問もいただきました。社会福祉施設への派遣はありませんでしたが、病院への派遣の際は、これまでの経験を生かされ、患者さんや職員、そして自らを感染症から守るために、安全で効率的な対策の提案などをされており、受け入れ側の病院は非常に安心され、重症センタースタッフの方々の看護実践力の高さを実感いたしました。

自身は、感染管理認定看護師という立場で、以下2点の業務に関わらせていただきました。1点目は、「クラスター発生病院等への出向に関する感染対策の研修」講師、2点目は、実際にクラスターが発生した病院に対して、重症センター看護師を派遣する前の感染対策の視察です。病院に入ってゾーニングやその他の感染対策についての確認と助言をさせていただきました。講義では施設の現状などを伝えました。重症センターで勤務する看護師のほとんどは施設での勤務経験はありませんので、非常に熱心に聴講いただき質問もいただきました。社会福祉施設への派遣はありませんでしたが、病院への派遣の際は、これまでの経験を生かされ、患者さんや職員、そして自らを感染症から守るために、安全で効率的な対策の提案などをされており、受け入れ側の病院は非常に安心され、重症センタースタッフの方々の看護実践力の高さを実感いたしました。



島崎 淳也 医師
大阪大学医学部附属病院
高度救命救急センター

阪大救命Cからは2021年4月以降は常時1名のスタッフを派遣し、希望者6名でローテーションを組み約2週間交代で勤務した。

・比較的ベテランのスタッフが多かったが、若手中心の自治医・大阪市大(現・大阪公立大)派遣スタッフと組むことでバランスが良かった。
・阪大救命CはCOVID-19の入院治療をおこなっていないため、OC4に勤務することで重症COVID-19治療のノウハウを得ることができた。
・特に患者が激増する時期はスタッフも精神的に疲弊したが、2週間と比較的短い期間での交代ということで切り替えがしやすかった。

個人的には藤見センター長、木口副センター長の指揮のもとで臨床に集中でき、非常に勤務しやすい環境であったと思う。またサイバーテロでシステムダウンした際は、タイミング悪く病欠・出張でスタッフが少なかった。その中で紙カルテや指示簿のシステムを構築し運用したのは今となっては良い思い出である。

清水 渉 診療放射線技師

大阪コロナ重症センター開設の早い時期から放射線業務(ポータブル撮影、CT撮影)で従事させていただきましたが、使い易く汎用性の高い機器が導入されており、個々のマニュアルもしっかりと整備されていたように思います。初めて来させて頂いた時の業務説明の際、榎山技師長よりすごく丁寧に直接ご指導頂いたことは未だに強く印象に残っています。また、一緒に業務を行った放射線技師をはじめ、スタッフの方々も優しく、人間性に優れた方ばかりでしたので非常にスムーズに業務が行えたように思います。病気や施設の特性上、患者さんと会話して触れ合える機会がほぼありませんでしたので、その点は少し残念だったような気がします。今回、大阪コロナ重症センターで働く機会を与えて頂いた大阪府職員の方々には、深く御礼申し上げます。貴重な経験をありがとうございました。



清水 涼子 助産師
社会医療法人愛仁会千船病院

私が重症センターで活動したのは、令和3年3月の1ヶ月間でした。ICU経験のない私は、全国各地から来た看護師さん

達から多くのことを教わりながら、自分ができることを日々行いました。毎日行われるカンファレンスでは、患者に必要なケアを考えるための意見交換や業務を漏れなく円滑に行うためにどうすれば良いのか、などが話し合われていました。経験年数も異なり、初対面の職員も多いため、物品や薬品の略称ではなく、正式名で伝えるなどコミュニケーションの取り方はとても学びになりました。宿泊施設での生活はバスの送迎があったため、身体的にも精神的にも安心でした。また、定期的に配布されるお弁当が楽しみであり、励みになりました。大阪コロナ重症センターでお世話になった皆様、ありがとうございました。



下垣内 順子 看護師
社会医療法人仙養会北摂総合病院

2021年2月の1ヶ月間、大阪コロナ重症センターで勤務させて頂きました。1ヶ月間という限られた日数でしたが、緊張

の中で勤務開始となりました。すでに勤務されている方にご指導頂き、また同じ時期に勤務開始となったスタッフと助け合うことであつという間に1ヶ月が過ぎていったように感じています。重症センターでの業務はマニュアル化されているため業務に従事しやすく、そしてブリーフィング・デブリーフィングを行うことで行動計画の確認、行動の振り返り・共有を行うことができ、徐々に不安も軽減していきました。大阪コロナ重症センターでの勤務は、長年看護師として働いてきたことが役に立てばと思いを挙げました。しかし振り返ってみると、たくさんのことを学ばせていただいたと思います。またこのような機会があれば参加していきたいです。



**特定非営利活動法人
ジャパンハート 看護師**
(団体からの寄稿)

ジャパンハートから派遣した看護師からの意見を寄せさせて頂きます。

こうした取り組みが、次のパンデミックに生かされることを祈念しています。

- ・職員が全国各地から集まっているため、それぞれの所属先や都道府県の対応などの情報交換が出来た。
- ・各自が本来働く施設と異なるシステム、機材、人などで混乱している上、人員の回転が早く、慣れ初めた頃に活動終了する状態だった。
- ・普段では経験しない環境に身を置く事で、適応力を伸ばす良い機会になった。
- ・繁忙期に波があり、初期の頃は患者が少ない一方で医療従事者の数は潤沢であったため、区内のクラスターなどへも柔軟に応援可能な制度・契約形態が望ましいと感じた。
- ・宿泊施設には学校や大阪府からの激励のメッセージやお菓子を頂くこともあり、応援してくれる方達に感謝しながら頑張れた。
- ・残業となった場合は送迎バスが使えず自費で交通費を捻出する必要があったため、引き継ぎ者を選ぶように采配した方が良かった。
- ・簡単な業務マニュアルがあったが、細部は表示や冊子での掲示・伝言による業務周知であったため、人によって見聞きした内容に相違が生じる場面が見られた。

城 つづみ 看護師
八尾市立病院

1ヶ月間、重症センターで勤務させて頂きました。センターでは、重症看護の経験に長けたスタッフが中心となり日々奮闘しており、患者さんの容体が急変した場合でも、リーダーが的確に指示を出し、メンバーは慌てることなく冷静に対処しているのが印象的でした。皆が、1人でも多くの患者さんを助けたいという意識、専門職としてのプライドを持ちながら、積極的に意見交換をしており、良い刺激を沢山頂きました。そして各々が、院内でクラスターを出さないという思いの下、PPEの着脱チェック、休憩中のソーシャルディスタンス・黙食の徹底、スタッフの体力面・精神面に配慮した定期的な休憩の采配など、細やかな対策もされていました。自身の病院に帰った後も、コロナ患者さんを受け持たせて頂く機会がありましたが、センターでの経験が自身の糧になっていた様に思います。今回の貴重な経験を活かし、今後も看護という仕事に真摯に向き合っていきたいと思います。



常玄 大輔 診療放射線技師
地方独立行政法人
りんくう総合医療センター

りんくう総合医療センター診療支援局放射線部門 常玄です。私は約2年にわたり大阪コロナ重症センターで従事しました。

大阪急性期・総合医療センター 榎山技師長をはじめ画像診断科で従事している診療放射線技師の方々が作成していただいた各装置のマニュアルや感染防護に必要な物品の整備をしていただき、当初から大きな問題もなく従事できたことに感謝します。また病棟区画と休憩区画が分かれており、安心して従事できました。約2時間レッドゾーンで通気性の悪い防護服を着用したまま連続で20件を超えるポータブル撮影は喉が乾き、身体的に大変だったことを今でも覚えています。また、普段接することがない他施設から応援に来られている医師や看護師・スタッフと一緒に大阪コロナ重症センターに従事できたことにとっても良い経験ができました。Covid-19は未だ猛威を振るっていますが、この経験を活かし今後も府民のために貢献します。



白岩 勇介 看護師
広島大学病院

2021年4月に2週間大阪コロナ重症センターで活動させて頂きました。派遣されたスタッフ数に対してサポートして

くださる大阪コロナ重症センターのスタッフ数が少なく、業務の細かな点で行き違いがありましたが、当時の重症センターの状況を考えると最大限のサポートをしていただいたと感じています。派遣期間中、スタッフの方々には業務以外の面でもサポートしていただき概ね問題なく活動を終えることができました。宿泊ホテルは快適でしたし、送迎バスなど手厚いサポートがありストレスはありませんでした。当時、全国でも感染者数の多い大阪府に派遣されることに少し不安もありましたが、大阪コロナ重症センターで勤務されている方々や、同じ期間に派遣された医療スタッフの方々と全国各地のCOVID-19感染に関する意見交換ができ非常に貴重な経験となりました。ありがとうございました。



白坂 渉 医師

医療法人徳洲会岸和田徳洲会病院

私は、コロナ第一波当時は大阪急性期・総合医療センターで救急科医師として勤務しておりました。原因不明の重症肺炎として、救命センターでの仲間・先輩方と集中治療を経験し、日々奮闘していたことを思い出します。デルタ株の時は、次から次へと重症呼吸不全が搬送され、ほぼコロナ一筋の生活でした。たくさんの患者さんが亡くなりました。家族や大切な人と最後に会えないことのつらさ、コロナであることで葬儀すらあげられなかったことなど、無念を感じながらお亡くなりになった患者さん達を決して忘れることはできません。救命センターでは人工呼吸、ECMOも多く経験し、他病院の救急科医師とも話をする機会が増えたこともよかったですと感じています。藤見センター長から重症センターで非常勤勤務をしてみないかと言っただけは、非常に光栄でありました。重症センターでの勤務中には過去に勤務した病院の看護師や医師と再会できたことや、他の救命センター医師とディスカッションできたことも自分にとってプラスになったと感じます。コロナ診療を通じて経験したこと、第一波から現在に至るまで、コロナ診療の最前線に携われたことは、私の医師人生に大きく影響を与えてくれたと思っています。今後もコロナはなくなることはないの、積極的にコロナの患者の診療を継続していこうと思っています。重症センターが無くなることは少し寂しさも感じます。重症センタースタッフの皆様方、本当に有難う御座いました。またいつか皆であんな時代があったねと話し合える日がくることを期待しつつ頑張ってます。

私は、コロナ第一波当時は大阪急性期・総合医療センターで救急科医師として勤務しておりました。原因不明の重症肺炎として、救命センターでの仲間・先輩方と集中治療を経験し、日々奮闘していたことを思い出します。デルタ株の時は、次から次へと重症呼吸不全が搬送され、ほぼコロナ一筋の生活でした。たくさんの患者さんが亡くなりました。家族や大切な人と最後に会えないことのつらさ、コロナであることで葬儀すらあげられなかったことなど、無念を感じながらお亡くなりになった患者さん達を決して忘れることはできません。救命センターでは人工呼吸、ECMOも多く経験し、他病院の救急科医師とも話をする機会が増えたこともよかったですと感じています。藤見センター長から重症センターで非常勤勤務をしてみないかと言っただけは、非常に光栄でありました。重症センターでの勤務中には過去に勤務した病院の看護師や医師と再会できたことや、他の救命センター医師とディスカッションできたことも自分にとってプラスになったと感じます。コロナ診療を通じて経験したこと、第一波から現在に至るまで、コロナ診療の最前線に携われたことは、私の医師人生に大きく影響を与えてくれたと思っています。今後もコロナはなくなることはないの、積極的にコロナの患者の診療を継続していこうと思っています。重症センターが無くなることは少し寂しさも感じます。重症センタースタッフの皆様方、本当に有難う御座いました。またいつか皆であんな時代があったねと話し合える日がくることを期待しつつ頑張ってます。



信藤 麻友 医師

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

私は2022年7月から9月までの3カ月間、大阪コロナ重症センターで勤務させて頂きました。コロナ禍のはじまりとともに入職し、押し寄せては引いていくコロナの波とともに初期研修を終えて、医師3年目となったタイミングでした。それぞれの波で患者層に特徴がありましたが、私が勤務した時期と重なる第7波は、重症呼吸不全患者が一定数いる一方で、様々な合併症を有する軽症から中等症の患者が多かったように思います。患者数がかなり多く、現場はベッドが不足し、逼迫した状態でした。知識・経験ともに浅く、正解が分からないことが多い中、日々の業務に追われ、精神的にも身体的にもハードでしたが、私は周りのスタッフにかなり助けられました。様々なバックグラウンドをもつ医師や看護師、コメディカルの方々が集まる重症センターで、多くの方々と出会い、たくさんの貴重な経験を積むことができ、今後につながる大変有意義な時間を過ごせました。

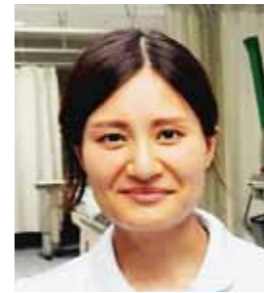


晋山 直樹 医師

地方独立行政法人堺市立病院機構
堺市立総合医療センター

数か月に一度、応援で当直勤務しました。普段、堺では外科系救急ばかりを診ているため、COVID-19はOC4でしか診ることがなく、貴重な経験ができと思います。日本で唯一(?)のCOVID-19専門のICUの運営に微力ながら関わったことで、客観的に自分が大した働きをしたわけじゃないけれど、多少なりとも大阪の三次救急への負荷を減らせたかと思うと誇らしいです。OC4で使っていたインカムやオンライン面会(看取りまでも)は斬新だと思った反面、非接触のためには仕方ないのかもしれませんが、「何かあればベッドサイドに駆けつけてまず診る、患者に寄り添う。」と言った、これまで当たり前になっていた規範や態度が通用せず、違和感を抱いたのも事実です。あとは、ここまで

整備したハードを例え仮設とはいえ、潰すのは勿体無い。来るべき第7波に向けて、あるいは新たな感染症に備えるため、何時でも再開できるように残したらどうでしょう。



菅野 綾子 看護師

医療法人渡辺医学会桜橋渡辺病院

日々コロナ感染者が増え、看護師として関わられることはないかと考えていた時に重症センターへの派遣要請の声が掛かりました。何か役に立ちたいと志願しましたが、徹底した防護具の着用や慣れない環境の中思ったように体が動かず、疲れや悔しい思いもありました。しかし、同じ宿泊施設や移動バスの中でスタッフの方々と話す機会があり、悩みや思いを共感することができ頑張ろうと思うことができました。

自施設では感染対策チームとして活動しています。COVID-19感染対策が確立していない中当院でも感染対策をどうするか悩んでいました。重症センターでの感染対策を参考にしPPE装着順に防護具を並び替えることや、PPEのポスター掲示を行い感染対策を実施しています。

今回の経験を活かし、今後も感染対策やCOVID-19感染患者へのケアについて病棟へ情報提供を行いながら充実したケア提供を行っていこうと思います。



洲合 ひとみ 看護師

大阪府済生会吹田病院

世界が新型コロナウイルスに脅かされ、多くの国の医療従事者が奮闘する中、私は大阪府で設立された大阪コロナ重症センターで、2020年12月からの2週間、看護師として業務に従事させて頂きました。当時は、全国から派遣された多くの医療スタッフがセンターで患者様の看護業務に携わりました。派遣時は看護業務も環境や設備の慣れない中ですが、派遣された仲間と共に協力し業務を行いました。毎日一心不乱に頑張ったことが、今でも鮮明に記憶に残っています。ここで得た経験は、私の看護師人生の中でも一生忘れられない経験であり、自分自身を誇りに思えた経験です。この現場で培った全てを今後の看護師人生でも遺憾なく発揮し業務に邁進していきたいと思っています。

派遣先で共に尽力した仲間達、急性期・総合医療センターの皆様、派遣時にサポートしていただいた自施設の皆様に感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。



鈴木 陽介 看護師

国立大学法人浜松医科大学
医学部附属病院

私の任期は2021年4月26日から5月9日でした。第四波で新規感染者が急増している時期で、活動前日の4月25日に静岡から大阪へ向かう新幹線はほとんどが空席だったことを覚えています。

一方、重症センターの病室は常に満床でした。重症度も高く、在任中に何名もの患者さんが亡くなりました。感染拡大のさ中であつたため、私たちスタッフの手で直接納棺し、ご家族が対面できるのは火葬後、というような状況でした。患者さんやご家族にとって、また看護師にとっても、これほど辛く悲しいことはなかったと思います。このように大きく制限がある状況でも、「よりよい看護を提供しよう」と前向きに活動されていた皆様の姿には大変感銘を受けました。

この「困難な状況だからこそ協働して創意工夫をする」経験は、私の看護師人生において大きな糧となりました。末筆ながら重症センターの運営に関わった全ての方に対して敬意と感謝の意を表します。



関目 純子 看護師

滋賀県立総合病院

本来とは違う病院で働くこと自体初めてであり、システムや医療機器の違い、働き方の違いなどがあり、自分でつとまるのかと不安を抱えていましたが、リーダーやサブリーダーがいて、話しかけやすい環境になっていたため、少しずつ不安もなくなり落ち着いて仕事に取り組むことができました。様々な病院からスタッフが集まり、入れ替わりもたくさんあった中で、それぞれコミュニケーションをしっかりと取りながら患者さんのケアを行なうことができ、今思えばすごいことだったんだと思います。基盤を作って頂いていたため、短期間の派遣でも業務を遂行することができたんだと思います。

休憩などについては施設の基準もあり仕方ないことですが、時間は短いなと思いました。仮眠時間と夜勤の食事休憩時間は別で設けてあると、もう少し仮眠で体を休めることができましたと思います。

今回は貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。



大東 周子 看護師
八尾市立病院

2020年12月10日からオープニングスタッフとして、2021年1月31日まで重症センターに勤務させていただきました。100名以上のスタッフが合流し、なにもかもが不安でしたが、大阪急性期・総合医療センターのスタッフの方々のフォローのお陰で無事に派遣期間を終了する事ができました。着任時の研修はカルテの操作説明から防護服の着脱方法まで、充実した内容でした。初回患者受け入れまでにシミュレーションを実施するなど、事前の研修のおかげで不安なく患者の受け入れをすることができました。また、朝夕のカンファレンスでは、スタッフと意見交換することで、業務の振り返りを行うことができ、良い結果に繋がったと思います。年末年始期間はスタッフの数も少なく、業務が大変になりましたが、勤務者が協力し対応することができました。勤務期間中、多くのご指導を頂いたこと、貴重な体験をさせていただいたことに感謝いたします。



高尾 香代 看護師
島根県立中央病院

センター立ち上げ時から1ヶ月間、全国知事会派遣のメンバーとして勤務させていただきました。あの当時はコロナ派遣というだけで特別な事をするかのように言われていたのですが、私自身は看護師が必要とされている所へ行き看護を行うだけ、という思いでした。

勤務が始まった頃は慣れないシステムに翻弄され、思うように看護ができず不甲斐なさを感じる事も多々ありましたが、その日初めて会ったスタッフ同士が患者さんの事を考え、ケアについて話し合い看護を行っていく日々は、看護師本来の姿のようで、看護師を志した頃の気持ちを思い出させてもらえました。

私が派遣へ行くにあたり数えきれない方々の協力があった事、その方々のおかげで勤務を無事に終わられた事に感謝しています。そして、この派遣で出会った仲間とは今も繋がっており、良い出会いがあった事にも感謝しています。貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。

高瀬 正恵 看護師
地方独立行政法人
市立東大阪医療センター

大阪コロナ重症センターでの勤務は、重症患者に対し専門的な知識と技術が求められましたが、認定看護師としての役割が発揮できるとも良い機会でした。スタッフの配置では、重症患者に対し十分にケアが提供できる配置がされており感銘を受けました。COVID-19は厳重な隔離管理であり、通常の診療やケアが提供できないことにジレンマを感じる反面、最善のケアが提供できるようにコアメンバーが中心となり、マニュアルが随時改訂されておりとても働きやすい環境でした。



高西 弘美 看護師
社会医療法人愛仁会千船病院

私は、2021年1月より1ヶ月間勤務させていただきました。慣れない環境と、毎日「はじめまして」と挨拶するメンバーとの勤務に、患者さんの安全と業務を覚えることに精いっぱいでした。しかし、1ヶ月が終わろうとする頃には、私が提案したケアをスタッフが取り入れてくれ、師長からデブリーフィングの時間にスタッフと共有する機会もいただき、医師・看護師・多職種全員が1つの目標に向かい「よいケアはどんどん取り入れよう」という姿勢を感じました。また、センターでは、物品の扱いや感染予防対策だけでなく、コロナ患者でもできるケアや家族対応を学び、自施設での看護に役立てることができました。

1ヶ月はあっという間で、自分なりの役割発揮できるようになった時期に勤務終了したことが心残りでしたが、センター勤務の間サポートして頂いた自施設のスタッフと、貴重な経験をさせていただいた重症センターの皆様へ感謝しています。



高橋 裕美 医療ソーシャルワーカー
大阪大学医学部附属病院

私たちソーシャルワーカー2名は、最初と最後の数か月に阪大病院から派遣され、期間限定ながらチームの一員として業務に携わせて頂きました。主に転院調整を担当し、本来ならキーパーソンになる家族が、入院中や濃厚接触者で連絡が取れないなど普段とは違う環境調整に苦労したことを思い出します。派遣当初はルールやシステムの違いに戸惑うこともありましたが、多職種との密なコミュニケーションの大切さや、何よりも全スタッフが同じ目的で、最後まであきらめずに治療を行う姿に、自身の仕事の原点に立ち返らされた気がしました。治療の甲斐なく亡くられる方、元の生活に戻っていかれる方、転帰は様々でしたが、全ての患者に対し究極のチーム医療が展開され、皆さんと共通の目標に向かって業務ができたことを誇りに思います。未曾有の感染禍に、このような貴重な機会と経験を与えて頂いたことに感謝し、併せて皆様の今後のご活躍をお祈りしています。

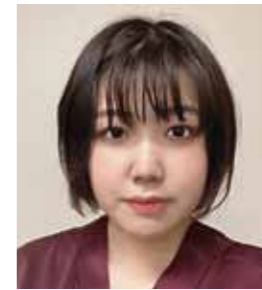


高原 有貴 看護師
信州大学医学部附属病院

私は2021年6月より勤務しました。COVID-19対応は自施設での経験もありましたが、慣れない土地や施設での働きに多少の不安を持ちながら赴いたことを覚えています。ですが、システムやルールが整っており、自施設に戻った際にそれらを取り入れることもでき、学びとなりました。

そして、特に印象的だったことは家族支援でした。日頃できていた家族支援が困難となり、葛藤を抱える状況は多く見られました。大阪コロナ重症センターでは、既にオンライン面会が日常的に行われており、オンライン上で付き添われながら看取ることもありました。また、ご家族へ医師からの説明・看護師からの体調面、精神面の把握や労いが電話でも定期的に行われていました。多忙で制限のある過酷な状況下でも、家族支援に取り組めるような関わりをスタッフ全体で実践されており、これも学びとなりました。

貴重な経験をさせていただきありがとうございました。



武田 悠莉子 医師
大阪医科薬科大学病院

私は2022年4月から非常勤医師として当直勤務をさせていただきました。常勤先の病院からも多数の患者を受け入れていただきましたし、実際の入院患者をみても本当に大阪中の病院から患者を受け入れていた印象でした。私が勤務していたのは夜間のみであったにも関わらず、転院搬送の受け入れをしたのも一度や二度ではありません。大阪府のCOVID-19診療を支えていたのは間違いなく大阪コロナ重症センターであったと感じています。勤務に当たらせていただいたことで、多数のCOVID-19患者の全身管理するという非常に貴重な経験をさせていただきました。今後は各病院でCOVID-19患者を診ていくこととなりますが、今回の経験を活かした診療をしていきたいと思っています。1年間という短い間でしたが少しでも大阪府の医療に貢献できたのならうれしい限りです。



田嶋 みゆき 看護師
医療法人渡辺医学会桜橋渡辺病院

私は普段ICUで重症患者の看護に携わっています。コロナウイルス陽性患者の対応が初めてであった派遣当初、ICUでの経験を活かしたいと強い思いで臨みましたが、いざ完全防護具を装着してREDゾーンに入ると、息苦しさや暑苦しさからすぐに逃げたくなりました。現場の環境に中々慣れず、心身共に疲弊していました。しかし急激に状態が悪化する患者、家族と面会できない患者を目の当たりにし、日頃の経験を活かし、少しでも貢献したいという当初の気持ちへと変わりました。各病院で経験豊富なスタッフが非常に多く集まっており、患者が安心感を得られる看護が提供できるよう尽力しました。

現場以外の楽しみとしては、ホテルで時々飲食店からお弁当の提供があり、自分好みの食事を選択できたことです。通勤時は毎度送迎があり、負担なく通えたのも良かったです。短期間ではありましたが、重症センターでの経験を活かし、引き続き精進してまいります。



田中 真一 看護師

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

約2年3ヶ月という短い期間ではありましたが、大阪コロナ重症センターの運営にあたり、様々な医療従事者の方を始め、

多くの支援者の力を借りて、閉鎖まで走りぬくことが出来ました。この場を借りて御礼申し上げます。

この度、大阪コロナ重症センターの立ち上げに携わらせて頂き、私自身も貴重な経験をさせて頂きました。初めの4ヶ月間のみ専従として、残りの期間は応援という形で管理業務を担当させて頂きました。

私は主にマニュアル作成等を担当させて頂きました。また、立ち上げにあたり、勤務するスタッフが、安全かつ、新型コロナウイルス感染症に感染せずに勤務するにはどうすればよいのかなど、日々検討を繰り返しました。結果、大阪コロナ重症センターに従事したスタッフがそれぞれの知識と経験を活かし、スタッフ全員で1つの組織を作り上げることが出来ました。

改めまして、皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



田中 克 医師

大阪医科薬科大学病院

COVID-19 関連肺炎は特にデルタ株の時期にその脅威を思い知らされました。私自身はこれまで循環器内科医として勤務しており、重症肺炎、ARDSの管理は経験の少ない部分もあり緊張感のあるものでした。大阪コロナ重症センターは多数の重症患者を受け入れており、他の病院からも大変心強いものであったと思います。コロナ2019は変異によりその性格を変え、基礎疾患の悪化や誤嚥性肺炎の誘発といった内容に変わりつつあり、その多様な病態にも全て対応してきたこのセンターは多くの患者さんをまた医療全体を救ったと思います。今後は多くの病院でこの疾患を診ていく必要があります。この経験をこれからの診療に生かしていければと思います。

COVID-19 関連肺炎は特にデルタ株の時期にその脅威を思い知らされました。私自身はこれまで循環器内科医として勤務しており、重症肺炎、ARDSの管理は経験の少ない部分もあり緊張感のあるものでした。大阪コロナ重症センターは多数の重症患者を受け入れており、他の病院からも大変心強いものであったと思います。コロナ2019は変異によりその性格を変え、基礎疾患の悪化や誤嚥性肺炎の誘発といった内容に変わりつつあり、その多様な病態にも全て対応してきたこのセンターは多くの患者さんをまた医療全体を救ったと思います。今後は多くの病院でこの疾患を診ていく必要があります。この経験をこれからの診療に生かしていければと思います。



田中 典子 看護師

公益社団法人大阪府看護協会
政策・企画・看護開発部

2020年10月～2021年3月末まで担当させて頂いた。2020年10月に医療機関からの派遣が難しいことがわかり、急遽、大阪府看護協会（以下、当会）で宿泊療養施設で雇用していた看護実践能力の高い看護師9名と新規採用4名を加え、2020年12月1日大阪コロナ重症センターオープン時に、当会として13名を派遣した。人材確保に関してよかったことは3つある。まずは、当会が他のコロナ対策事業も担当していたことから、患者受け入れ開始までに先んじて派遣することができた。次に、当会と大阪府が協働して募集窓口を設置したことから、全国から多くのご応募をいただくことができた。さらに、面接は看護管理経験者2名での実施により、重症看護の実践能力や協調性なども見抜くことができた。それでも、学んだ背景や経験などの違いから、調整や指導が必要な場面も多々あり、大阪コロナ重症センター担当者と共に連携していった。

2020年10月～2021年3月末まで担当させて頂いた。2020年10月に医療機関からの派遣が難しいことがわかり、急遽、大阪府看護協会（以下、当会）で宿泊療養施設で雇用していた看護実践能力の高い看護師9名と新規採用4名を加え、2020年12月1日大阪コロナ重症センターオープン時に、当会として13名を派遣した。人材確保に関してよかったことは3つある。まずは、当会が他のコロナ対策事業も担当していたことから、患者受け入れ開始までに先んじて派遣することができた。次に、当会と大阪府が協働して募集窓口を設置したことから、全国から多くのご応募をいただくことができた。さらに、面接は看護管理経験者2名での実施により、重症看護の実践能力や協調性なども見抜くことができた。それでも、学んだ背景や経験などの違いから、調整や指導が必要な場面も多々あり、大阪コロナ重症センター担当者と共に連携していった。



田中 秀明 看護師

鳥取大学医学部附属病院

大阪コロナ重症センターでは屋外通路の天井まで壁が設置され、報道陣に対する対策もとられており患者及び職員への配慮を感じた。配属初日にオリエンテーションを受け、翌日には1スタッフとして働かなければならないというプレッシャーを感じながらの勤務であった。実際に働いてみて一番印象に残った場面は家族看護であった。重篤な患者であっても直接面会できないこと、また家族自身も感染経路において感染させてしまったと自責の念を感じており、本来であれば看護師が介入すべき場面でも面会制限により介入が十分にできずジレンマを感じた。しかし、ここのセンターでは社会的に孤立していく家族に対してもオンライン面会を積極的に実施し、条件付きで防護具着用下で面会してもらう等スタッフの入れ替わりの激しい現場で試行錯誤しながら対応される姿に感銘を受けた。2週間という短い勤務だったが非常に貴重な経験であった。

大阪コロナ重症センターでは屋外通路の天井まで壁が設置され、報道陣に対する対策もとられており患者及び職員への配慮を感じた。配属初日にオリエンテーションを受け、翌日には1スタッフとして働かなければならないというプレッシャーを感じながらの勤務であった。実際に働いてみて一番印象に残った場面は家族看護であった。重篤な患者であっても直接面会できないこと、また家族自身も感染経路において感染させてしまったと自責の念を感じており、本来であれば看護師が介入すべき場面でも面会制限により介入が十分にできずジレンマを感じた。しかし、ここのセンターでは社会的に孤立していく家族に対してもオンライン面会を積極的に実施し、条件付きで防護具着用下で面会してもらう等スタッフの入れ替わりの激しい現場で試行錯誤しながら対応される姿に感銘を受けた。2週間という短い勤務だったが非常に貴重な経験であった。



田中 友季子 看護師

NTT東日本関東病院

NTT 関東病院から重症センターに2021年6月に2週間派遣されました。

派遣中に感銘を受けた点は、あらゆる業務マニュアルが作成されており、確認すれば即戦力として働けるようになっていたこと。看護では、日中にデブリーフィングを必ず毎日行い、タイムリーに問題点を抽出し、早期解決することで、患者に即したケアができていた。家族看護ではzoomで面会・お看取りを行い、病状説明も週二回医師が電話で必ず行い、家族の不安軽減に努めていた。センター師長は全体の士気が下がらないよう、マイナスな出来事もポジティブな言葉に言い換えて伝えていたことです。

現在は今回、経験したことを生かし、職場へ還元できるよう奮闘中です。

最後になりましたが、調整をいただいた大阪府のスタッフの皆様、大阪急性期・総合医療センターの皆様と一緒に働いた看護師の皆様々に感謝申し上げます。貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。



谷 暢子 看護師

公益社団法人大阪府看護協会

私は、過去、救急医療を専門とし、災害現場の活動経験もありました。ただ、現場で働く事は、数年のブランクがあり、当初は不安でした。しかし働き始めるとそんな事を言うてはいられない状況で、毎日、身体と頭をフル回転させていました。その頃はCOVID-19についての詳細がまだ解らず、常に緊張感を持った状態で心身ともに疲労感が強かったのを覚えています。

私は、過去、救急医療を専門とし、災害現場の活動経験もありました。ただ、現場で働く事は、数年のブランクがあり、当初は不安でした。しかし働き始めるとそんな事を言うてはいられない状況で、毎日、身体と頭をフル回転させていました。その頃はCOVID-19についての詳細がまだ解らず、常に緊張感を持った状態で心身ともに疲労感が強かったのを覚えています。

センターには、全国から沢山の方々に応援に来て頂き、色々な方の考え方やアプローチの仕方など自分になかったものを感じる事ができ、私自身の成長の糧になりました。

半面、考え方などが異なるからこそ、ディスカッションの重要性を強く感じました。また、どんな現場であっても、人を指導、教育しなければならない場面は発生します。常に緊張感を持った現場で働くからこそ、個人に過度の負担をかけない教育システムは、導入すべきであったと強く思っています。

田原 大世 診療放射線技師

地方独立行政法人大阪府立病院機構
りんくう総合医療センター

私は、2か月に1回程度の頻度で重症センターで勤務しました。普段と異なる職場環境で最初は不安もありましたが、マニュアルが丁寧でかつ充実していたこともあり、慣れるまでそれほど時間はかかりませんでした。装置の使用方法から運用面まで、わからないことがあってもすぐに解決できました。

出向期間中に、大阪急性期・総合医療センターがサイバー攻撃を受け、重症センターもしばらくの間、電子カルテなどの共有する医療情報システムが使用できなくなりました。それでも診療を継続させることができたのは、重症センターの迅速な対応と関係者のご尽力の賜物でした。

出身や経験など様々なバックグラウンドの医療従事者が一堂に会し、患者のケアに全力を尽くす姿勢に触れることができ、これは私にとって非常に貴重な経験でした。得た学びを活かし、今後も最善の医療を提供できるように、他職種と連携を図りながら職務に全力を尽くしたいと思います。



田見 蘭子 看護師

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

私は管理者としての役割を担った。自分の看護師経験の中で管理者としての役割を果たしたことはなかった。そのため、管理者としてどのように判断し、指示を出すべきか戸惑うことも多く、自分に役割を全うできるのかといった葛藤もあった。

私は管理者としての役割を担った。自分の看護師経験の中で管理者としての役割を果たしたことはなかった。そのため、管理者としてどのように判断し、指示を出すべきか戸惑うことも多く、自分に役割を全うできるのかといった葛藤もあった。

緊急的に作られた施設の組織の中で、初めのうちは次から次に着任してくる看護スタッフの名前を覚えることで必死になった。着任してきた看護スタッフはそれぞれに異なるバックグラウンドを持ち、高いスキルを持っていた。そのため、看護に当たった当初から「こういう看護を提供したい」と、目指したい方向がそれぞれにもあった。看護師長の目指す方向性から逸れず、個々の目指したい看護を実現するために試行錯誤の日々を過ごした。

医師をはじめ、リハビリテーションスタッフなどともディスカッションを重ね看護の提供を行った。緊急的な組織であっても個々の持つ力を合わせればチームで看護を創造し、目標へ向かっていけることを学んだ。



田村 真美 看護師
公益社団法人大阪府看護協会

私が勤務を開始した時点で、センター内ではそれぞれの看護活動チームがしっかりと確立し活動されていました。それは、

今まで従事してきた病院組織での活動に劣ることのない内容で、それをセンター立ち上げから短期間で作り上げてきた先達の方々にまず感銘を受けました。そのおかげで私もスキングループとして、自分自身にとっても有益な活動として参加することができました。重症センターでは年齢も経歴もさまざまな人が集まり、時には意見が衝突したりする場面もありましたが、その時その時の最善の策を懸命に考える強いチーム力を感じながら共に過ごせたことは、心に強く残っています。従事しようと決意した当初は、未知のウイルスに対して正直躊躇もしましたが、看護師として、ひとりの人間としても唯一無二の経験を与えていただけたと感謝しています。



辻 春郁 看護師
大阪府立中河内救命救急センター

私は新卒から現在の病院でしか勤めたことがなく、院外活動をするのが初めてだったので毎日が緊張の日々で1年目に戻ったような気持ちで毎日頑張っていました。通勤1つでも初日はバス停を探して半泣きで歩き回るといふ事から始まり、通勤や勤務形態には慣れることなく勤務が終わってしまいました。

重症センターで勤務させていただいて良かった点は、急性期治療を終えた患者様のその後を見る事ができ、治療を頑張られている患者様へ転院後のイメージをより具体的に伝えることが出来ました。当センターでは理学療法士がいないのでリハビリは看護師が行っていますが、理学療法士の方が実施しており、専門性を活かした関りが出来ていたのが患者様にとって良い環境であると思いました。

オープンフロアで患者のプライバシーが守られにくい環境ではありましたが、患者管理しやすい環境でした。

オープンフロアで患者のプライバシーが守られにくい環境ではありましたが、患者管理しやすい環境でした。



角田 平太 看護師
熊本大学病院

2021年4月26日当院からは2陣目の派遣でした。世間では3回目の非常事態宣言が発令される中での派遣だったため、

熊本から大阪まで、かなり警戒しながら移動したことを思い出します。

同時期には全国から約50名の看護師が来られており、大規模な即応施設が短期間で応援受入まで機能していることに衝撃を受けました。出向者用のマニュアルや支援体制がすでに確立していたため、スムーズに業務に臨むことが出来ました。ゾーニング間の物品受領やインカムでの情報共有は、その後当院でも導入させていただいておられます。

出向期間中は殆ど外出できなかったため、炊き出しのお弁当が楽しみの一つでした。食堂には、先に出向期間を終えた方々のメッセージや、患者家族からの感謝の手紙もあり、大変勇気づけられ、使命感をもって派遣を終えることができました。大阪コロナ重症センターに携われた、全ての皆様のご健康とご活躍をお祈りいたします。



坪佐 栄子 看護師
独立行政法人国立病院機構
近畿中央呼吸器センター

重症者が一気に増えた第4波、ニュースで見っていた「大阪コロナ重症センター」にまさか自分が派遣されることになると思ってもいませんでした。そんなハードなところで

50才の自分に2か月間も体力、気力が維持できるのだろうか、感染の恐怖や自分が役に立てるのかと不安でした。しかし大阪も大変な状況であり私にできることがあればと思ひ引き受けました。実際に現場に入るとまだまだ看護師が不足しており緊迫感が漂っていました。慣れない電子カルテの操作や防護服、スタッフの多さに圧倒されながらも苦しんでいる患者を見ると弱音を吐いている時間もなく、回復を願って精一杯ケアを続けました。回復する患者もいる一方で急変し亡くなる方も多く、やり切れないこともありましたが、全国から集まった看護師の「患者さんのために」という強い意識を感じながらやりとげることができました。特殊な環境での2か月間、貴重な経験ができたと思います。



露無 景子 医師
関西医科大学総合医療センター

新型コロナウイルス感染症が大阪で猛威を振るい、患者数が増加、府内の全病院が病床確保に難渋していました。病床逼迫が続く中、感染拡大に備え重症患者向けの臨時医療施設「大阪コロナ重症センター」が2020年12月15日に設置されました。

私が施設を初めて訪れたのは自施設から患者を大阪コロナ重症センターに搬送した時でした。呼吸状態が悪く、搬入するまで救急車でモニターから目が離せなかったことを鮮明に覚えています。その後、まもなくして月2回のペースで勤務することになりました。

多くの医師が多施設から応援に来ており、各施設での治療方針や病院での体制について情報共有できたことは良かったと思っています。自施設で治療に難渋していた症例の相談もでき、貴重な意見をいただくことが出来ました。またコロナ禍で他施設の先生方との交流が遠ざかっていましたが、他施設で勤務している医師と交流できたのは良かったと思います。施設の設備に関してですが、冬は暖房をつけても窓からの冷気が冷たくてパーカーを着て仮眠ととっていましたが、途中からかけ布団を2枚用意していただき、大変助かりました。

当時は身体的、精神的にしんどい時期もありましたが、コロナ禍が落ち着きつつある今、医師人生で貴重な経験だったと思います。

約2年間大阪コロナ重症センターで勤務させていただき、ありがとうございました。この場を借りてお礼を申し上げます。

約2年間大阪コロナ重症センターで勤務させていただき、ありがとうございました。この場を借りてお礼を申し上げます。



出口 亮 医師
大阪公立大学医学部附属病院

大阪公立大学から2021年4-6月の間、勤務に参加させて頂きました、出口です。

第四波真っ只中の状況でしたので、人工呼吸器をつけた患者さんが仮設病棟に20-30人並んでいて、情報把握だけでも大変だったのを思い出します。あの時の経験は自分にとっても大変勉強になり、現在の自分の診療にも大きく影響しているように感じます。非常に印象的だったのは、看護師側の結束でした。様々な所から派遣され人間関係も出来上がっていない中、師長はじめ上層部が上手く現場をまとめていました。お陰で働く中で支障を感じることはなく、これは凄いことだと改めて感じています。看護師の中には重症患者ケアの経験も少なかった方もおられ、それでも第一線で闘おうという本人の意思にも、そういった方も含めチームとなった皆様の連携にも敬服します。2年を超えての長い闘いでしたが、お疲れさまでした。



寺田 康一郎 看護師
熊本大学病院

全国から大阪の窮地に援助の手をという目的の下集まった集中治療や救急医療のスペシャリスト達が一堂に会し、自身の今

までのスキルを駆使してCOVID-19という不透明さが残るウイルスとの戦いに向き合った経験は非常に有意義であったと考えます。大阪コロナ重症センターのスタッフの方々も全国から多種多様なスタッフが来る中、臨機応変に対応されている姿を見て感銘を覚えました。マスクとゴーグル、感染防護具を二重に装着し、自身が罹患するリスクもある過酷な環境の中でそれでも、日本の医療を守っていく姿勢が目には焼き付いています。ゾーンの考え方や感染対策全般において、学んだノウハウを当院でもコロナ対応の際に活かすことができおりとても感謝しております。大阪コロナ重症センターの皆様本当にお疲れ様でした。



豊島 龍海 看護師
社会福祉法人恩賜財団済生会支部
大阪府済生会泉尾病院

私は2020年12月から2021年1月のセンター活動開始時から約2ヶ月のあいだ看護師として医療従事させていただいた。

今はワクチンを打つことで症状が軽減されることが知られているが、当時はワクチンもなく、またコロナウイルスは未知のウイルスであり、多くの方達が不安な気持ちを抱えていたことを覚えている。恥ずかしい話であるが、その不安な気持ちは医療従事者も同じであった。そのような状況下で立ち上げられたのが大阪コロナ重症センターであった。

印象に残っているのは、一緒に働いたスタッフの熱い気持ちだろう。スタッフはベテランから、まだ20代と若いスタッフもいた。彼ら彼女らは、このような状況下だからこそ医療従事者として協力したい、未知のウイルスに対し患者さんのために何かしてあげたい、という気持ちを持って集まっていた。医療者として大事なことを学ぶ経験であった。



鳥越 加絵 看護師
公益社団法人大阪府看護協会

新型コロナウイルスが猛烈なスピードで世界的に大流行していく中で、看護師としての使命感を覚え、気が付いたら「大阪

コロナ重症センター」で勤務していました。様々な医療機関で経験を積んでこられたスタッフの方々との関わりや、日々状態が変化する患者様を目のあたりにし、私の中で一本の強い軸ができました。また、予測できない未知のウイルス感染症や、大災害、景気不安に年金問題など何が起るか予測できないこの時代に、周りがどう進むかを頼りに、自分の人生を選択するのは危険以外の何ものでもないと感じ、自分自身の在り方について考え直す良いきっかけとなりました。重症センターでの経験や気づきは、私の今後の人生において、いい影響をもたらす事は間違いないと確信しております。約2年間、大阪府職員の方や看護協会をはじめ、看護に専念できるようたくさんのサポートをくださった皆様、本当にありがとうございました。



中尾 俊一郎 医師
大阪大学医学部附属病院
高度救命救急センター

大阪大学医学部附属病院の中尾俊一郎と申します。大阪コロナ重症センターでは、大阪急性期・総合医療センター、大阪公立大学、大阪大学からの医師で混合チームを組み、主に診療にあたりました。治療が難航する患者も多く、COVID-19の恐ろしさを感じました。患者数には波があり、電子カルテが使えず紙カルテ運用となった時期もありましたが、大きな事故なく診療することができ、よかったです。看護師は全国から集まっており、集中治療の経験にも個人差がある中、日々のブリーフィングとデブリーフィングを通じてシステム改善を行っており、印象的でした。医療従事者同士の風通しは良く、働きやすい職場でした。大阪府の救命センターは大阪大学の特殊救急部出身者により運営されていることが多く、施設間の交流が豊富でいい雰囲気だと感じていましたが、今回の派遣を通じて大阪の救急医療の魅力をさらに感じました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。



中尾 彰太 医師
地方独立行政法人りんくう総合医療センター
大阪府泉州救命救急センター

大阪コロナ重症センター（以下、OC4）閉鎖にあたり、（自施設の救命救急センター管理者でありながら；汗）OC4の当直医として、恐らくダントツで当務数が多かったであろう立場から、一言思い出とともにお礼を述べさせていただきます。

思えば約3年前、大阪府内の一般重症救急・重症COVID-19対応双方の逼迫が懸念される中、その救世主としての役割が期待されてOC4が開設されました。自施設から当直医を派遣するため、医局員に派遣希望調査した結果、大多数が「命令されれば行く」という返答でした。やむなく派遣に前向きだった少数精鋭3名のみ（うち一人が私です；笑）でOC4の自施設担当の当務を回しました。当時は「折角の良い経験なのに…」と少し残念に思いましたが、OC4の当務に円滑に対応するという観点では、結果的には良かったかもしれません。

当務期間中は、サイバーテロなど印象に残ったことが多々ありますが、一番は大阪が医療崩壊寸前まで追い込まれた第4波です。当時は30床ほぼ満床状態かつ患者さん全員が重症であり、明らかに通常業務の過多状態が見て取れました。当直時に日勤業務（ルート交換など）を引き継いで夜半まで続けたこともありました。さらに、OC4当務中に、自施設より「満床+3名の重症COVID-19患者を応需し、別件の重症患者の収容を依頼されて手詰まり」というSOSの連絡が直接私に入ったこともありました。藤見OC4センター長に調整いただき、自施設に入院中の重症患者を（ほぼ満床の）OC4に緊急転送し、病床を確保させていただきました。当時は日々ぎりぎりの状況でしたが、OC4を中心に、オール大阪で重症患者の診療にあたる一体感を感じ、良い経験となりました。

その後も、その時々ニーズにより応需形態を変えながら、開設から約2年間、大阪のCOVID-19診療の「最後の砦」であり続けていただいたOC4には感謝しかありませんし、微力ながらお手伝いできた事を誇りに思います。



中嶋 洋輔 看護師
独立行政法人国立病院機構
大阪南医療センター

私が大阪コロナ重症センターに派遣された時期は、自分や家族を守るためにも人と会う、接触する機会をとにかく減らさなければならぬ第5波の頃でした。家族が次々感染、そして重症化するケースが非常に多く、家族へのサポートも患者同様に大切な時期でありました。そのため、私は大阪コロナ重症センターで働くことに不安がありました。

しかし、実際は急遽参集したにもかかわらず、医師や看護師、MSWなど専門性の高いスタッフ達の集結であり、多職種との連携が出来ており、チームワークが取れていました。一人ひとりの患者様に対して各々の役割を發揮し、患者にも家族にも寄り添った医療が提供出来たことは、仲間の存在が大きく、力を合わせ働けたことに感謝します。私の看護師人生で、大きな刺激となりました。ありがとうございました。



中田 康城 医師
地方独立行政法人堺市立病院機構
堺市立総合医療センター

コロナ禍の1年目の2020年12月に大阪コロナ重症センターOC4の運用が開始されました。看護師は看護協会等を通じて

全国から集められ、医師は常勤と府下救命救急センターからの当直派遣によるとのこと。小職は堺市立総合医療センターの救命救急センター長として事前説明会や施設見学等に参加させていただきました。そして運用開始直後から2023年3月閉鎖時期まで、1～2か月に1回程ですが当直派遣業務を担当させて頂きました。

はじめにこの話を聞いた時には、申し訳ありませんが、これこそ“時代が生んだ徒花！”上手く機能するはずがないと思っていました。実際に当直業務開始後には、多くの施設から集められた医師、看護師が重症コロナ診療に従事できるように検討された治療プロトコルが作られ、ある程度以上の水準といえる重症治療ができるように工夫されておりました。

この施設の頑張りにより、間違いなく府下救命救急センターの負担を軽減したと思います。その結果、非コロナの重症救急患者の受け入れができるようになりました。また、感染症診療に慣れない一般病院にとって大きな後ろ盾となったはずです。

私自身がどれだけOC4業務に寄与できたかわかりませんが、救命救急センターの全く先の見えない状況下に本邦で類を見ないこのような医療施設を立ち上げ、運用を続けた大阪府の英断に本当に感謝いたします。

小職個人としてですが、コロナ禍で人流が途絶え外出もままならない状況で、精神的にも閉塞感が漂っていましたが、OC4当直派遣時に他の救急施設の医師と対面で話をすること、情報交換ができたことは、精神的な生き抜きとなり助かりました。

最後にアメニティへの希望ですが、次回同様の施設を作るなら、シャワー用にタオル・バスタオルと石鹸・シャンプーなどを常備してもらえると非常に助かると思います。



中谷 沙也佳 医師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

2021年3月から9月までの7ヶ月間勤務していました。医師3年目で足を引っ張るばかりでしたが、自分なりに必死に

目の前の患者さんと向き合い続けた怒涛の日々でした。急遽飛び込んだ救急の世界は想像以上に厳しく、自分の不甲斐なさや責任の重さにメンタルがボロボロになっていた時期もありました。なんとか、OC4の皆様に支えていただきながら勤務を続けることができました。辛いことも多かったですが、医師かけ出しの私にとっては、初めて自分主体で命に向き合う機会が多く、得られたものも大きかったです。現在は産婦人科医として、自分のやりたかったことと向き合うことができ、忙しくも充実した日々を送っています。産婦人科でもなぜか重症患者さんを担当する機会が多く、OC4での感覚がとても役に立っています。OC4での全ての出会いに感謝しています。皆様本当にありがとうございました。



中谷 縁 看護師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

COVID-19に戦うべく全国から集まってくださった多くの方々と一緒に働くことができたのは、自分の看護師人生の中で

大きな宝物のような経験になりました。ゼロから医療体制を短期間に作り上げるためには、医療職だけでなく様々な職種の方との連携が必要でしたが、関わる全ての人たちが「大阪コロナ重症センターを成功させる！」というミッションを共有していたことが大きな強みになりました。これはひとえに大阪府や大阪府看護協会などの方針が私たちに確実に伝達された証であると思います。

次々と人が入れ替わっていく流動性の高い組織でしたが、自分の役割に対する意識が高いスタッフが多かったことにも助けられ、お互いのコミュニケーションを大切にしながらチームビルディングを推進していくことができました。看護管理者としては力不足なところも多くなりましたが、皆さんのお力をお借りして沢山の挑戦を形にすることができたことに感謝しております。



中西 恵美 看護師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

私は、皮膚・排泄ケア特定認定看護師として大阪コロナ重症センターで皮膚・排泄ケア領域のケアに参加しておりました。

当救命センターでは、重症コロナ患者様を受け入れておりましたが、患者状態は予測できないことが徐々に発生し、これまでにない長時間腹臥位療法が行われておりました。救命センター医師、看護師が思考錯誤し褥瘡発生は、全国的にも発生率最小限に抑えこみました。大阪コロナ重症センターでも、重症肺炎の患者が増え、長時間の腹臥位療法が行われることを予測できたので、これらの経験から、高機能エアーマット、静止型体圧分散寝具、ポジショニングクッションを導入していただくように依頼しました。十分な数を確保していただいたことで、褥瘡発生率は低く、重症褥瘡発生はありませんでした。ほかに、患者様の排泄物は医療従事者暴露も予測されます。そのため、排泄物ケア物品の導入を依頼し十分な材料を導入してくれたと感謝しております。当初は医療従事者の物品は枯渇し、N-95マスクは硬く悲惨なものでした。そのため、装着時、鼻頭の痛みに対する相談が多く寄せられました。感染認定看護師と協議、マスクテストを実施しマスクの痛みを予防する創傷被覆材も導入していただくことができました。

褥瘡発生予防、スキンケア用品を十分に揃えてもらったことは、患者様、医療従事者ともに助かったことを報告とさせていただきます。



中西 千賀子 看護師
八尾市立病院

私が重症センターで勤務したのは、第5波がピークを過ぎ落ち着いた頃でした。不安を持ちながら初日を迎えました

が、まず師長さんが面談をして下さり、普段と違う環境やスタッフと働くことで、自分の持つ100%の看護が出来なくても落ち込まないように言葉を下さいました。その一言で、自分出来る看護を精一杯やろうと気持ちを切り替えることが出来ました。当時、係長であった私にとって、多くの人材をまとめ運営していく管理者の姿を見て看護管理を学ぶ機会にもなり有意義な時間を過ごせたと思います。1か月という短い期間でしたが、様々な施設から集まったスタッフの方と知り合え、自問自答しながらも協力し合いながら頑張る事ができ、自身にとって良い経験になったと感じています。そして私を重症センターに送り出してくれた自施設の方々にも感謝しています。



中野 斉 医師
関西医科大学総合医療センター

私は大阪コロナ重症センター（以下OC4）開設時より、週1回の当直に行かせていただきました。開設当初の冬には10人

程度でありましたが、春を迎え第4波が到来し、あれよあれよという間に満床になったのを記憶しています。スタッフの先生方は30人を超える患者情報の収集や治療方針を決定し、時には1日3件の気管切開や緊急手術が必要な日もあったと伺っております。

私がOC4診療に携わらせていただいた中で感じたことは、患者さんの満足度です。私が当直で携わった患者でクレームを訴える方はおらず、治療にとても感謝されていました。患者家族への病状説明であったり、看護師さんは、(体力的に大変かとも思われましたが)夜間でも赤ゾーンに豊富な人手があり、日々の手厚い診療・看護による賜物と感じました。人の入れ替わりが激しい中で、指揮をとって下さったOC4スタッフの皆様、ありがとうございました、そして本当にお疲れ様でした!!



中野 美幸 看護師
和歌山県立医科大学附属病院

私は、2020年12月16日から1カ月勤務しました。私が勤務した時期は、稼働し始めた頃で、府内の医療従事者の方々

をはじめ、全国各地から看護師が集まっていた。様々な方言が飛び交う医療スタッフ間でカンファレンスを行い、重症患者の離床や面会制限の中で家族と患者の連絡調整などを創意・工夫しながら取り組みました。コロナ禍での特殊な環境の中でも、今まで各々の現場で実践してきたケアを提供しようと努めたことで、改めて「看護の本質」について振り返る機会となりました。

初めは、休憩室で壁に向かって黙食をしていると、慣れない環境にくじけそうになることがありました。あの時、天井まで届く大きな木の絵と在籍中のスタッフや派遣を終えたスタッフの顔写真とメッセージの掲示を見て、「みんなで患者のために頑張ろう」と背中を押されるパワーをもらいました。今でも、その時の写真を見て頑張るパワーをもらっています。

中林 崇 診療放射線技師

私は診療放射線技師として、センター開設直近より非常勤として月に2・3回程度、日勤と当直で勤務をさせていただきました。当初、未知の感染症に対し業務すること自体に不安があった事を覚えています。業務に従事して良かったと思う点は、大阪急性期・総合医療センターの技師長をはじめスタッフの方々との連携がしっかりなされていた事です。装置の操作方法が分からない時や、不具合等があっても直ぐに対応していただき、何の不安もなく業務する事が出来ました。お忙しい中、ありがとうございました。残念な点は、宿泊施設がプレハブの為、真冬の夜は大変寒かった事ぐらいでしょうか。布団が薄くエアコンを全開にしてもまだ寒かったので、服をパンパンに着こんで寝ていたのも今ではいい思い出です。また他部署の方々にも親切に色々な事を教えていただき、お世話になりました。大変いい経験と勉強になりました。ありがとうございました。



中前 光弘 診療放射線技師
地方独立行政法人
りんくう総合医療センター

吉村知事が「大阪コロナ重症センター」開設を宣言し、大阪府内医療機関等と連携して医療従事者を派遣する体制を構築しましたが、感染症への対応に不安を抱く診療放射線技師の確保が困難であることが耳に入ってきました。

当院は特定感染症指定医療機関であり、早い段階からコロナ感染症患者の受入れを行っていたため、大阪府民のために何かお役に立てないか職員と協議し、松岡病院長、家宮事務局長（当時）に週休日を利用して派遣できる体制を整えていただきました。令和2年12月15日から令和5年3月23日までの約2年3ヶ月にわたり延べ900回以上の派遣に就きました。

私自身、勤務していませんが、急性期・総合医療センター 榎山技師長と連携して、従事職員が手薄な日に職員を派遣できるような勤務の調整や管理を行いました。大阪府民の皆さんのためにと当院での勤務が過酷な時期であっても派遣業務に取り組んでくれた職員に心から感謝して、稿を終わりとします。



中村 年宏 臨床工学技士
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

大阪コロナ重症センターでは主に血液浄化療法を担当させていただきました。

開設当初は各施設から多数のスタッフが参集されるので、どうなるものかと案じておりましたが、運用が始まればさすがプロの集団、各施設での良いところを集め、問題があれば皆さんで熱の入ったカンファレンスをされ、OneTeamで課題を解決されていた様子が目に焼き付いています。

血液浄化療法に関しては、急総センターと同様の運用にさせていただきましたが、技士が兼務のため、トラブル時の初期対応が出来なかったことが悔やまれます。また現場では、前施設でのご経験など貴重なお話をさせていただく機会もあり、大変参考になりました。

滞り無く運用を終える事ができましたのも、スタッフの皆様にご協力いただいたお陰です。誠にありがとうございました。

最後に、不慣れな環境下で何時も快くご支援をいただきました大阪府の担当者の方々に感謝申し上げます。

中村 智子 看護師
公益社団法人大阪府看護協会

初期当初は、病院派遣や短期派遣者などがいらっしゃり患者の情報収集も重要ですが、病院派遣者や、短期派遣者とのコミュニケーションも短い時間で取るという難しさがありました。その部分では経験年数が高い方が多くコミュニケーション能力が高かったため、機器やシステム作り等あったも統一看護を短期間で提供することができました。程度の状況が構築した後半は、記録などの修正や教育、安全対策など委員会を立ち上げ委員皆が良き方向へ持っていこうと努力していました。様々な障害があったも最後まで乗り切ることが出来たのだと思っています。ここまで出来たのも、病院、センタースタッフ及び協会の皆様が頑張ってくださったこそだと感じています。色々な面で苦労もありましたが医療者としてそこに従事できたことは素晴らしい経験だと思っています。またここでの人との出会いは、経験できないような出会いでした。これを今後の糧にしていきたいと思っています。



中本 文恵 看護師
三重大学医学部附属病院

未知の感染症による重症呼吸器疾患の人工呼吸器装着患者の看護に対して、自施設であっても課題は多くあった。重症センターは様々な病院の多様な経験のある看護師の集合でどのような組織形成で行われるのか、医師の指示受けや記録などの自施設と違う方式を習得しながら、協力して重症患者の管理、ケアができるのか、さらに短期間の派遣の継続体制は、センターにとって負担ではないのかなど派遣に際しての不安があった。しかし、看護管理者を統括として、派遣者への教育担当者、看護リーダー、エリアリーダーと、不安であった問題に適切な人材配置とチーム形成によって、丁寧に対応されていた。患者に対しても患者ケアの質向上、業務改善のチームが形成され、多様な経験の看護師と短期間の派遣看護師の長所を最大限に活用した仕組みとなっていた。重症センターの看護は、コロナ下においても組織的に患者に最善のケアを考え、提供されていたと感じた。

那須 大志 診療放射線技師

未知の感染症に対し予断を許さない中で感染に関する専門的知識が十分なわけでもなく、一人の大阪府民、また医療従事者として少しでもお手伝いしたい気持ちと、最前線で自分が感染すれば職場に感染を広げてしまう。そんなリスクと緊張感の中での勤務でした。他スタッフとの連携に戸惑いつつ、迷惑のないようにと奮闘の日々でした。お互いに手順の少しのズレはなんとか調和させ、業務を遂行させる難しさも痛感しました。大阪コロナ重症センター閉鎖の日が来て、安堵の思いと共に、少し寂しい気もします。自分の職場へ知識や感染対策を還元できたこと、新たな人脈の構築など、色々な観点からも今回の経験を糧に一人の医療従事者として成長していきたいと思っています。関係者の皆様、貴重な経験の機会を頂戴し、本当にありがとうございました。大阪コロナ重症センターの一員として勤務できたこと、大変光栄に思っています。



西 美和 看護師
公益社団法人大阪府看護協会

新型コロナウイルス感染症のパンデミック宣言から3年、この間にバングラデシュで新型コロナウイルス専用のセンターを開設・運営し、日本に帰国後は重症センターで新型コロナに関わる様々なことを学び、経験しました。重症センター開設当初は人手不足で、全国から集まった仲間と日々協力しながら、安全に医療を提供できる体制作りを行いました。毎日のデブリーフィングでは問題提起や改善点について話し合い、そうやって積み重ねたことが医療の質の改善に繋がったと思います。

重症センターに従事した2年半の間、最も大変に感じたのは、派遣看護師の終了と重症患者の急激な増加が重なった第4波です。多忙な勤務状況で、勤務に入るたび救えない命を看取り、心身ともに疲労困憊する時もありました。けれども、同じ目的をもって集まった仲間の存在は大きく、元気になって退院していく患者さんの姿「困ったときほどおいしいものを」プロジェクトで応援してくれた皆さん、そして全国から寄せられる医療従事者への応援メッセージが、頑張り続ける力を与えてくれました。大阪府や看護協会をはじめ、たくさんの関係者の方々のサポートのもと、センター開設から閉鎖までの全期間をここで全うできたことに心から感謝します。



西 由美子 看護師

独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター

私はコロナウイルス感染症従事者人材育成研修に参加しセンター立ち上げの際に従事しました。マニュアル作成、物品の

整理等から始まり、他病院との方法や考え方の違いを知り、たくさんの学びを得ることができました。廃用症候群予防や呼吸リハビリテーションを早期に取り組むことが、その後の回復に大きく影響すること、病院間での継続看護の重要性を学び、急性期患者受け入れを行っている自病院で活かすことができました。多数のスタッフとの情報交換や日々変更するマニュアルの周知、未知のウイルスへの安全な継続看護の大変さを実感しました。短期間で大勢のスタッフが入れ替わり、顔と名前が一致して仲良くなった頃に居なくなってしまうので寂しくなることもありましたが、現在でも連絡を取り合う方も居て、とても良い経験と出会いとなりました。統率頂いた大阪急性期・総合医療センタースタッフの方々ははじめ、一緒に勤務させて頂いたスタッフの方に感謝いたします。



西岡 千佳 看護師

JR 東京総合病院

2021年5月13日から2週間、大阪コロナ重症センターで活動しました。

センターではマニュアルが充実しており、一目で物品の場所や使用方法が明記され、とても働きやすい環境でした。また、ZOOMを使用した家族との面会や暴露防止のための看護ケア、ゾーニングの考え方を学ぶことが出来ました。大阪での2週間はとても貴重な経験となり、その後自施設での感染対策や看護ケアを自信をもって行うことが出来ました。慣れない大阪の地での活動でしたが、ホテルからセンターの送迎バスがあり、快適に過ごすことが出来ました。ありがとうございました。



野間 貴之 医師

社会医療法人警和会大阪警察病院

この度、大阪府下の救命センターの一職員として大阪コロナ重症センターに約2年間、主に夜勤として勤務させて頂きました。

コロナウイルス感染症による重症呼吸不全で集中治療を要する患者様、また、併存疾患を抱える患者様のコロナウイルス感染症を診療する日々でした。大阪コロナ重症センターが開設された当時はコロナウイルス感染症という未知の感染症に対して確立した治療はありませんでしたが、ワクチンや抗ウイルス薬といった治療が開発され、この2年間は医学が進歩する様子を実感できた時間でもあった様に思います。大阪府は東京都と並ぶ程の感染者数となる事もありましたが、大阪コロナ重症センターでの診療に最後まで従事できた事を嬉しく思います。最後になりましたが、お世話になった大阪コロナ重症センターの職員の皆様、その運営に関わる皆様、本当に有難う御座いました。



橋本 涼 看護師

地方独立行政法人徳島県鳴門病院

人類の歴史を振り返ると、ペストやコレラ、スペインかぜなど種々の感染症がパンデミックを起こし、社会を大きく変えてきたにも関わらず、自分が生きている間にこのような災害級のパンデミックに見舞われるとは想像もしていませんでした。

派遣されたのはごく短期間でしたが、試行錯誤しながら逃げずに奮闘したことで掴めたものが多くあります。

今年3月、感染管理認定看護師教育課程を修了しました。思い起こせば、感染管理への道は重症センターへの派遣から始まったように思います。コロナ禍の数年間、多くの苦難がありましたが、患者さんが回復しレッドゾーンから元気に退院される瞬間に立ち会えた経験は、あらゆる困難を乗り越える糧となっています。

私達は、今回の経験を未来に繋いでいく責務があると感じています。感染症を正しく恐れることを忘れずにいれば、この先どんなパンデミックに見舞われてもきっと乗り越えていけると信じています。



畠山 淳司 医師

大阪医科薬科大学病院

1回/2ヶ月の勤務でしたが、他施設でのCOVID-19患者の治療に携われて、貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。

100年に1回のパンデミック、もう経験はしたくはありませんが、医師として大阪コロナ重症センターで勤務した経験を日々の臨床に還元できればと思います。

大阪コロナ重症センターに携わっていただいた全ての医療従事者・事務職の方々に深い感謝の意を表したいと思います。

大阪コロナ重症センターに携わっていただいた全ての医療従事者・事務職の方々に深い感謝の意を表したいと思います。



畑野 剛 看護師

日本赤十字社大津赤十字病院

2020年12月、新型コロナウイルスが全国拡大し緊急事態宣言が発令され、日本はどうなるのかという不安を抱えている

中での派遣でした。全国から集結した年齢も役職も異なる経験豊富なスタッフと共に活動ができたことは人生の中でも大変貴重な経験ができました。新型コロナウイルスにどのようにして立ち向かうのか不安にかられていましたが、感染対策指導をはじめ、様々な配慮と支援を頂き働きやすい環境を整えて頂きました。重症センターでの経験や知識は今も考える基礎となっています。経験を通して不安や恐怖に押し潰されそうになっているスタッフへの不安軽減ができるような支援がしたいと思いました。この経験から新型コロナウイルス対応スタッフへの月1回の軽症、重症治療・看護ケア勉強会の開催やPPE着脱指導を継続的に行い、不安解消に繋げています。



八田 綾子 看護師

独立行政法人地域医療機能推進機構
星ヶ丘医療センター

日本全国からコロナ患者さんの看護のために集まった仲間と熱く語り合ったことをつい最近のように思い出します。患者さんの

ポジショニングや呼吸器設定など、どうすれば患者さんの状態が改善するのかと日々話し合い、常に患者さんの最善を追求していた濃厚な時間は今でも私にとってとても大切な時間でした。ICU看護から少し時間が経過しており、私自身、重症センターでの勤務に少し不安を感じていましたが温かく迎えて下さった皆様のおかげで無事に勤務することができました。定期的に入れ替わる病院派遣のスタッフの私たちの準備をしていただいた急性期・総合医療センターの皆様や、立ち上げからいらっしゃるスタッフの皆様を重ねて感謝申し上げます。また、大阪府の患者さんのために全国から集まった皆様にも感謝の気持ちでいっぱいです。またいつか、ますますパワーアップされた皆様のお目にかかれたいことを楽しみにしております。



八鳥 公男 看護師

新潟大学医歯学総合病院

「30床あるメガICU。スタッフは、全国からクリティカルケアの猛者が集まってくる場所がある」2021年4月に2週間ほどしか居りませんでしたが、私の看護師としての価値観を大きく揺さぶる経験でした。

日替わりの即席チームで、質の高いケアを実践する。うまくいく事ばかりではなかったかもしれませんが、これからの看護界はこういった看護師を育成しなければならないと実感しました。

そして、このセンターを立ち上げ、集団をまとめていた大阪府看護協会の皆様。皆様の生活も儘ならない状況で、常に誠実な対応をしていただいたことに感銘を受けました。非常に短い期間でしたが、一緒に働くことができ栄光でした。

臨時的医療施設としてのセンターが終了することは、喜ばしいことです。この先、同様の事態が起きない事を祈るばかりですが、私が経験した「看護チームの可能性」を多くの看護師に体験してほしいと思う「矛盾」を感じつつ筆を取ります。



原村 可奈子 看護師
宮崎大学医学部附属病院

私は2021年5月に約1か月間勤務させていただきました。派遣が決まった時は、不安しかなく大阪に向かったのを覚えています。

大阪コロナ重症センターは重症な患者さんばかりで、最初はその空気感に圧倒されました。ある程度、重症者の看護には対応できると考えていましたが、カルテシステムの違いや、慣れないME機器の使用に最後まで勤務を全うできるのか、緊張の連続でした。しかし、全国からたくさんの看護師が派遣されており、勤務の中で同じ思いを共有することで、励ましあって最後まで勤務を遂行することができました。滞在中は、食事の提供や送迎などをしていただき、とても快適に過ごすことができました。また、勤務中は大阪コロナ重症センターのスタッフにたくさんの感謝の言葉をかけていただきました。大阪コロナ重症センターでの経験は私の看護師人生の大きな財産になりました。本当にありがとうございました。



東島 陽子 看護師
社会医療法人啓仁会堺咲花病院

私は重症センターが稼働して1ヶ月後の2021年1月から2ヶ月間従事しました。まだウィルスの正体も分からない状況で、最新の治療や充実した設備の中働く経験が

でき、本当に良かったです。たくさんの看護師の方と出会い繋がりができ、充実した毎日を過ごすことができました。その中で、自分なりにできる看護を考え提供したつもりでしたが、日本全国から経験豊富な看護師が集合した貴重な機会であったことを改めて振り返ると、リーダーを中心に各グループで短時間でのミニカンファレンスを行うなどディスカッションをし、看護に反映させることができれば良かったと思いました。2ヶ月の従事期間が終了し、自施設に戻ると本格的に中等症のコロナ患者を受け入れるようになっていました。体制を構築しながら勤務することとなり、今回の経験が自分の強みとなって病棟に還元することができました。



久宗 遼 医師
大阪医科薬科大学病院

私が「大阪コロナ重症センター」に従事した時期は、2023年1月以降の約2ヶ月になります。この頃はワクチンの

普及やコロナの治療もガイドラインで示されるようになっていました。また、周期的に感染の波はありましたが、全国的に重症患者数は減少傾向であり、「大阪コロナ重症センター」の入院数も全体の半分程度でした。初勤務時には、深夜緊急入院がありましたが、スタッフの協力もあり患者引き継ぎから診療開始まで流れるように進みました。これは設立から2年経過していたことから来る経験値であると強く感じました。発足当初は手探りの診療であったと思いますが、従事した時期は安定し診療内容が確立していました。今回、従事した経験は今後同様の危機が生じた際の対応として、とても有益な財産となりました。今回、多くの重症患者診療の場となった「大阪コロナ重症センター」の設立、運営に携わられた関係者の方には改めて感謝を申し上げます。



日村 帆志 医師
大阪公立大学医学部附属病院

私の活動期間は2021年10月～2021年12月の3か月間でした。コロナ感染が落ち着いている

ときであったため11月、12月はセンター内にほとんど患者がいませんでした。10月はこれまでと同様に重症COVID-19感染患者を他院から受け入れ、呼吸管理を含めた集学的治療を行っていました。感染隔離期間が終われば、再度転院や退院を調整していました。12月は入院患者が0人であったため、看護師と共同で受け入れのシミュレーションや災害時のシミュレーションを行っていました。また、これまでの症例の振り返りを行い、改善点を共有しました。

診療した患者の内容とおおまかな人数としましては、人工呼吸管理、気管切開術、胸腔ドレーン挿入、感染治療を行いました。合計で20人ほどの診療に携わったと思います。勤務した期間においてコロナ重症センターが果たした役割としては、他病院の負担の軽減に寄与したと思います。

人の入れ替わりが多い中でよく統率がとれていたように感じました。初期の立ち上げからセンターの維持に従事したスタッフは大阪府の方々の尽力によるものだと思います。本当にお疲れさまでした。



平田 昌吾 看護師
社会医療法人きつこう会
多根総合病院

多根総合病院の平田昌吾です。まず初めに、このような機会を頂きありがとうございます。大阪府の依頼にて、センター

発足当初の1.5ヶ月間と、第六波時の1.5ヶ月間を出勤という形で勤務しました。

初めの勤務では、当院との電子カルテの違いでまず戸惑いがあり、アタフタしたことを覚えています。

幸い、そのことはちょうど満床の30床が埋まるタイミングで、激務だったこともあり電子カルテも2～3日程度で会得できました(笑)。

センター勤務で良かった点として、様々な経験を持つ方々と一緒に働くことができた点です。

自施設での勤務が長くなると、良くも悪くも自然と、頭の柔軟性が弱くなってしまいます。様々な意見を聞くことで、良い刺激となり、自分の中でプラスの思考が生まれました。

今後もこのような機会があれば積極的に参加したいと思っています。



平原 杏奈 看護師
公益社団法人大阪府看護協会

私は2021年5月に新型コロナウイルス感染症の第4波が押し寄せる中で働き始めました。病院派遣の方が多く勤務されて

いる状況で、病院勤務のブランクがあった私は不安を感じていましたが、充実したマニュアルと先輩スタッフのサポートにより、不安を克服することができました。初めてのPPEや慣れない環境に戸惑うこともありましたが、宿泊施設の提供によって通勤ストレスを軽減し無理なく働くことができました。最初は3ヶ月勤務することを目標にしていたのですが、働きやすい環境整備がなされたこともあり、気づけば1年10ヶ月が経過していました。この期間を通じて、他では得られない貴重な経験を積むことができました。新型コロナウイルスという未知の病気に対して、他の経験豊富なスタッフと協力しながら働くことは、自身のスキルや専門知識の向上に加えて、困難な状況での対応力やチームワークといった人間力の向上に繋がるものだったと感じています。



福島 大 医師
地方独立行政法人りんくう総合医療センター
大阪府泉州救命救急センター

大阪コロナ重症センターでの勤務終了につき、スタッフの声として感想を述べさせていただきます。自施設の医局

でのOC4への派遣は完全に個人の意志に任されおり、結果として発足から終了まで私含めた3人のみの派遣となりました。当初は他施設での勤務に対する不安もありましたが、経験として得られるものが多いだろうと思い参加させていただきました。もちろん大阪府のCOVID-19診療の中核を担うセンターでの勤務への使命感も感じておりました。

実際の勤務ではゾーニングの方法やインカムを使ったコミュニケーションツールの活用などシステム面での学びもありました。サイバーテロを受けた際の紙カルテ運用では電子カルテのみで育ってきた世代としては慣れぬことも多々あり四苦八苦しましたが改めて電子カルテのありがたみを感じると共に、紙カルテでの集中治療運用に触れることができ良い経験ができました。

以上、簡単ではございましたが感想を述べさせていただきます。他施設からの応援医師や看護師、放射線技師と共に協力し、大阪府のCOVID-19の診療の中核を担えたことを誇りに思いつつ、共に働きました皆様に感謝の意を表し結語とさせていただきます。



福寿 祥子 看護師
公益社団法人大阪府看護協会
政策・企画・看護開発部

大阪コロナ重症センター設立が決してから、看護師確保の一旦を当協会で行う事になり、2020年12月より終了前

2022年12月まで、大阪府および急性期・総合医療センターと連携しながら看護師確保に奔走した日々でした。看護師確保は最優先課題でしたが、同時に、いかに安全に安心して働きやすい環境を整えるかも重要でした。看護師はこれまでの経験などの違いから、時にはぶつかり合ったり、時には現状にジレンマを感じ模索を繰り返すなど、悩みながらの毎日でしたが、コロナ重症患者の看護に対する使命感と責任感で、看護師の本領を発揮しながら乗り越えていたように思います。「切磋琢磨し鼓舞しあった仲間が存在で危機を乗り越えられた」「この経験は今後の人生にも活かしたい」等、前向きな感想が多くありました。今回の事業に職能団体として参画し、ともに闘い支援できた事は、私自身にとっても忘れられない貴重な経験となりました。



福田 将啓 医師
大阪府済生会千里病院
千里救命救急センター

私は2021年1月～2023年2月に月1回程度、OC4に勤務させていただきました。勤務をして一番良かったのはマン

パワーが充実していたことです。夜間でも看護師の数が多く、状態変化時の際にも常に迅速にできていたと思います。医師の数は決して多いとは言えませんが、大阪急性期・総合医療センターの敷地内にある利を生かし、高度救命救急センターとは勿論、精神科や腎臓内科などの専門科とも連携がとれており、患者にとって不足ない医療が提供されていました。また、応援医師を各救命救急センターから派遣したことで、COVID-19そのものが重症な患者から肺炎や心不全など併存疾患が重症な患者まで、様々な患者層に対応することができていました。一方、自院と合わせると長時間勤務になることが多く、負担になっていました。仮眠室やシャワー設備がもう少し快適であれば良かったなと思います。

2年間お世話になりました。皆様お疲れ様でした。



福田 真耶 看護師
大阪府立中河内救命救急センター

一カ月と短い派遣期間にも関わらず、師長を始め全スタッフが心安い環境で規律が明確にされて、直ぐに従事する事が出来

て働きやすい環境でした。患者様をケアするに当たり、当センターはリハビリ等の他職種がない事により看護師が介入を行っていましたが、重症センターはリハビリスタッフ等他職種が介入され療養する患者様にとって良い環境であったと思いました。しかし、プライベートの環境としてはオープンフロアにより患者管理としてはいいと思いましたが、プライバシーの保護としては少し気になる場所でした。私は、ホテルを利用していましたがホテル前にバスが発着し通勤の疲労がなく、ホテルも一通りの家具が揃っており快適に過ごせました。贅沢を言うならば、疲れて帰ってきた際の部屋には直立の硬い椅子ではなく、ゆっくり過ごせる椅子があれば良かったと思いました。ありがとうございました。



福廣 吉晃 医師
大阪公立大学医学部附属病院

【良かった点】多くのCOVID-19感染症の診療に参加し様々な病態を経験できたこと。株の変化により病態も変

わって来たので色々勉強になりました。また、様々な施設からスタッフも参加していたので、刺激を受けると共に運営に関しても学ばせて頂きました。

【改善点】各波の中でフォローアップセンターや保健所が明らかに機能不全に陥ったと思われる時期があり、やり取りの中で対応に苦慮した事がありました。専従MSWの欠員によりなかなか転院交渉や患者情報収集が進まない事態に陥りました。

【勤務】医師としては異例の1年間の連続勤務でしたが、病气入院中の社会保障が曖昧であったのが悔やまれます。市内宿泊施設提供、送迎バス、お弁当サービス等、感謝しております。



福間 博 医師
地方独立行政法人りんくう総合医療センター
大阪府泉州救命救急センター

2023年3月24日をもって、大阪コロナ重症センター（以下、OC4）の歴史に幕が閉じられるとのことで、この場をお借りし

て御礼申し上げます。

まずは藤見センター長、木口副センター長、川田先生をはじめ、多くの先生方に支えていただきました。私ごとですが、自施設以外の集中治療室で勤務した経験がなく、お世話になりはじめた当初は、こう見えて緊張していた記憶があります。医局に属していない私が大阪大学、大阪公立大学のベテラン、若手の先生方と交流を持てたことは一生の財産です。また、古根川看護師長、中谷看護師長、越智副師長、田中副師長、田見主任、宮崎主任をはじめ、特に大阪府看護協会所属の看護師の皆さんにはおんぶに抱っこ状態でした。全国津々浦々の施設から、入れ替わり立ち替わり多くの看護師さんが配属される中、とても寄せ集めとは思えない、昔から存在していたかのような集中治療室を運営できていたのは、皆さんのお力なくしては語れないことでしょう。グループ活動やデブリーフィングなどにも積極的に取り組まれており、デブリーフィング中に意見を求められたことは良い思い出です。

大阪府泉州救命救急センターからも、多くの患者さんを引き受けていただきました。OC4の大きな役割は、long-term ICUとしての機能だったと思います。普段、各施設であれば療養型病院などへ転院させる段階でも諦めることなく診療にあたり、人工呼吸器から離脱できた患者様も数多くいらっしゃいました。このような素晴らしいプロジェクトに携わることができ、感謝しかありません。本当にありがとうございました。医師の皆様とは今後も様々な場面でお会いするかと思います。看護師の皆様とは今後なかなかお会いできないかと思いますが、本来であれば皆様にお礼とお別れと言いたかったのですが、勤務の都合上、誌面での挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

皆さんと一緒に働けたことを誇りに思っております。



福森 優司 医療ソーシャルワーカー
大阪大学医学部附属病院

最初に、我々医療ソーシャルワーカーが大阪コロナ重症センターで勤務するにあたり大阪府

庁の方・センター長・副センター長をはじめ、医師・看護師・メディカルスタッフの皆様に温かく受け入れて頂いたことに心より感謝申し上げます。

そのなかで実感したことがあります。それは“責任”の捉え方です。責任といえば「責任の所在」「自己責任」など少しネガティブに用いられることがあります。命と向き合う非常に厳しい現場では特にその傾向があるように思います。ただ、大阪コロナ重症センターのスタッフが『患者と家族の生命とQOLを支える』ということに対して最後まであきらめずチャレンジしている姿勢を傍で見て、責任は“負う”という捉え方だけでなく、責任を“全うする”とポジティブに捉えることの重要性を教えてくださいました。今回は貴重な機会と経験を与えて頂き有難うございました。皆さんと業務を全うできたこと誇りに思っています。



藤井 照代 看護師
公益社団法人大阪府看護協会
教育研修部

重症患者を収容する臨時施設「大阪コロナ重症センター」開設にあたり、従事できる看護職員確保のため、大阪府から

の受託事業として「新型コロナウイルス感染症（重症患者）の看護従事者育成研修」を急遽企画運営することになった。研修修了者がこの臨時施設で従事するためには、まずは医療機関の看護管理者にこの事業の意義を理解してもらうことが重要と捉え、2020年6月に「COVID-19対応者育成に係る看護管理者研修」を3回開催した。総数235名の看護管理者が受講したが、この時期の看護管理者は錯綜する情報と急激な感染拡大により臨床現場のマネジメントに苦慮されていた。外出自粛要請中ではあったが対面研修とし、情報交換の場を提供したところ、個人防護具の不足や病棟運営について、喧々諤々の意見が飛び交い、看護管理者の苦悩が溢れ出す研修となった。「大阪コロナ重症センター」に係る研修を振り返ると、この研修を印象深く思い出す。


藤原 美幸 看護師

 独立行政法人国立病院機構
近畿中央呼吸器センター

私は第6波の頃に重症センターに1か月従事しました。他の病院に派遣に行くのが初めてで一般病棟での勤務経験しな

かったため、先に派遣にいったスタッフから事前に話を聞きました。電子カルテの違いや体制・環境の違いなど勤務前は不安も大きかったです。しかし実際に勤務すると研修計画を組んでいただき、事前にオリエンテーション、経験に応じて勤務内容も考慮があり、安心して勤務することができました。コロナ病棟で勤務経験はあったものの他施設での対応や勤務体制の違いなど勉強になることも多く、またいろんな施設、経験のあるスタッフが働いており話をする機会ができ自施設に戻った際に生かしたいと思うことも多くありました。また自宅からの通勤にも不安があったのですが、ホテルの手配と通勤バスの確保をさせていただき勤務に集中することができました。今回、貴重な経験をさせていただきありがとうございました。


佛性 千賀子 看護師

日本赤十字社大津赤十字病院

2020年12月大阪コロナ重症センターの初期メンバーとして勤務したことは人生において貴重な経験となりました。

現場では全国から派遣された約100人余りの医療従事者がワンチームとなり「できない」ではなく「できるようにするにはどうしたらいいか」と即座に意見を出し合い、最高の医療、看護を提供する現場を0から1へと作り上げていく環境でした。

「感染しない」「医療者にとっても、患者にとっても安全であること」を基本に考えていく思考と行動が何より大切でした。

人工呼吸管理や重症管理など基本的な知識やスキルより、協調性と柔軟性とコミュニケーション能力すなわちコンピテンシーが一番求められる現場だったと思います。今回、大阪急性期・総合医療センターの管理者の方々が率先して赤ゾーンに入りスタッフと同じ目線で評価されていた事に感銘を受け、また忙しい中でも面接をされ心身のケアもしてくださった事では心救われました。ありがとうございました。


星野 清香 看護師

陸上自衛隊中部方面隊

私は、災害派遣という形で今回の任務に携わらせて頂きました。陸上自衛隊中部方面衛生隊の隊員と、大阪コロナ重症セン

ターで約2週間勤務をしました。

令和2年12月15日の運用開始に合わせ、開始時の看護業務が円滑となるように努めました。日勤、ロング日勤、夜勤に携わりました。その中で、トランスポーター業務では、同じく自衛隊から派遣された准看護師2名と、業務マニュアルを確立していきました。初めて担当となっても困らないように、業務内容の時間の目安や注意事項等を明らかにしました。また、レッドゾーン勤務では、昼夜逆転により落ち着かない患者様の対応や急変対応も行いました。急変対応では、初めて一緒に勤務をしているとは思えない程、スタッフ間で円滑に連携が取れていたと思います。

今回の任務経験を大学教育においても活かしています。派遣の際は、多くの方にお世話になりました。ありがとうございました。

細見 和宏 診療放射線技師

COVID-19の感染拡大で日本中が不安に陥っている時期に、大阪コロナ重症センターの開設をニュースで知りました。最初は他人事でしたが、人材が不足していると声が掛かり、役に立つ事があるならと志願しました。開設当初は全国的にガウンやマスクなど医療物資が足りない時期でしたが、物資が不足する事も無く関係者の御尽力が感じられました。診療放射線技師の業務としては、分かりやすいマニュアルが整備されており不安無く業務が行えました。マニュアルを作成いただいた急総センターのスタッフに感謝します。宿泊施設は病棟と離れたところに設置いただいております、安心して休息する事ができましたが、プレハブの為、冬は大変寒かった事を覚えています。一つの病棟に全国各地から多くの医療従事者が集い、治療が行われるのを見てチーム医療の素晴らしさを改めて感じる事ができました。この貴重な経験を今後活かしていきたいです。


細谷 映 看護師

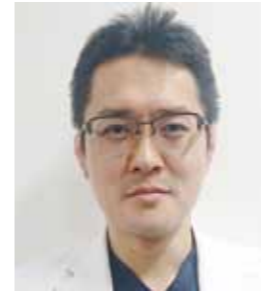
公立学校共済組合関東中央病院

2021年5月に派遣看護師として行かせていただきました。感染防具服を着用して、感染管理や高度医療を提供している現場は、体力勝負であり、精神的にも大変でした。しかしその中でも、患者様や、その家族の方に親身に寄り添い、医療を提供していた環境には凄くやりがいを実感いたしました。

スタッフの方々もとてもテキパキ仕事をして、慣れない医療スタッフ同士のなかでも円滑にコミュニケーションを取りながら業務や教育に当たり、プロフェッショナルな場面をみて、感動いたしました。

このような機会をいただけて、本当に貴重な体験をさせていただきました。大阪府の皆様、また患者様や家族看護に携われて本当に良かったと思っております。ありがとうございました。

私は第6波の終わり頃にOC4に赴任しました。ワクチンが普及したことやオミクロン株へ移行したことから重症患者数は減っていましたが、リスクのある患者さんの中には重症化してしまう方がいました。回復される方もいる一方で、コロナ診療に対する無力感を感じる現場であったと思います。

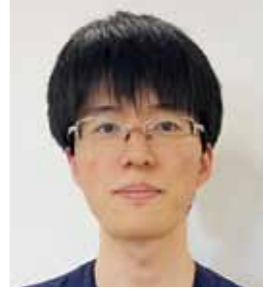

本田 浩太郎 医師

大阪医科薬科大学病院

2022年度より月に1、2回ではありますが、当直勤務させていただきました。自分自身の働きは微々たるもので、多くの重症コロナ患者の命を救えたのはスタッフの皆さんの努力と、完成されたチーム力の賜と思います。高い専門性を備えたスタッフの皆さんが、それぞれの矜持で患者と向き合い、働いている姿を見て非常に感銘を受けました。私の勤務している大阪医科薬科大学からも重症症例を受け入れて貰いありがとうございました。コロナの大きな波が来た時は病床が逼迫し、それでも患者を受け入れて頂いたおかげで、何とか乗り切ることが出来ました。コロナ禍途中からの参加でしたが、大阪コロナ重症センターでお手伝いさせていただき本当に光栄でした。

着任初日にお話をして下さったセンター長の「チーム作りはコミュニケーション、柔軟に、切り替えが大事」という言葉は期間中を通して私の支えとなりました。私自身電子カルテの操作がなかなか覚えられず迷惑をかけたと思いますが、師長さんとの面談で聞き取りをして頂き、レッドゾーンでのケアや、グリーン・イエローでの物品補充等の担当となり、自分にできることを懸命に行いました。メンバーの皆さんと声を掛け合い、コミュニケーションを図り働きやすい職場となるよう努めました。

コロナ患者様のケア経験がなかった私にとって、経験がある他の病院の方々と共に働くことができたことは大きな収穫です。施設は陰圧で、PPEの指導も初日にきちんとしてくださり、安心して勤務することができました。宿泊はきれいなホテルで、勤務時間に合わせた送迎バスがあり、一般企業等からの差し入れもラウンジに置いてくださっており、すべてに優しさを感じました。

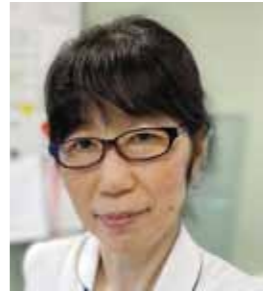

前田 恭兵 医師

 地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

50代の女性の患者さんでした。もともと血液悪性腫瘍の既往がありましたが、入院するまでは自宅で元気に過ごされてい

る患者さんでした。COVID-19に感染してから1週間が経ち、抗ウイルス薬やステロイド加療が行われていましたが呼吸状態は悪化する一方で人工呼吸器管理を行うことになりました。その後の治療で一時は呼吸器を離脱できるまで呼吸状態は改善しましたが、再度悪化を認め人工呼吸器管理が再開されました。治療1ヶ月後に取られたSARS-CoV2 PCR検査のCt値は20以下のままで病勢を保っている状態でした。1ヶ月半、コロナと闘い逝去されました。

私は第6波の終わり頃にOC4に赴任しました。ワクチンが普及したことやオミクロン株へ移行したことから重症患者数は減っていましたが、リスクのある患者さんの中には重症化してしまう方がいました。回復される方もいる一方で、コロナ診療に対する無力感を感じる現場であったと思います。


前田 仁美 看護師

鳥取県立厚生病院

着任初日にお話をして下さったセンター長の「チーム作りはコミュニケーション、柔軟に、切り替えが大事」という言葉は期間中を通して私の支えとなりました。私自身電子カルテの操作がなかなか覚えられず迷惑をかけたと思いますが、師長さんとの面談で聞き取りをして頂き、レッドゾーンでのケアや、グリーン・イエローでの物品補充等の担当となり、自分にできることを懸命に行いました。メンバーの皆さんと声を掛け合い、コミュニケーションを図り働きやすい職場となるよう努めました。

コロナ患者様のケア経験がなかった私にとって、経験がある他の病院の方々と共に働くことができたことは大きな収穫です。施設は陰圧で、PPEの指導も初日にきちんとしてくださり、安心して勤務することができました。宿泊はきれいなホテルで、勤務時間に合わせた送迎バスがあり、一般企業等からの差し入れもラウンジに置いてくださっており、すべてに優しさを感じました。

施設は陰圧で、PPEの指導も初日にきちんとしてくださり、安心して勤務することができました。宿泊はきれいなホテルで、勤務時間に合わせた送迎バスがあり、一般企業等からの差し入れもラウンジに置いてくださっており、すべてに優しさを感じました。



松井 直人 看護師

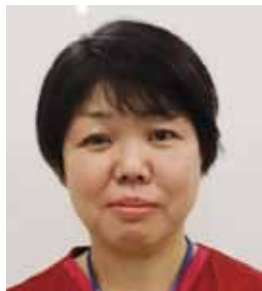
独立行政法人国立病院機構
近畿中央呼吸器センター

2021年5月から6月末まで勤務させていただきました。

まだまだ COVID-19 の全貌が不明瞭な中、患者さんのために

こんなにも多くの仲間たちが一生懸命に看護していたのかと感銘を受けたことを鮮明に覚えています。

それまでそれぞれが実践で培ってきた臨床知を基に、患者の回復を目指したケアを導くために、熱くそして尊重しあって意見を交えられたことは自分にとって大変貴重な時間となりました。



松枝 治代 看護師

公益社団法人大阪府看護協会

2年3か月重症センターに携わることができたことを、誇りに思います。100年に一度と言われるこの災害時に、自分の持つ

資格と経験が発揮できる機会が来るとは想像していませんでした。最初は、コロナも怖い病気として捉えられており、不安が大きかったですが、重症センターの門を叩くと、同じ想いをもち合わせた看護師が揃っており、またメディアで取り上げられる看護師を見ては自分を奮い立たせていたことを思い出します。実際勤務に就くと、システムを覚えること・業務を遂行することで精一杯でした。防護服を装着しN95マスクをつけた状態で、気が付くとREDゾーンに何時間もいました。防護服を脱いだ時には多量の汗をかいていたことを思い出します。そのような中で最後まで働くことができたのは、スタッフとの繋がりや家族といった、自分を取り巻く周りの協力あってこそだったと思います。全国から様々な経験を持った仲間と共に、日々葛藤しながら毎日カンファレンスを通して話し合いを繰り返して一つのものを作り上げる事ができたと感じています。様々な経験を持つ医療者が集まると、自分の専門職としての経験以上に知識を深めることができた一方、コミュニケーションの難しさや大切さを身に染みて悩んだこともありました。

そのような中でも、患者の回復姿を見ることができたときには、心から嬉しく思い、センターからの退室を皆で喜んだことを思い出します。

今後看護師として働く中で役立つスキルとしてここでの成長を活かした働きが様々なところでできるよう励みたいと思います。今まで携わっていただいた方々に、感謝を申し上げます。



松尾 慶一 看護師

熊本大学病院

初日にセンター内のオリエンテーションを受けたときに全身を白のPPEで覆った大勢のスタッフがレッドゾーンの中

にいて、患者の大半が気管切開と人工呼吸器管理をされている様子を見たときに、「エラいここに来てしまった……。」と思った事は覚えています。2023年、現在の状況とは大きく異なり、当時は現在よりもウイルスの毒性も強かった事や、パンデミック初期で治療法はもちろん療養中の管理についても諸説あって全く病態のコントロールが付いていない状況でしたので、人工呼吸器が離脱寸前まで改善していた患者が突然死亡する事なども、私が派遣されていた期間中は珍しい事ではありませんでした。30床のセンターで一晩で3人死亡された事もありましたが、すぐに病床は埋まっていた。このようなシビアな状況でしたが、設備は充実しており人工呼吸器やモニター類も当時の最新か、準ずる水準の物が揃っていましたし、電子カルテも慣れるのに然程苦労せずに済みましたので仕事はとてもしやすかったです。欲を言えば、血ガス測定機はあと2台は設置してもらいたかった事くらいでしょうか。私はレッドゾーン内でしか働くことはなかったので、外廻りの状況の詳細は分かりませんが、一番大変なのが緊急入院（ほぼ全員が緊急ですが）の際の患者の荷物の整理と保管だそうです。感染患者の持ち物から感染が拡大することを恐れて、軽トラ2台分の荷物で家ごと持ってくるような事もあったそうですが、この辺りは当時の混乱ぶりを表していると思います。パンデミックや災害の時は医療者以上に、荷物の仕分けや保管作業に携わってくれる人が大勢必要です。今後、災害やパンデミックの再来への備えとして、事務作業に携わる方々の待遇を良くして、人数が集まるようにする必要があります。



松永 香代 看護師

市立貝塚病院

私は2021年5月から2か月間勤務させていただきました。設備や物品、勤務体制や業務内容などしっかりと整理されてお

り、初日から夜勤でしたがスムーズに勤務に入ることができました。

当初は第4波の真っ只中で、スタッフの入れ替わりが激しく、全国各地の派遣スタッフは慣れない土地でホテル住まいをし、特殊な環境での任務と責任の重さに精神的ストレスも大きかったと思います。教える側のスタッフも短いスパンで入れ替わる派遣スタッフに、繰り返し繰り返し指導していて、現場の空気は張りつめ、目に見えないウイルスとの戦いと看護がそこにありました。しかし手を尽くしても命が尽きてしまい不甲斐なさを感じ、看護師を続ける自信がなくなっていました。そんなある日、仕事開始前に通路で一斉にPPEを装着しているスタッフの姿を見た時、戦場に向かう戦士のように輝いて見えました。みんな同じ思いで戦っているのだと。この経験は私の財産です。



眞鍋 智子 看護師

独立行政法人国立病院機構
近畿中央呼吸器センター

大阪コロナ重症センター立ち上げ時に勤務させていただきました。センター運営開始まで毎日準備が大変でしたが、師長さんや副師長さん、主任さんを中心にみんなでアイデアを出し合い頑張りました。運営開始後も初めてのカルテシステムに戸惑い、普段使っている言葉もそれぞれ違う事に気付きましたが、質問しやすい雰囲気、医師も嫌な顔ひとつせずに対応していただいた事は大変助かりました。また日勤の終わりに、医師も含めた全スタッフで話せる機会があり、みんなで意見を出し合いだんだん1つのチームになっていく貴重な体験をさせていただきました。勤務中はリーダーをさせていただく機会が多かったですが、大体3つくらいのグループで動き、スタッフもほぼ固定だったので、途中で誰が入ってこられたか、誰にフォローをお願いしたらいいか、明確に出来たのも大変助かりました。最後に迎えていただいた方々の準備やお気遣いに、心より感謝申し上げます。



丸山 修平 医師

関西医科大学総合医療センター

関西医科大学総合医療センター丸山修平です。非常勤としてですが、大阪コロナ重症センターが運営開始から終了ま

での期間、従事させていただきました。私が所属する病院もコロナ診療に全力で取り組む姿勢であったため、流行の波がくる度に体力的・精神的に疲れを感じることもありました。しかし重症センターに勤務する多くのスタッフの診療に対する姿勢や、治療を受ける患者の前医からの紹介状を拝見することで、多くの医療従事者が同じように頑張っていると感じ、自分たちも頑張ろう！とパワーをもらっていました。緊急事態での皆さんの対応力を目の当たりにしたこと、多くの先生方とのつながりができたことは、自分にとってかけがえのない経験・財産と感じております。この経験を活かして、不測の事態にも対応できる救急医として研鑽を積んでいきたいと思っております。



三浦 理恵 看護師

社会福祉法人恩賜財団済生会支部
大阪府済生会泉尾病院

令和3年5月1日から5月31日まで大阪コロナ重症センターにて業務に従事した。人工呼吸器管理は行っているが、集

中治療室の経験は無かったため、フィジカルアセスメントの重要性、自分の知識の不十分さを痛感した。1か月間では覚えることに精一杯で、もっとこうしたら良かった、と思うことも多く、看護という視点では不足していることも多かったが、周囲のフォローがあり本当にありがたかった。また、面会禁止のため、週に2回医師と受持ち看護師から患者状態や、家族自身の体調がどうか確認するなど、少しでも不安を軽減できるよう取り組みを行っていた。私自身、当院に戻ってから以前よりも電話で家族に連絡する機会が増えた。大阪コロナ重症センターに行かなければ、ここまで家族にこまめに連絡する必要性に気付くことはなかったように思う。患者や家族に寄り添いながら、いま必要な看護を提供できるようにしていきたいと、より考えられる経験となった。

水島 道代 看護師

大阪医科薬科大学病院

2回にわたり活動させていただきました。初回は、システムやマニュアルの構築過程でもあり、終業時には、医師も看護師も自由に意見を出し合い「安全な医療を目指した」カンファレンスを開催していました。また、インカムによる医師からの看護師への指示は、いつもの確で、看護実践しやすかったです。まだまだ未知の病気だった COVID-19 にスタッフが丸となって挑んだ日々でした。

2回目は、第4波の患者数や死亡数の多い期間でした。毎日どなたかが亡くなられ、空いたベッドには直ぐに新しい患者が入院してこられる状況でした。心身ともに限界を感じていた時は、必ず急総センターの看護師長が、声をかけてくださり、活動期間を満了できました。これらの2度の活動経験は、感染対策や超急性期の看護実践だけでなく、新しい試みにおけるハード面の整備や関わる人々との調整など、学び多き機会となりました。

ありがとうございました。

**水谷 早希** 医師

大阪医科薬科大学病院

私は、2022年に1年間大阪コロナ重症センターの業務に携わらせていただきました。内容としては定期的な夜勤と当直

です。カルテも異なり、慣れない環境での勤務でしたが、重症センターで働かれている医師の先生方を始め、医療従事者のみなさんが快く助けてくださいました。また、施設は仮設の建物でしたが、とても綺麗に管理されており、運営終了間際であってもとても綺麗な状態でした。普段からここで働くみなさんの心がけにより保たれていた環境であったことを実感しており、私が勤務に携わったときも綺麗に保とうと自然と思えるような環境でした。また、様々な経緯で様々な重症度の患者様が多数入院しておりましたが、当直のみの勤務であってもその患者様の現状や問題点、今後の方針を分かりやすくまとめられており、また医療従事者間でもしっかりと統一されていて、重症センターでの医療水準の高さを伺えました。私が大阪コロナ重症センターの業務に携わらせていただいたのはごく短期間ではありますが、素晴らしい環境で、貴重な経験をさせていただきました。コロナ禍の状況で診療の第一線に携わらせて頂いたことは、今後の私の医療にも生きていくと思います。ありがとうございました。

**弥園 英治** 看護師地方独立行政法人
りんくう総合医療センター

大阪コロナ重症センターで働くことになり、COVID-19の病態や治療法が不明な状態での勤務開始でした。働く環境や人間関係など取り囲むすべてが未知であり、不安が大きかったことを鮮明に覚えています。

危険な病気を家族にうつすことを恐れ、勤務中はホテルから出勤し、またホテルに帰ってくるという生活であり、家族とはビデオ通話のみのやり取りで、ストレスが増大していきました。しかしホテルで応援する声を届けていただき、すり減った心を癒すことができました。

色々なスタッフの方々に助けをいただきながら徐々に業務にも慣れ、看護する中での問題点などについて話し合いを行い、柔軟に思考し、PDCAサイクルを回しながら新しい環境の中チームが出来上がっていく状況は、看護師はすごい職業であると改めて実感しました。

一緒に働くことができた素晴らしいスタッフの皆様感謝するとともに、ご支援いただいた皆様に感謝申し上げます。

**道野 真美亜** 看護師

八尾市立病院

大阪コロナ重症センターが運用開始された初期に1カ月応援ナースとして従事させていただきました。当時は COVID-19 患者に対する感染対策、管理方法を自施設で模索しながら取り組んでいたこともあり、重症センターで従事することで他施設の感染対策、管理状況を知る機会となり大変参考にさせて頂きました。自施設に戻ってから自部署（集中治療室）がレッドゾーンとなったため、センターでの経験を活かして整備することができたと思います。

また、様々な施設から派遣されているスタッフと関わることで、他施設での集中ケアや管理方法に関しても知ることができ、自施設での COVID-19 患者の集中ケア、看護に活かすことができたのではないかと思います。センターでの経験豊富な意識の高いスタッフとのディスカッションは意義があり、今後の自己のキャリアアップに関しても考えさせられる機会となりました。貴重な経験とたくさんのご指導頂きありがとうございました。

**南川 美由紀** 看護師独立行政法人国立病院機構
金沢医療センター

最初に、重症センターで中心となって従事された、大阪急性期・総合医療センターの皆様、派遣において環境面でお世話になった大阪府健康医療部の方々、本当にお疲れ様でした。そして、その節は大変お世話になり、感謝申し上げます。

重症センターへの派遣による業務に携わらせてもらい、個人的には緊張よりも学ぶことが多く大変貴重な体験だったと感じています。特に感銘した点は、急総センターの管理者の師長はじめ管理者の方々の対応姿勢です。緊急で集合したバックグラウンドもバラバラな多数のスタッフへの対応において、各個人の意見の傾聴や尊重、配慮があった点です。私は、派遣期間延長を希望した際も調整し受け入れて頂きました。スタッフだけでなく、患者ケアや家族ケアの精神的配慮や安全配慮の徹底ヒヤリハットへの早期対応がスムーズだった点からも、業務環境として良い環境だったと思います。そのため、苦痛なく感染リスクが高い環境でありながらもなぜか安心感があり、楽しく普段通りの業務ができたと思います。

生活環境においても、ホテルの従業員の方はじめ大阪府担当職員の方々の対応やご配慮のおかげで、特に不便なく過ごせました。特に、出勤時の送迎対応は、感染面でも時間管理面でも安心感があり助かりました。

今回の派遣業務において、目標が明確でありその目標に対してリーダーシップの確立した管理者のもと、派遣者としてメンバーシップの必要性を自覚し発揮し協働できた点が大きな学びとなりました。

**三根 達也** 看護師

島根大学医学部附属病院

大阪コロナ重症センターに府外からの派遣ということもあり、ホテルの準備や現地までのバスの送迎、毎朝食も準備されているという環境の調整は自分にとってははすごく嬉しく、感謝しかありません。そのため患者や家族の看護に集中することができ、看護に携わることができて本当によかったと思っています。また、看護をする際にも看護師長をはじめ、従事していた看護師から丁寧なご指導があり、相談もしやすい環境でした。毎日死に直面する辛さもありましたが、患者や家族に接する姿勢など学ぶことも多くありました。医療従事者だけでなく、様々な職種の人が携わりコロナ禍を乗り越えるように奮闘していました。また、大阪コロナ重症センターでの看護に集中できたのは、家族の支えや現場での配慮や調整があり、県外からの応援体制を整えたすべての人の存在があったからではないか。感謝の心を忘れずに、今後も日々の業務に励んでいきたいです。

**箕島 朱里** 看護師

大阪府立中河内救命救急センター

約1か月弱の期間、大阪コロナ重症センターで働かせていただきました。これまで自施設でしか働く経験がなかったので、様々な経験を経た病院の方たちと働くことは、多角的に物事を捉えることができる貴重な経験になりました。それぞれの知識を持ち合いながらも、重症センターの業務マニュアルに則って従事するには慣れるまでに時間を要しました。カルテから薬剤準備やケアの方法は都度教えてもらいました。また、インカムを使用することで看護師のみならず医師とも容易にコミュニケーションを図れ、感染対策をしている中でのツールとして良かったと感じました。常時 PPE を装着している状況でしたが、適宜休憩時間が設けられてレッドゾーン滞在時間が長時間でなかったことは身体への負担軽減に繋がりと、働きやすさを感じました。宿泊施設は綺麗で送迎もあり、困った事はなく、むしろ優遇されていると感じるばかりでした。貴重な経験ができ、自施設でもこの経験が活かされるよう業務に励んでいきたいです。ありがとうございました。



宮内 恵美 看護師
地方独立行政法人岐阜県立多治見病院

2021年の2月1日～1ヶ月間、出向で従事させて頂きました。緊急事態宣言が発出されていたものの30床が満床になる

ことはなく、比較的マンパワーに恵まれた時期だったと思います。着任前は自身の感染と電子カルテの操作が不安でしたが、事前に提供された派遣のしおりやオリエンテーション、徹底された感染対策によって払拭できました。全国から集まったスタッフと協働する上で求められたのは、知識や技術以上にコミュニケーション能力です。お互いをよく知らない状態でのクリティカルケアはいつも以上にストレスを感じましたが、毎日のブリーフィングとデブリーフィングによって和らぐと共に自身の成長へ繋がりました。宿泊するホテルや送迎バスを準備して頂いたことで快適に過ごせましたし、掲示されている「支援ありがとう」のメッセージは心打つものがありました。一緒に従事していた仲間達や関係者の皆様、送り出してくれた自施設に感謝しています。



宮崎 初恵 看護師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

私は管理者として配属されましたが、全てが想像以上に大変で戸惑うばかりでした。その際

間近で懸命に働く師長の姿を目の当たりにし、不安や自分の疲労していく気持ちが吹き飛び、本当の意味で覚悟ができたことを今も覚えています。センターでは、これまでで一番多くの人の死を体験しました。かけがえのない人(間)がご家族に会えないまま、臨終を迎えることは非常に悲しいことでした。何とかオンラインでの面会を整備し、ご家族に画面上で会える機会を作りましたが困難も多かったです。また研修を通して他病院の看護師と沢山の出会いがあり、コロナの対応方法や看護師が抱える不安や困難さ、何かしてあげたいという思いを共有し、お互いに励まし合えたと思います。最後にセンターで共に切磋琢磨しながら働いたスタッフの皆さんには、心から感謝しています。皆さんと一緒に最後までやり切れたことは、自分にとっての誇りです。ありがとうございました。



宮崎 真 医師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

自治医大卒業後の義務年限中かつ母屋勤務中ということで白羽の矢が立ち、2021年10～12月にOC4に勤務しまし

た。出向前日までNICU担当で1～4kg程の赤ちゃんをみていたところからすごいギャップを感じつつ、初期研修以来の成人医療、しかも亜急性期とはいえ集中治療ということで最初はそれはもう緊張していました。OC4への出向が第五波半ばから最後とオミクロン株流行前の時期で患者さんが途中でゼロとなる閑散期となったため、前半は医師、看護師、薬剤師、MSW、いろんな方々に助けられて無事チーム医療で乗り切り、後半は過去の症例振り返りやマニュアルの総編集、防災訓練を行うなど、特殊なOC4の中でも更に特殊な日々を過ごしました。今後活動する畑は人によって違ってもいいかもしれませんが、スタッフの方々との縁も含めて、見聞きしたこと全てがここでしかできなかった良き経験、財産です。皆様に本当に感謝申し上げます。



村井 正美 看護師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

大阪コロナ重症センターが当センター内に開設され、2年4か月あまり、コロナ医療を共に

支え歩むことができました。そして、無事にその役目を終えることができたことは大阪コロナ重症センターに携わってこられたすべての皆様のご尽力の賜物であり、心より感謝申し上げます。当初、私は副看護部長として、大阪府看護協会の人材バンクの採用試験でWEB面接を担当し、全国から応募してこられた看護師さんの使命感と士気の高さに驚いたことを記憶しています。また、2021年度より看護部長の立場となり様々な視点で多くの経験と学びを得ることができたことは今後の管理者としての宝とっております。これからも誇りをもって大阪府域の医療に貢献できるよう邁進いたします。



村田 奈穂 看護師
鹿児島大学病院

私は、2021年5月に2週間大阪コロナ重症センターで勤務いたしました。派遣前は大阪府の医療提供体制が危機的状況

であると報道で取り上げられており、不安はありましたが、それ以上に微力ながら大阪府の医療従事者の力になれることが素直に嬉しかったことを覚えています。実際の施設は、明確なゾーニング、患者・医療従事者・物品の受け渡し等の一方通行化の整理など様々な工夫がされており、期間限定で派遣されているスタッフにもわかりやすく、患者の入れ替わりが多い中でも安心して医療を提供することができました。また、テレビ電話を使用した家族との面会で涙をこらえながら奮起する患者を目の当たりにし、どのような状況下でも最良の医療・看護を提供できる体制作りや研鑽に努めようと思いを新たにすることができました。日本各地から集まった仲間と医療を提供できた貴重な経験を、今後の看護に活かしていきたいと思っております。ありがとうございました。



森田 千尋 看護師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪母子医療センター

自施設では小児が主であり、成人患者の重症症例を見る機会は少なかったため、出向に当たって不安がありました。コ

ミュニケーション能力も看護スキルも高い前任者でさえ、意思疎通に苦戦したと聞いていたからです。前任者からは「分からないことは、何を言われても聞くこと！」とアドバイスを受けて、事前に細かいタイムスケジュールや自施設との電カルや処置・ケア物品の違いを聞いて出向することが出来ました。

赴任初日には看護師長との面談で、「自施設にてバリバリできている人でも、場所が変われば思ったより力が発揮できなくて落ち込まれていた人もいた。だから、ここでできなくても落ち込まないでね。」と声をかけて頂き安心した事を覚えています。実際には「とにかく聞いて」分からないことを質問しながら、無事に業務を遂行することができました。

今では、自施設では知ることが出来なかった、成人患者のその後の経過を知る良い機会になったと思えます。



薬師寺 秀明 医師
地方独立行政法人堺市立病院機構
堺市立総合医療センター

堺市立総合医療センター救命救急科の薬師寺と申します。大阪コロナ重症センターにて非常勤医師として診療に参加させて

いただきました。

2020年に本邦にコロナ感染症が上陸して以降、大阪府内のコロナの感染状況は目まぐるしく変化していききました。その中において大阪コロナ重症センターの役割、立ち位置も刻々と変化していききました。そうした難しい環境の中でセンターの方々、その変化に柔軟に対応し、かつ情熱的に医療を提供しておられました。その様子を非常勤の立場で関わらせてもらいながら、素晴らしいものと感じました。本当に大変だったと思います。現場で働く医療従事者の方々、運営に関わっていたの方々、本当にお疲れ様でした。この経験は未来に確実に生かされるものだと思います。



山岡 亜也子 看護師
滋賀県立総合病院

コロナ関連に従事したすべての皆様お疲れ様でした。大阪コロナ重症センターの役割を終えることが出来て嬉しく

思います。当時私は看護師長になったばかりで、現場の混乱がある中で派遣が決まり不在にする期間の準備と、HCUでの長い経験があっても第一線から離れていた看護実践の知識を詰め込むにはとにかく「時間が無い」と焦りながら準備をしたのを思い出します。準備期間が短いなかでも精一杯の看護ケアが提供出来たのは、一緒に働いたスタッフの個々のスキルが高く、患者に対する想いや目的が同じだと思えたからです。短期間でチームを作ることの難しさがある中、従事するにあたりオリエンテーションや送迎など従事環境を整え様々な配慮があったと感じています。特に古根川師長や田中副師長にはよく声を掛けて下さり、頼れる存在があったこと、たった一ヶ月でも派遣仲間が出来たことが、微力ながらも私には達成感のある派遣期間となりました。



山川 一馬 医師
大阪医科薬科大学病院

この度は3年にも及ぶ活動をお疲れ様でした。重症センターにおける診療支援のおかげで大阪府全体の重症コロナ診療の現場負担が大幅に軽減されたと思います。大変お世話になりました。

この度は3年にも及ぶ活動をお疲れ様でした。重症センターにおける診療支援のおかげで大阪府全体の重症コロナ診療の現場負担が大幅に軽減されたと思います。大変お世話になりました。



山口 香織 看護師
佐賀大学医学部附属病院

私は2週間という短い期間でしたがセンターのレッドゾーンで勤務させていただきました。勤務病院ではコロナ患者の対応

はほとんどしておらず、大阪コロナ重症センターのような場所で勤務するのは初めてでした。勤務してみて正直な気持ちは「精神的にも体力的にもきつい」という印象でした。2週間がとて長く感じたのを覚えています。周りは知らない人ばかり、勝手がわからない場所で長時間の防護服着用とあの閉鎖空間は耐え難いものがありました。しかし他の看護師の方はセンター設立以来ずっとあの過酷な環境で勤務されている方ばかりで、患者さんに対しても面会などにも制限がある中でできるだけ患者さんの希望に寄り添う看護を提供されている事に感銘を受けました。滞在先のホテルでもスタッフの方の温かい対応に感動しました。短期間でしたがあのコロナ禍真っ只中であのような経験が出来た事は自分の大きな自信にもつながりました。ありがとうございました。



山口 朝暉 看護師
特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン
空飛ぶ捜索医療団 "ARROWS"

重症センターへの派遣終了から2年余りが経過しましたが当時の事は今でも鮮明に思い出されます。

慣れない土地での長期間の派遣、まだよくわからない感染症という事もありとても不安な気持ちで大阪に向かった事を覚えています。そのような中でも業務を遂行する事が出来たのは、急性期・総合医療センターのみなさんや立ち上げから勤務されていた先輩方の温かい支援があったからだと思います。レッドゾーン、グリーンゾーンなど色々なセクションで勤務しましたが初めてのセクションで働く時には必ず先輩方のフォローがあり安心して働く事ができました。また、勤務開始前の研修や定期的に行われるカンファレンス、勉強会なども充実しておりスムーズに仕事に取り組む事ができました。働く中で大変な事もありましたが、2ヶ月間の派遣は自分の中でのかけがえのない経験となりました。

この度重症センターが役目を終えると聞きました。最後まで従事されたスタッフの皆様本当にお疲れ様でした。重症センターの皆様と一緒に働けた事を誇りに思います。



山下 寿美子 看護師
独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター

自施設での勤務も長くなり新しい環境で働くことがない昨今。大阪コロナ重症センターへ応援へ行くこととなり緊張して

ましたが、看護師長をはじめ先輩派遣看護師さんの優しい声かけに緊張もすぐに緩和され勤務できた懐かしさを感じています。

ところ変われば処置方法やカルテの違いがあり、戸惑うこともありましたが、看護援助はどこで働いても同じであり全員が社会復帰に向けて質の高い看護の提供を行うという思いは一緒だったので協力して看護実践が行えたのではないかと思います。

1ヵ月半という短い期間のコロナ患者対応でありましたが、私自身はいつも通り楽しく看護実践を行う事ができたと思っています。また、次に来る人のために少しでも業務改善をと定期的に話あうなど、自施設でも取り組めることだと学びもたくさんありました。

こんなことは二度と無いことを願いますが、貴重な経験をさせていただきありがとうございました。



山田 知輝 医師
社会医療法人警和会大阪警察病院

開設時から月1-2回のペースで定期的に勤務させていただきました。私自身は気管挿管、胸腔穿刺はもちろん、緊急胸腔ド

レナージや気切部止血、突然のVF対応など夜間に緊急処置を行う機会が多かったように思います。急遽集まってくれた看護師さんをはじめスタッフの皆さんに迅速・的確に対応していただき大変助かりました。医師も所属施設を越えたチームで治療するという事に充実感がありました。

また、30床のICU運営や重症部門システムなども大変参考になりました。システム障害もあり、常勤スタッフは大変な思いをされたと思いますが、すぐに対応し診療を続けられたことは本当に頭が下がりましたし、僕自身いい経験になりました。初めての夏は湿度が急激に上がり除湿器が急遽導入されてフル稼働してハラハラしたりもしました。

この施設があって本当によかったと思いますし、私自身貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。



山根 泰子 管理栄養士
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

大阪コロナ重症センターには管理栄養士の配置はなく、大阪急性期・総合医療センターの管理栄養士が担当しました。主な業務は食事・濃厚流動食の提供、電話での栄養相談でした。

開設当初は重症患者中心のため、疾患に応じた濃厚流動食を提供していましたが、経過と共に食事の必要性も高くなり、食形態の調整や治療食、食欲不振患者にはセレクト食や栄養補助食品の対応を行いました。医療スタッフや患者さんが選択しやすいように、食事のメニュー表を作成しました。人気のセレクト食は地域性もあり、うどん、たこ焼き、お好み焼き等でした。

入院時に栄養評価を行い、栄養管理計画書を作成しました。直接ベットサイドに行くことはできませんでしたが、重症COVID-19患者は栄養障害を有している可能性が高く、多職種と連携した栄養管理が必要であると感じました。



山根 優介 看護師
島根大学医学部附属病院

大阪コロナ重症センターでの勤務は、クリティカル領域での勤務経験の無い私には不安もありました。しかし、初日に看護

師長と面談があり経験年数や経験部署に応じて担当する患者を決めているということであり安心して勤務ができました。慣れない環境かつ未知の感染症への対応であり心身ともに疲労がありましたが、ホテルの準備やバスの送迎があったことで、厳しい状況の中でも休息を確保することができ、身体面でのサポートとなりました。

今回の派遣勤務で感染管理に興味を持ち、感染管理認定看護師を目指して現在勉強をしています。大阪コロナ重症センターでの勤務が自身の成長・キャリア形成に繋がりに、大変貴重な経験であったと感じます。

最後に、大阪コロナ重症センターでの勤務でお世話になった医療スタッフの皆さまに感謝を伝えたいです。ありがとうございました。



山本 一成 看護師
松江赤十字病院

感染力の強い変異株に変異し、関西中心に流行した第4波、大阪で緊急事態宣言が出された4月25日にセンターへ出向し

ました。島根県の松江赤十字病院に勤務しており、日本赤十字社の派遣の一環でもありました。初めて施設内に入った際、施設の広さと充実した設備、重症患者の多さに圧倒されました。出向した日はほぼ満床で、130名の看護師が必要な中で100名程度しか集まっていなかった。しかし、日本中からICU看護師が集まり、行き届かなかったケアがようやくできる状況になりました。面会できない患者家族のためにオンラインで面会をすると、反応がなかった患者が家族の声援でうなずかれることもありました。慣れない環境下の寄せ集めのメンバーではありましたが、普段一緒に働いている仲間のようなチームワークを発揮できたのも印象的でした。最後に、夜中の遅くまで休みなく勤務していた師長や主任からの温かい心遣いにも感謝致します。



山本 圭介 看護師
京都第一赤十字病院

2021年5月10日～5月20日の間、大阪コロナ重症センターで勤務をさせていただきました。自施設以外での勤務が初めて

ということもあり、派遣が決まった際は「自分の看護実践能力で大丈夫なんだろうか…」と不安が大きかったのを覚えています。現場では、重症患者の早期安定化を図るため治療に当たる先生方や看護師の皆さん、100名以上の看護師を束ねる師長さん、セクション毎に感染予防策を講じながら質の高い看護を提供する看護体制、患者の入れ替わり頻度、どの光景も圧倒されました。そんな中でスタッフの皆さんが心優しく接して下さい、安心して働けたことはとても大きな支えとなりました。

変異と流行を繰り返したコロナに負けず、最後まで役割を全うした大阪コロナ重症センターで働けたことは自身にとっても誇りに思い、これからの看護師人生の大きな糧となっていくと思います。

本当にお疲れ様でした。



山本 伸二 診療放射線技師
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

私は、開設当初の2020年12月17日木曜日から従事しました。PPEをほとんど着用したことがなく、感染対策素人の私

を榎山技師長・西さんはじめ、色んな方に手ほどきを受けながら、緊張して毎日を送っていたことを、懐かしく思い起こされます。

その当時は、次々と運ばれてくる重症患者さんを目の当たりにして、なんと恐ろしい感染症だろうと、今更ながらにコロナウイルスに対する恐怖を覚えました。いつ自分が感染するかもしれない、そのときは、どうなるだろう？との不安がつきまとい離れませんでした。幸いなことに私は今まで一度も感染しませんでした。感染対策の徹底した重症センターならではの、賜物と思っています。

患者さんに対する同情の思いでいっぱいになり、心苦しさはありましたが、仕事に対しては、一切ストレスなく従事できました。的確な指示と判断力、正確な治療で患者さんを救う優秀なドクター。そして積極的に患者に寄り添う優れた看護師。そして何よりも、私たち放射線技師たちを常にフォローしていただいた榎山技師長・西さん。これらの方々に囲まれて、我々技師は何の苦労も心配もなく、日々の業務に取り組めたと思うからです。本当に貴重な経験をさせていただきました。世の中の、まさにど真ん中にいる思いをさせていただきました。40年弱の私の技師生活の中でも、特筆すべき経験でした。センターの皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。感謝に堪えません。コロナ感染でお亡くなりになられたすべての方々のご冥福を、お祈り申し上げます。第9波が来ないことを祈りつつ、重ねて御礼申し上げます。ありがとうございました。



山本 大貴 看護師
社会医療法人 弘道会なほ生野病院

私は、大阪コロナ重症センターの病院派遣の第一陣として従事しました。派遣当日はセンターの開設前で、患者の受け

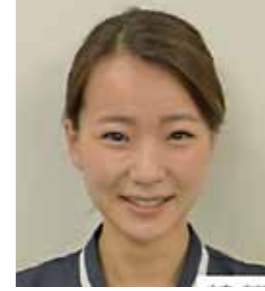
入れシミュレーションや、物品の配置、看護手順、個人防護具の着脱指導などを行うことから始まりました。センターの運用が開始し、患者との関わりが始まったとき、スタッフの大半が初めて会う医療スタッフ、慣れない環境でした。しかし、準備期間から協力してきた過程や、スタッフの信頼関係やコミュニケーションを促進するため、メンバー間でその日のことをフィードバックし、少しずつでもみんなでセンターを良くしていこう！という環境を急性期・総合医療センターの管理スタッフに準備していただき、医療スタッフ全体でよいチームワークを発揮できたと感じます。過酷な環境ではありましたが、同じ目的を持ったスタッフが奮闘していく環境の一員となることができ、そこで得た新たな人間関係もあり、自分の人生の中で価値のある経験となりました。



山本 殊未 看護師
光市立光総合病院

私は「大阪コロナ重症センター」の運営開始の翌日にオリエンテーションを受けてから1か月の派遣活動に従事しまし

た。他地区から派遣された者として、宿泊施設や送迎の手配、弁当の配給をして頂いたことは、生活面でのストレスが軽減され、活動に専念することができました。日勤と夜勤で1日60人近くのスタッフが活動する中、役割は毎日変わり、一度経験したら、次に担当となる未経験者の指導者としてその日の振り返りを行い運用改善案を検討する流れはよかったと感じています。また、医療機器や薬剤名、診療材料、電子カルテや看護記録システムなど、これまで使用してきた物とは違うものが多く戸惑いもありました。しかし全国から集結したスタッフのお互いの経験を基礎にした教示やフォローなどにより任務を無事終えることができました。今回の活動で「助けたい」という共通の思いを持った同志は組織として成り立つということをも身を持って知りました。



山本 有紀 看護師
医療法人穂翔会村田病院

私は1月29日～2月28日までの約一か月間、センターで働かせていただき、とても貴重な経験をさせていただきました。

呼吸状態がかなり悪い患者様もいて循環動態を見ながら、背面開放をできるよう完全側臥位等を積極的に取り入れていました。循環動態管理のためAラインを留置している患者様が多いため、随時血液ガス測定にて評価でき、ケアを重ねることにより自分の勤務帯で酸素化が良くなっていることを実感できることもあり、離床や背面開放等のケアの大切さを改めて感じました。入院中の患者様は家族様と面会はできないため携帯電話を持ってきて頂き、オンライン面会を行いました。最期の看取りに関しては、家族が患者様に触れることができない状況が辛くいたたまれない思いでした。今回、感染対策や看護ケアについて実際にたくさん経験させていただいたことを今後の看護にも活かしていきたいです。



吉崎 美香 看護師
八尾市立病院

第六波の際、病院派遣ナースとして勤務させていただきました。システムやカルテなど全てが新しい環境の中、不安や緊張も

大きかったです。師長を始めスタッフの方々に温かく迎え入れて頂きながら日々を過ごすことが出来、感謝しています。毎日行われるブリーフィングを通じてスタッフ全体でより良い看護を常に模索されたり、オンライン面会や定期的な家族への連絡を行うことで不安の解消を図られていたり、看護に携わるスタッフの熱意を感じ、ここで私に出来ることは、と常に考える毎日、緊張もありましたが学びも多かったです。施設前のベンチでセンターの明かりを見ながらコーヒーを飲み、それから勤務に向かったことは今でも忘れることのない思い出です。

感染看護・災害看護という、私の看護師人生のなかで大変貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。



吉村 旬平 医師

大阪大学医学部附属病院
高度救命救急センター

大阪コロナ重症センターの立ち上げから2021年3月末までの間、常勤の医師として、診療に従事させていただきました。

立ち上げスタッフとして求められた仕事は、診療を行うためのシステムを構築し、患者さんの受け入れる準備を行うことと、より安全で確実なシステムにするため、日々、既存のシステムに修正を加えていくことでした。

常勤医師としての活動は4ヶ月間と短期間ではありませんでしたが、医療の需要と供給のバランスが崩れた状況下で、いかにして新たな医療の供給源を作り、維持していくのかということ学ばせていただきました。今回の経験から学んだことは、「次に発生した医療の需要と供給のバランスが崩れた状況」時にも大変参考になる知見だと思います。得られた知見を今後も社会に還元できるよう努めさせていただきます。



米田 和弘 医師

大阪大学医学部附属病院
高度救命救急センター

2022年4月から現在所属している大阪大学医学部附属病院高度救命救急センターに所属することとなりましたが、OC4に

勤務できるということを知り、救急医としてCOVID-19感染症に携わる機会が得られるのであればぜひお願いしたいと考えて、勤務を希望しました。実際に勤務してみると、スタッフの方々の洗練された動きに驚きました。受け入れ準備、情報収集、来院後の動線、集中治療開始するまでと全ての流れがしっかりと決められており、初めて勤務する私にも非常にわかりやすく整理されていましたし、入室して治療が始まってからも治療方針やRed zoneとのやりとりなど細かなところまで配慮が行き届いており感動しました。非常に短期間での勤務であったにも関わらず、スタッフの皆様が非常に暖かく迎えてくださって本当に感謝しております。貴重な経験をさせていただきますありがとうございます。

米田 智樹 医師

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

成人の救急診療は馴染みがなく、異動の打診があった時は、とても不安であったが、大阪急性期・総合医療センターの救急診療科医師や阪大及び公大の医師がカンファやカンファ以外の業務でも治療方針の相談など気さくに応じてくださり少しずつ不安が解消されていった。看護師さんにも、ご迷惑をおかけした事が多々あったと思うが、色々と教えて頂いた。手技に関しても、小児科ではなかなか機会が少ないCV確保を、かなりの数を経験させて頂いた。人工呼吸器設定の調節なども試行錯誤しながら沢山させて頂いた。日々の小児科診療では経験できないような重症患者の管理の一端を担い、患者様から沢山の事を学ばせて頂き、とても貴重な経験になったとともに、大阪での重症のコロナ患者様の診療に少しでも貢献ができたよかったです。今後の診療などにも、ここで得た経験を活かしていきたい。



若林 大貴 看護師

独立行政法人地域医療機能推進機構
星ヶ丘医療センター

活動前に自施設でもCOVID-19感染症病棟で従事していたが、他施設で知り合いも居る中となると不安が強かった。

しかし、活動当日には丁寧なオリエンテーションがあり、活動そのものやカルテ記載についての心のハードルがグッと下がった事を記憶している。現場では、数ヶ月の間に形作られた流れや雰囲気慣れるのに数日要したが、様々な背景をもつ看護師と患者の事についてディスカッションでき、有意義な時間であった。

当時は未知な部分も多い感染症であり、錯綜する情報の中で試行錯誤し、これまで培ってきた知識や技術を活かしきれない事や力不足を痛感する事も多々あった。中でも、入院して次に家族と会う場面が納体袋で顔も見えない状態という時には本当に心を痛み、集中治療領域の終末期看護について改めて考えるキッカケとなった。

最後になりましたが、重症センターの関係者の方々には敬意を表します。長きにわたるご活躍、お疲れ様でした。



脇田 史明 医師

大阪公立大学医学部附属病院

私は2022年1月～3月の3か月間勤務させていただきました。

勤務する前は駅から遠いし通勤しづらい（その後バスで楽に通勤できることが発覚しました）とか、新しい場所で働く不安が強く、ネガティブなことばかり思っていました。いざ勤務し始めると楽しく働かせていただきました。

大阪急性期・総合医療センターや大阪大学医学部附属病院の先生など普段一緒に働く機会のなかった先生方と働くことができたことは大変貴重な経験になりました。また大阪急性期・総合医療センターの小児科から勤務に来ていた先生がたまたま中学・高校の同級生で、一緒に働くことができうれしかったです。

ちょうど第6波が直撃し、怒涛のように患者数が増え、忙しくてまあまあ辛い時期も正直なところありましたが、他のスタッフの方々にたくさん支えていただきました。

本当にスタッフの皆様の頑張りがあったからこそ施設だったと思います。皆様お疲れさまでした！



脇濱 裕美 看護師

国家公務員共済組合連合会
佐世保共済病院

私は、レッドゾーンでの業務に従事しました。当時は、呼吸・循環ともに生命の危機的状態にある患者が多い時期でした。

レッドゾーンでは、個人防護具をフル装備して行うので、通常の業務以上に体力を消耗したのを覚えています。

看護ケアの中で私が印象深く残っている経験としては、コロナ病棟ではご家族が入室できないため、患者さんがテレビ電話でご家族とコミュニケーションをとっていたことです。ある重症患者さんは、呼吸器管理をしているため声が出せず、加えて四肢に麻痺があり、私がテレビ電話を介助しご家族とコミュニケーションをとっていました。時折、ご家族から送られてくるメールや添付画像を患者さんに説明したり、返信をしました。テレビ電話越しで面会をされたご家族から「看護師さんも危険な状況の中仕事をされていて大変だと思います。体に気をつけてください。」と思い掛らず温かい言葉を頂き看護師をしてよかったと思う瞬間でした。



渡辺 恵 看護師

独立行政法人労働者健康安全機構
東京労災病院

私は、2021年5月18日から6月17日までの1か月間「大阪コロナ重症センター」で勤務いたしました。初日は施設概要

やオリエンテーション、センターの看護師長との面接等丁寧に対応して頂きました。翌日からはすぐにレッドゾーンでの患者受け持ち・対応をしあつという間に1日が終わったのを覚えております。全国から集まった年齢も・経験も様々なスタッフが可能な限りスムーズに業務に取り組めるように毎日デブリーフィングを実施していたり、業務内容・記録の簡素化、スケジュール管理などわかりやすく提示されていました。また、滞在先での宿泊施設やセンターまでの送迎等も十分な対応をしていただきありがとうございました。残念ながら、力及ばず救えずお亡くなりになった方も多くいらっしゃいましたが、ここでの経験を自施設に戻り伝達することで、その後の患者対応において非常に参考になりました。約2年半の運営、おつかれさまでした。



渡部 雄生 看護師

川崎医科大学附属病院

2019年に確認されたCOVID-19は世界的大流行となり、日本でも生活を大きく変化しました。そんな中、大阪コロナ

重症センターが開設され、短い期間でありましたが派遣スタッフとして業務に携われました。主に赤エリアでPPEを着用し、患者の治療・看護業務を中心に働きました。施設内のゾーニングは完全に区切られておりPPEも徹底していたことから自身の恐怖感は少なかったです。しかし、PPE着用し長時間の業務を遂行する上で、視野が狭く必要以上に集中力を求められることや必要以上に発汗するため強い疲労感を感じたことを覚えています。そのような状況で、同じ時期に派遣された仲間とコミュニケーションをとり良い関係を築くことができたことは大変嬉しく思います。宿泊施設も清潔感があり日替わりでお弁当を提供していただき、心が温まりました。大阪府の支えがあったからこそ快適に生活することができました。心から感謝申し上げます。